
5 人の高校生活

月形 竹保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5人の高校生活

【Nコード】

N7741W

【作者名】

月形 竹保

【あらすじ】

コナンと哀を中心に始まった、5人の高校生活。

またも、クラスは分かれることもなく、仲良し5人は探偵部を始めようとするが…。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

一話目なので、人物紹介でほぼ終わってしまいました。
では、ご覧ください。

プロローグ

新一からコナンとなつて一年。

FBIと協力し、組織は壊滅へと追い込んだ。

しかし、哀とコナンの望んだAPTX4869のデータは、組織によりメインコンピュータが破壊されたことで、手に入れられず、解毒剤の研究は頓挫してしまった。

そのまま、数年が経ち、帝丹高校入学式当日。

いつもの交差点に向かう二人。

「あつ！コナンくん、哀ちゃん！！おはよう。」

大きな声で挨拶してくるのは、吉田歩美。人当たりのいい性格で、誰からも好かれる女の子。胸くらいまで伸ばした真っ直ぐな髪を、両耳の上でヘアピンでとめている。

黒目がちな瞳が可愛く、男子からは絶大な人気を誇っている。

高校入試を上位の成績で突破した才媛でもある。

「おはようございます。遅いですよ。お二人共。遅刻したらどうするんですか！！」

と、呆れた顔をしながら話しかけてきたのは、円谷光彦である。

歩美の右横に立つ、長身でそばかす顔の青年。

敬語で話すのは昔から変わらず、礼儀正しいと、上級生の女子から、

絶大な人気を誇る。歩美同様、入試を上位で突破した頭脳明晰さである。

歩美の左横からは、

「おっす！おせーぞ、お前ら！！早く行こうぜ。」

と叫ぶ、小嶋元太。

ガツチリとした体軀は、中学から始めた柔道に因るものだ。

無駄の無い、しなやかな筋肉で引き締まっている。その見た目と、大らかな性格から、男女問わず下級生から人気がある。

3人に答えるように、

「よお、わりーわりー。博士が哀の制服姿を写真に撮りたいってきかなくてな。」

といったのは、古びた黒縁眼鏡を掛けた江戸川コナンだ。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と、三拍子揃った上に、紳士で優しいと、年齢関係なくモテ、その推理力は、警察関係者からも一目置かれる。

コナンの横を歩きながら、疲れたように、

「おはよう。全く、博士にも困ったものだわ。」と呟くのは、灰原哀。

白く透き通るような肌に、翡翠の瞳、赤茶のウェーブがかかった髪は肩口で切りそろえている。

誰もが振り返るような美貌だが、その瞳は冷めていて、人を寄せ付けようとしなない。

才色兼備で、スポーツも得意。人見知りをする性格故か、クールビユーティーと言われるが、男子からの人気は高い。

プロローグ（後書き）

何だか、分かりにくいですね。

誤字、脱字と気づいた方は、知らせていただけると有り難いです。
次話もよろしく願います。

クラス分けとこれから（前書き）

今日、2度目の投稿。
あまり先に進まない…。

クラス分けとこれから

帝丹高校へ向かった5人は、クラス分けの掲示板前で固まった。

「……………」

「これで10年連続同じクラスか。何か怖いな。」

「えゝ？コナン君、コレはもう、奇跡だよ！！」

「そうですよ。神様が5人は分けてはいけないうって言うてるんですよ！」

「少年探偵団は不滅だな！！」

「はあつ。とりあえず、教室に行きましょう。」

哀の言葉で、教室へと向かった。

当然のように、コナンと哀は隣同士に座り、その前に、歩美を挟むように光彦と元太が座った。

入学式は滞りなく過ぎ、放課後。

5人は一緒に帰りながら、これからのことを相談することにし、通りがかったファーストフード店に入り、昼食を食べることになった。

それぞれ食べたいものを注文し、ひとまず食べてしまうことにした。みんなが食べ終わり、歩美は話を切り出した。

「ねえ、部活なんだけど、【探偵部^{クラブ}】を立ち上げない!？」

「え？俺、柔道推薦で来てるから、柔道部に入るぞ？」

「元太君は、兼部って形を取れば大丈夫じゃないですか？」

「推薦で入った奴が兼部ってありなのか？」

「そうね、ちよつと難しいと思うわ。」

「えゝ？そうなの!？じゃあ、どうしよう…。5人いないと部になれないのに。」

「同好会じゃダメなの?」「哀ちゃん…、だって、格好良くないんだもん。」

「だったら、同好会ってつけなきゃいいんじゃないか?」

「そうですよ。【探偵倶楽部】ってするのはどうでしょう?」

言いながら、光彦は紙とペンを取りだし、【探偵倶楽部】と書いてみせる。

「それなら格好いいかも!でも、元太君がいないんじゃ、淋しいね。」

「それについては、俺と哀で先生に掛け合ってみるよ。」

「要は、先生を言い負かせばいいのよね。歩美ちゃん、安心して。どうにかしてみせるわ。」

「わゝい。哀ちゃん、コナン君、よろしくね。」

「ところで、2人とも、高校では、2人が付き合ってること、公にするんだよね?」

「「え…?」「」

「あゝっ!やっぱり、黙ってるつもりだったんだ。」

「いい加減、公表しちゃうばいじゃないですか。何を躊躇ってるんですか?」

「そうだぞ。言っちゃえば、ラブレターも呼び出しも無くなるんじ

「やねーか？」

「まあ、そうなんだよな。哀、公表してもいいか？そうすれば、俺も嫉妬で狂いそうにならなくてすむだろうし。」

「コナン…。そう、そうね。私も、もう嫉妬で胸を痛めるのは辛いわ。」

「良かった。これでみんなに訊かれても、無理に誤魔化す必要ないもんね。」

「良かったです。僕たちも良心が痛まなくなります。」

「よし！明日からは訊かれたら、小2から付き合ってるぞって言うからな。」

「ああ、頼むよ。」

「よろしくね、みんな。」

クラス分けとこれから（後書き）

読んでいただき、感謝です。

次も出来るだけ早く書けたらいいと思います。

ガールズトーク（前書き）

女の子同士の会話は、なんだかちよつと難しい。

途中で回想シーンが入ります。

ガールズトーク

「あつ、やべえ！俺、1時から、柔道部に顔出すんだった！！わりいけど、俺行くな。明日な。」

と元太は急いで荷物をまとめて走っていった。

「じゃあ、解散にする？」

「そうですね。僕たちは帰りましょうか。」

「あ…、あのさ、コナン君、ちょっと哀ちゃん借りてもいいかな？」

「え？まあ、構わないけど。どうした？」

「コナン！！」

強めに名前を呼ばれ、驚いて哀の方を見ると、節目がちに首を横に振っていた。

コナンは、

『ああ、光彦のことか。』

と一人で納得し、頷く。

そして、

「じゃあ、俺も光彦に話があるから、ここで分かれよう。哀、後でな。」

「ええ、後でね。円谷君、また明日。」

「はい、歩美ちゃん、灰原さん、また明日。」

コナンと光彦を見送って、改めて哀の方に向き直り話し出す。

「哀ちゃん、私ね、光彦君に告白しようと思うの。」

「そう。」

「うん、だって、もう待つのは疲れたもん。」

「小嶋君に1個下の彼女が出来たんだから、遠慮しないで言えばいいのに、煮え切らないのよね。」

「私も、光彦君も、同じ経験をしてるから…。」

「え？同じ経験？？」

「うん。私さ、コナン君のことが好きっただたでしょ？あの頃、光彦君は、哀ちゃんが好きだったんだよ。」

「ええ、そうだったわね。」

「でも、2人が付き合い始めて、気付いたの。あれは、恋じゃなかったって。」

「恋じゃない？」

「うん。アレはね、憧れだったの。自分とは違う世界を持った人に対する憧れ。彼といれば、私も同じ世界を見れるんじゃないかってね。」

「円谷君も？」

「たぶんね。あの当時、コナン君も哀ちゃんも、すごく大人びてた。一緒に居ても、二人だけは違うものを見てる気がしてたの。」

「まあ、あの頃はね…。」

「だから、2人が付き合うことにしたって聞いたとき、ショックだったけど、納得できたの。」

「あの後も、変わらず接してくれたものね。」

哀はあの日のことを思い出して、優しい笑みを浮かべていた。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬。

組織壊滅の少し前、コナンは、哀に気持ちを告げた。

勿論、蘭には多少の嘘を交えて説明し、気持ちが他に向かったこと

を告げてからだ。

哀は、蘭に促され、素直な気持ちをコナンに伝えた。そうして、2人は付き合いだしたのである。

告白の翌日、学校に行く道すがら、探偵団の3人にその旨を伝えた。その時の歩美と光彦の顔は、一瞬、悲しみに沈んだが、次の瞬間には、いつもの笑顔を見せていた。

「そっかあ、やっぱりね。そんな気はしてたんだ。歩美は、2人を応援するよ！だって、2人とも同じくらい大事だもん。」

「そうですね。僕もお二人はお似合いだと思います。応援しますよ。」

「だよな！俺も、おまえら二人はくつつくと思ってたぜ。」

「みんな…、ありがとう。」

哀は少し涙ぐみながら、笑顔でお礼を言って、コナンと指を絡めた。コナンは、そんな哀の指をしっかりと握り、

「サンキューな。」

といい、嬉しげに顔を綻ばせた。

~~~~~回想終了~~~~~

「ふふつ。思い出しちゃったね。」

言いながら、ペロツと舌を出した歩美に、

「ええ、良い思い出よ。」

と微笑み返した。

まじめな顔に戻り、

「歩美ちゃん、たぶん、コナンが今頃、円谷君に説教してるわよ。早く告白しろってね。」

「えっ!?!」

「実はね、彼には言ってたのよ。歩美ちゃんが悩んでることをそれでね、せっついて頂戴ってお願いしておいたわ。」

「哀ちゃん…。」

「だからね、あなたから告白はしないで平気だと思うわ。」

「本当!?!ありがとう、哀ちゃん!大好き!!」

「お礼は、ちゃんと告白されてからよ。」

と言うと軽くウィンクをした。

そして、2人は、軽い足取りで店を後にした。

ガールズトーク（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分、女なのに、ガールズトークを書くのに苦労しました。
というか、会話自体が難しいです…。

次は、同じ時間軸で、コナンと光彦の会話です。

迷いと決意（前書き）

予告通り、前話の時間軸で、男の子同士の会話です。

迷いと決意

歩美と哀がガールズトークをしている頃、コナンは光彦を連れて、近所の公園に来ていた。

空いていたベンチに座り、真剣な表情で話し始めた。

「なあ、光彦。高校にも無事入れたしさ、そろそろケジメをつけないか？」

「何の話ですか？」

「歩美ちゃんだよ。気付いてるんだろう？歩美ちゃんが誰を好きなのか。元太だつて悟つたんだ。オメエが気付いてないはず無いよな？」

「コナン君…。そうですね。元太君は、僕を気遣つて、下級生と付き合いだしたんですね。」

「ちよつと違うな。あれは、タイミングが良かったんだ。元太は、中学に上がる頃には、歩美ちゃんのことは諦めてたよ。オメエをせつなくするために敢えて、諦めてないフリをしてたんだ。」

「そんな…。」

「まあ、やつと気付いたんだろ？それが逆効果だったって。だから、前から気になつてた後輩の告白を受け入れたんだ。」

「そうだったんですか。それなのに、僕が行動に移さないから、内心、呆れてるんでしょうね。」

「呆れてると言うよりは、怒ってるかもな。」

「僕はどうすればいいんでしょうか？」

「どうするもこうするもないだろ。明日、朝一で告白しろよ。」

「あつ、明日ですか！？心の準備が…。」

「そんなこと言つてると、歩美ちゃんがしびれ切らして、自分から告白してくるぞ？」

「それは困ります！！告白は、僕からしたいです。コナン君もそうだったんでしょう？」

「ん？俺か？ああ、俺からだよ、勿論。」

コナンはその時のことを思い出し、遠い目をした。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬、組織壊滅の少し前のこと。

その日、FBIからの連絡で、近い内に組織へ乗り込むことが決まった。

コナンの隣でそれを聞いた哀は、何かを決意したような顔で、一つのカプセルを差し出した。

「工藤君、これで、24時間だけ元に戻れるわ。だから、組織との対決の前に、蘭さんに説明してあげて！そして、あなたの気持ちも彼女に伝えてあげてほしいの。勿論、事情を説明するために、私も一緒に元に戻るわ。」

「灰原…。分かった。幼児化のことと、組織の詳細については言わないで、出来るだけ真実を話そう。」

「出来るだけ早い方がいいわね。明日はどう？日曜日だし。」

「ちよつと聞いてみるな。」

コナンは、新一の携帯と蝶ネクタイ型変声機を持ち、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし？蘭か？オレ。新一だよ。」

“新一！？本当に新一なの？今どこにいるのよお。”

「ああ、心配かけてすまねえな。明日、朝10時に阿笠博士の家に来れるか？話があるんだ。」

“心配なんかしてないわよ！明日の10時ね。大丈夫よ。”

「じゃあ、わりいけど、頼むな。明日、待ってるから。」  
“分かった。じゃあね。”

「平気だつてさ。何時に解毒剤飲めばいいんだ？」  
「そうね、朝7時かしら。データもとりたいし。」  
「じゃあ、今日は泊まるな。」

翌朝10時、約束通りに蘭は阿笠邸の門をくぐった。  
出迎えた博士に挨拶をし、リビングに行くと、そこには、新一と見知らぬ美女が立っていた。

「新一！来たよ。おはよう。そちらの人は？」

「ああ、蘭、おはよう。呼び出して悪かったな。彼女は、宮野志保。今、関わってる事件の依頼人だ。」

「ふうん、毛利蘭です。よろしく！」

「…、宮野志保です。」

ペコリと頭を下げる志保。その髪はストレートだった。哀との関係を探られないようにとった対応策である。

「まあ、座ろうぜ。今、コーヒー淹れるからよ。」

「工藤君、私が淹れてくるわ。その間に説明を。」  
と言い、席を立ちキッチンへと向かった。

志保がコーヒーを淹れている間に、大まかな概要は説明した。  
そして、まだ解決しておらず、詳しいことは話せないことも言うておいた。

そして、志保が3人分のコーヒーを入れて戻ってきたところで、  
「ねえ、新一、その事件、解決の目処が立ったから、話してくれて  
るんだよね？」

「ああ、まあな。」

「じゃあ、それが終わったら、帰ってこれるんだよね！？もう、ど  
こにも行かないんでしょ？」

「あ…、いや、もしかしたら、無事には戻って来れないかもしれね  
えんだ。」

「どういうこと？そんなに危険なの！？」

「ああ、敵は、血も涙もない犯罪組織だからな。それに…」

言葉を濁す新一を不審に思い、蘭は先を促した。

「それに、何？」

「蘭、俺、オメエにさ、ずっと、待っててくれって言い続けてきた  
よな？」

「うん。だから、私、ずっと待ってたんだよ。」

「ああ、分かってる。そんなこと言って待たせてたのに、俺は、も  
し、無事に帰ってきてても、オメエのそこには戻らねえ。」

「工藤君！？あなた、自分が何を言ってるかわかってるの？」

「新一…、どういうこと？」

新一は、神妙な顔をして、

「俺、宮野と行動をとにもするようになって、気付いたことがある  
んだ。」

蘭は目だけで先を促す。

「蘭に感じていた思いは、義務感から来る、庇護欲であって、愛や  
恋では無かったんだ。蘭のことは、守らなきゃいけない、大切な奴  
だと思ってた。だけど、宮野は、俺が、自分の手で守りたい、幸せ  
にしてやりたい奴なんだ。」

「貴方、何を言ってるの？それは、姉のことがあったからでしょ！  
！それこそ贖罪の気持ちじゃない。」

「いや、違っただ。確かに、お姉さんを助けられなかったのは、今でも後悔しているさ。でも、それとこれとは違う。オメエの涙を見て、俺は決めたんだ。コイツを一生守っていくと。俺の人生をかけてでも、オメエを幸せにするってな。」

「新一…、そつか。何か、納得しちゃったな。私は大丈夫。実は、昨日ね、新出先生に告白されたの。新一を待ち続けるのも疲れちゃってね、受けようと思ってたところなの。」

「え？蘭さん？本当にそれでいいの？」

困惑した様子の志保に、いつもの笑顔を向け、

「ええ。だから、宮野さん、新一に、ちゃんと答えてあげて。」

「蘭さん、ごめんなさい。そして、ありがとう。」

志保は、涙を流しながら、蘭に頭を下げた。

そして、涙を拭い、新一へと向き直る

「工藤君、私も、初めて会ったときから、貴方が好きだったの。」

「宮野！いや、志保、俺の手でオメエを幸せにしたい。愛してる。ずっと、俺の傍にいてくれるか？」

「ええ！工藤君、私も愛してる、ずっと、傍にいるわ。」

蘭は、二人を見守り、そっと阿笠邸を後にした。

~~~~~回想終了~~~~~

「コナン君？いきなり黙り込んで、どうしたんですか？」

「あつ、いや、ちょっと思い出してな。」

「ちなみに、コナン君は、灰原さんに何て言って告白したんですか

？」

光彦が、興味津々な様子で聞いてくるが、

「へっ、誰が教えるかよ！それは、哀だけが知ってればいいことだぜ？」

「ケチですねえ。」

「で？告白する決心はついたか？」

「はい！頑張ります！僕も、コナン君や元太君に負けてはいられませんからね。」

二人で不敵に笑い合い、しっかりとした足取りで公園を後にした。

迷いと決意（後書き）

ちよつと長くなつてしまいました。

回想シーンは、前話の回想の前の日の話です。

次は、光彦、いよいよ告白か！？

告白↑盗み聞き(前書き)

いよいよ、光彦君の告白です！
その時、3人は…。

告白↑盗み聞き

公園からの帰り道、コナンは、光彦に切り出した。

「明日の朝は、お前ら2人で行けよ。そんな時に告白しろ。元太と哀には言つとくからさ。」

「登校中にですか?」

「ああ、改めて呼び出すのは勇気がいるぞ?」

「そうですね。呼び出す時点で相当緊張しますよね。」

「だから、無理矢理にでも二人きりの状況を作った方がいいだろ?」

「……はい。」

「じゃあ、明日は頑張れよ!」

「コナン君!ありがとうございます。また、明日。」

「おう、じゃあな。」

翌日、待ち合わせの少し前。

光彦はいつもの交差点に、歩美と二人きりでいた。

他の3人はというと、近くのビルの陰で身を潜めて二人を見守っていた。

「なあコナン、あいつ、本当に言えんのか?」

「大丈夫だろ? 昨日、ちよつと脅しかけといたしな。」

「あら、脅し? でも、それくらいしなきゃ、動かないわよね。まったく、奥手なんだから。歩美ちゃんが可哀想だわ。」

「でもよあ、こんなに離れてるんじゃ、会話聞こえねえじゃんか。」

「元太、俺を誰だと思ってんだ? ぬかりはねえよ。昨日の帰り際、光彦の襟の裏に着けといたんだ。」

不敵な笑みで、盗聴器の受信ボタンを押した。

「ふふ。悪い人ね。」

「やるなあ、コナン! 流石だぜ!!」

「おっ！何か喋ってるぞ。」

「おはよー。光彦君！あれ？みんなは??」

「おはようございます。歩美ちゃん。あ…、皆さん、今日は別で行くそうです。」

「え？どうして?」

「あの、そのお、実はですね、僕、歩美ちゃんに話したいことがありまして…。」

歩美は、内心ドキドキと期待に胸を膨らませつつ、

「な・何?」

「あの、歩きながらも良いですか？遅刻するとマズいですし。」
少し、緊張した面もちながらも、まずは、場を和ませようとする。

「そうだね。遅刻はダメだよね!」

「はい。行きましよう。」

歩美を促しながら歩き出した。

その後ろを、一定の距離を保ちながら、ついていく3人。

「なかなか、切り出さないわね。」

「光彦のことだ、何て言おうか迷ってるんじゃないか?」

「なあコナン、学校まで、そんなに距離無いぞ？本当に大丈夫か?」

と、話していたその時、

「歩美ちゃん!あの、僕、歩美ちゃんのことを、好きなんです!」

「言えました。とうとう想いを伝えました。何のひねりもなかったですけど、顔もスゴく熱いんですけど、僕は、頑張りました!」
と、光彦が心の中で叫んでいると、

「…ほん…とう?光彦君、私のこと、好き…?」

歩美は、戸惑ったような、信じられ無いような気持ちで聞き返した。
「はい!本当です。ずっと歩美ちゃんを好きなんです。僕と、付き合ってもらえますか?」

歩美は、嬉しさのあまり、涙を零しながら、

「わ…たし…、私も光彦君が好き。ずっと好きなの。」

「歩美ちゃん！」

光彦は、そんな歩美を、抱きしめた。通学路だということは、最早、頭にはなかった。

あと5分で予鈴がなるという頃、見かねたコナン達が、声をかけた。

「おい、いつまでそうしてる気だ？」

「あと、5分でチャイム鳴るぞ！！」

「これで、学校中に広まるわね。」

抱き合ったまま二人の世界に入っていたため、突然のことに、二人は驚愕した。

「ええっ！！？3人とも、先に行ったんじゃないの？」

「うわっ、あの、その、あ…っ！学校！！早く行きませんか！」

恥ずかしいやら、嬉しいやらで、ごまかしきれないことに気付かない二人。その場をやり過ごそうとするが、

「まあ、詳しいことは、後で聞いわね。歩美ちゃん。」

「光彦！報告しろよ？」

「結果は分かってるけどな。」

口々に言い、3人は走っていった。

残された2人は、顔を見合わせ、微笑み合ってから、急いで後を追うべく走り出した。

「待つてよー！哀ちゃーん。」

「待つてくださいよ！！コナン君、元太君！」

こうして、5人の高校生活は始まったのである。

告白 ↑ 盗み聞き（後書き）

無事に告白成功！！
次は部活かな。

広まる噂（前書き）

前話の直後、教室でのお話です。
探偵団の交際宣言！！

広まる噂

5人が急いで教室に駆け込むと…。

帝丹中学出身者が、それぞれ多数の生徒たちに囲まれるという状況にあった。

理由はもちろん、歩美と光彦の関係についてだ。

しかし、その2人を含む『帝丹中学少年探偵団』は、あまりにも有名すぎた。

男子生徒たちは、

「あの、探偵団の天使、吉田歩美に彼氏が!？」

「ウソだ、嘘だと言ってくれ……!!」

「俺たちの歩美ちゃんが……」

「でも、相手は円谷か…、勝てっこない……。」

などなど、歩美ファンの男子達の嘆きと嫉妬と諦めの声が、学校中、いや、近隣の学校にも響いていた。

そして、光彦ファンの年上女子からは、

「円谷君に彼女が出来たって。」

「えっ? 狙ってたのにい。」

「でも、あの、吉田さんでしょ!? 勝ち目くない?」

「とりあえず、ふられるの覚悟であたってみようかしら……。」

など、未だ諦め切れぬざわめきが聞こえてきた。

ついでと言わんばかりに、コナンと哀の噂、元太の彼女情報も、一緒になって訊かれている。

「おいおい、流石にこれはないんじゃないかねえか？」

「そうね、でも、いいんじゃない？たまには事件以外のことで騒がれるのも。」

「そうだな！全部事実だしな！！」

「ちよっ！！元太君、そんな大きな声で！！！」

「そうだよ！元太君、そんなこと大声で言ったら…。」

「ねえねえ、さっきの話本当！？」

「円谷君と吉田さんって、付き合ってるの？」

「江戸川君と灰原さんも！？」

「小嶋君には一個下の彼女がいるって本当？？」

と、いつの間にか、5人はクラスメート達に囲まれ、矢継ぎ早に質問されていた。

「あゝ！！もう、ちょっと待て。順番に答えるから。な？」

コナンは、若干キレ気味でその場の全員に向けて言い放つ。

「まずは、歩美ちゃんと円谷君ね。」

冷静に話を進める哀に、歩美は頬を朱に染めながら、

「き…今日から、私と光彦君は付き合い始めたの。」

周りの男子へ鋭い視線を向け、

「歩美ちゃんは僕の彼女ですから！！」

と言い、一呼吸置いて、先程より大きめな凛とした口調で、

「僕には歩美ちゃん以外考えられません！」

と言い切った。

少しざわめく生徒たちを余所に、

「言うじゃねえか、光彦！次は、コナンと灰原だな。」

と元太が次を促すと、

「ああ。俺と哀は小2の冬から付き合ってる。」

「かれこれ、7年以上になるわね。」

言いながら、2人は肩を寄せ合い、コナンは哀の腰に手を回した。

「俺には、哀しか女に見えないし、哀さえいい。他はいらないから。」

コナンは皆の前で、哀に甘い言葉を囁く。

哀は照れながらも、

「コナン、私もよ。貴方が隣に居てくれるなら、他に何もいらな
わ。」

と言り返す。

甘過ぎる言葉にあてられる者多数。

故に、コナン・哀ファンは、一瞬で諦めざるを得なかった。

あまりに美男美女過ぎて、間に割ってはいいるのも、些か難しいものがあるのも、理由の一つだ。

そして、最後に、

「俺も、帝丹中の3年に彼女がいるぞ。来年、ここに入ってくる予定だ。俺も、あいつ以外眼中にないからな。」

と、元太は淡々と語った。

5人が話し終わると、友達と話し合う者、ケータイでメールを打ち始める者、どこかに電話しだす者、席につき静かに泣く者などがいた。

しかし、哀とコナン以外、誰一人として気付いていないことがあった。それは、チャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってきていたことだった。

教師としては、注意をしようかとも思ったのだが、何とも、話しかけづらい状況だったため、つい、見守ってしまったのだ。

それがいけなかった。

ホームルームを始めるタイミングを逸してしまい、途方に暮れる羽目になったのだから。

そんな教師を見て、哀とコナンは、部活申請のための作戦を練りだしたのだった。

広まる噂（後書き）

これで、全校に、いや、近隣の学校中に広まったはず。
部活申請の話は、次話に持ち越しです。

勧誘（前書き）

今回は、部活の勧誘がメインです。

この騒動を乗り越えれば、探偵部が立ち上げられるが…。

勧誘

新入生が、学校に慣れてきたある日のこと。
2・3年生による部活への勧誘が始まった。

特に、1-Aの教室では、運動部・文化部共に激しい勧誘が行われていた。

理由は、少年探偵団の4人である。（元太は柔道部への入部が決まっているで特になし）

コナンと光彦には、サッカー部、ミステリー研究部から。
哀には科学部、ミステリー研究部、料理部から。

歩美には、テニス部、新体操部、ミステリー研究部から。
それぞれ、休み時間の度に囲まれて、勧誘されていた。

今までの、探偵団の実績を知り、ミステリー研究部はかなり本気で4人の勧誘に乗り出していた。

しかし、サッカー部も負けじと、男子2人を勧誘しようと躍起になっている。中学時代、2人はサッカー部に在籍していて、共にチームを引っ張り、大会ではそれなりの活躍を見せていたのだ。

歩美への、テニス部と新体操部からの勧誘は、どちらにも仲のいい先輩が居たのが理由だ。中学の体育祭や球技大会で、歩美の運動神経が良いのは実証されていた。

哀への科学部からの勧誘は、ある科学雑誌に載った、哀の研究論文によるものだ。

料理部は、噂で哀が毎食、自分で料理をしていると訊いたからとか。

こんな勧誘の嵐の中、3人は冷静に対応していた。

「先輩方、申し訳ないのですが、私（僕）は、新たに部活を立ち上げる予定ですので、他の部への入部は出来ません。諦めて、教室へ戻って下さい。」

と、毎回毎回繰り返すのだった。

昼休みの屋上で、5人はお昼を食べていた。

コナンは哀に、光彦は歩美に作ってもらい、元太は彼女から登校途中で受け取っている。

それぞれのお弁当を広げながら雑談していた。

しかし、突然真面目な雰囲気になり、コナンは切り出した。

「なあ、そろそろ、本気で先輩方からの勧誘をどうにかしねえと、探偵部立ち上げらんねえぞ？」

「そうね、相手するのも大変だし。何か良い案ないかしら？」

「まずは、みんな共通のミス研部からですね。歩美ちゃん、活動内容はわかりますか？」

「うん。図書室でミステリー小説を読んでも、視聴覚室でミステリー映画観てるかだつて。」

歩美は、元来の人懐こい性格で、探偵団の情報収集を担当している。

「そうか、じゃあ、簡単だな。」

「どうすんだ？」

元太は、特に迷惑はかかってないが、探偵団の一員として、協力は

惜しまない考えだ。

「ああ、ウチの蔵書の話をしりゃいいんだ。学校の図書室程度の蔵書なら、既に読む物はないってな。」

「工藤邸の蔵書は半端じゃないものね。」

そう、コナンは、中学に上がったとき、工藤夫妻と養子縁組みをしたのだ。苗字が違うのは、皆がそれに慣れていたのと、【江戸川コナン】でいると決意したからだ。

「そっか、中学の時に、みんなで読み漁ってたもんね!!」

「では、ミス研部はそれで良いとしまして、コナン君、サッカー部はどうしよう?」

「あゝ、ウチのサッカー部ってどの位のレベルだっけか?」

「地区で上位だけど、全国区じゃなかったはずよ。」

「うん、バランスはいいんだけど、決定力に欠けてるみたい。」

「2人とも、サンキュー。なら、俺たちと勝負をして、こっちが勝つたら、今後一切、関わらないって約束させるか。」

「いいですね!まず負けることはないでしょう。あ、元太君、キーパーやって貰えますか?」

「おっ!俺の出番か!?!いいぜ。任せとけ!!」

コナンは、中学のサッカー部では、実力の半分も出さずにプレーしていた。

光彦は、小学生の頃からコナンとサッカーをしていたので、自ずとレベルは高くなっていったのだ。

元太は、柔道で鍛えた瞬発力とパワーがある上、光彦同様、サッカーセンスもいつの間にか身に付いていた。

この3人なら、例え上級生相手でも負けることはないだろう。

「私の科学部と料理部は、問題ないわ。どちらもレベルが違うから。部に入る意味ないし。あの程度なら、言い負かすのは容易いわ。」

「私の方も、大丈夫だと思う。先輩たちも、ノリで誘ってるだけだし。周りが落ち着いたら、平気のはず！」

「そっか。じゃあ、まずは、放課後、ミス研部撃退だな！」

そこで、昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り、5人は教室へと戻っていった。

勧誘（後書き）

最近の高校には、どんな部活があるんでしょうねえ？

次回は、撃退編です！！

撃退く文化部編く（前書き）

文化部編です。

誤字が有ったので修正しました。

2011/11/04 編集

撃退く文化部編く

放課後、元太を除く4人は、ミステリー研究部の部室の前にいた。

歩美が調べたところ、ミス研は、放課後、一旦部室に集まって、ミーティングをしてから、図書室か視聴覚かに揃って移動するらしい。したがって、ホームルームが終わって直ぐのこの時間は、部室にいるはずである。

「まずは、ココからだな。」

「上手くいくかな？」

「大丈夫よ。歩美ちゃん。彼がちゃんと言い負かすわ。」

「では皆さん、良いですか？行きますよ？」

コンコン

光彦がドアをノックした。すると、中から、

「はい、どうぞ。」

と言って、部員の山本（2年）がドアを開けながら、

「ようこそ。ミステリー研…きゅう……、あつっ!!」

言い終わらぬ内に、驚きの叫びになった声に、

「いきなり大声を出すんじゃない！皆に迷惑だろうっ!!」

と部長の北村から、怒声が飛んだが、山本はそれどころではなかった。

「あ…、ああ、た・たた探偵団!!!!」

「えっ!? なっ何っ! まさか!!? ちょっとどけっ!」

どもる山本を押し退け、北村部長が扉の前に来た。

「こんにちは。部長さん。」

歩美が笑顔で挨拶をする。

「やあ、君たち、やっと入部する気になってくれたんだね!!」

満面の笑顔で北村部長は4人を歓迎した。

しかし、次の瞬間、光彦の言葉で部長以下8人の部員達は、凍りついた。

「いえ、正式にお断りするのに、一応、そちらの活動内容を知っておこうと思ひまして。」

すかさず哀は、

「今日は、何をするんですか？」

と質問を浴びせた。

いち早く、正気に戻った部員が、

「あ、えーっと、今日は、図書室で小説を読む予定だけど。」

と答えると、

「本は、図書室のを読んでるんですか？そんなに、置いてなかったと思ひましたけど。」

とコナンが再び質問をする。

「ああ、図書室のただだよ。持ち込みは禁止にしてるんだ。盗難とかがあると困るからね。」

「そうですか、じゃあ、やっぱり、僕達が入部することはないですね。」

コナンはサラリと言い切った。

やっと先ほどの衝撃的な発言から立ち直った北村部長は、その言葉に、

「なぜ！？君だって、ホームズが好きだろう！！図書室には全巻揃ってるよ！」

どうにか興味を引こうと、ホームズの話を出してみるが、

「ウチの書斎にも全巻揃ってます。僕の養父はあの、工藤優作ですよ？世界中のあらゆるミステリーを収集してます。僕がまだ読んでいないのは、原文で書かれてるものだけです。まあ、それも、もう、

そんなにないですけどね。そんな、僕に図書室にある、何を読めと仰るんですか？皆も、中学の頃にウチで、日本語に訳されてるのは読んでますから、今更読むものありませんよ。」と、淡々と説明した。

すかさず光彦は、

「何か、他に断る理由は必要ですか？」

歩美も、

「それに、私たち、今までの経験を生かして、新しく部活立ち上げますから。」

最後に哀が、

「これ以上、私達を勧誘するのは、止めていただけますね？」と、極上の笑顔で有無を言わず、頷かせた。

固まった部員達を部室に残し、颯爽と去っていく四人だった。

「上手くいったね！」

「事実しかいってないんですけどね。」

「最後の哀の笑顔でKOだったな。」

「これで、ちよつとは静かになるわね。」

教室に戻り、帰り支度をしながら、話していると、

「あ、私、ちよつと料理部と科学部に行ってくるわ。先に帰ってても良いわよ。」

と哀は言って、鞆を置いたまま教室から出て行った。

「あゝ、俺、哀を待ってるから、オメーら先帰って良いぞ。」

「いえ、コナン君、サッカー部のことでちよつとお話しが…。」

「ん？何だ？今日は無理だぞ。元太いねーし。っつーか、やるなら、

昼休みだな。」

「そうですね。僕も、昼休みがいいと思ってました。そうじゃなくて、人数ですよ。」

「人数？」

「はい。キーパー入れて3人はやっぱりツライと思うんですよ。せめてもう一人……。」

「ああ、確かにね。でも、サッカー部の奴らには頼めねーし。あいづら、わざと負けそうだしな。」

「そ、そうですね。どうしましょう？」

2人が悩んでいると、歩美がおずおずと口を挟んだ。

「あ……あのさ、2人とも、……私で良かったら、一緒に戦うよ？」

「……えっ!？」

2人は、思いがけない言葉に、目を見開いて驚いた。

「だってね、私だって、みんなとサッカーで遊んできたよ。運動神経は自信あるし、15分位で良いなら、フルで動けると思うの。」

「歩美ちゃん、いいのか？相手は男子だよ？」

コナンは、気遣うように聞くが、

「大丈夫!!今までだって、男子と試合してたもん。」

笑顔で言い返す歩美。

「でも、サッカー部だって本気で来るはずですよ!!ケガでもしたらどうするんですか!？」

心配しすぎて、少し声を荒げてしまった光彦。

「光彦君、大丈夫だよ。それにね、私だって、探偵団の一員だよ!協力させてよ。ね？」

諭すように光彦に言って、最後は、得意のおねだり攻撃。

そう、歩美は、両手を顔の前であわせて、小首を傾げて見上げるようにお願いのポーズをしたのだった。

2人とも、頷いてしまった。

結局は、歩美に弱いのである。

光彦は、惚れた弱み。

コナンは、かわいい妹のおねだりとして。

そして、そのまま、コナン達3人は、サッカー部のいるグラウンドへ行き、サッカー部に、明日の昼休みに、試合をすること、内容として、

? 人数は、キーパー込みで4人（交代は自由）

? 試合時間は15分

? 試合時間内に、先に3点取れば、その場で試合終了

? 探偵団が勝てば、今後一切の勧誘行為は禁止

? サッカー部が勝てば、コナンと光彦は入部する

との条件で、試合の約束を取り付け、教室へと戻っていった。

3人がサッカー部の話をしている頃、哀はというと、料理部のいる、調理実習室に来ていた。

「こんにちは。部長さん。再三の勧誘のお返事にきました。」

と、哀が無表情でいうと、部長と呼ばれた3年の梶井は、満面の笑顔で歓迎した。

「いらつしゃい、灰原さん。良いお返事を持って来てくれたのね！」

「喜んでいるところ申し訳ないんですけど、私、入部しませんよ。習うべきこともありませんし、部活は、皆と新しく立ち上げますの

で、これ以上の勧誘は止めていただけますか？はつきり申し上げて、迷惑極まりないです。」

と、一息で言い切り、呆然と立ち尽くす部員達をそのままに、調理実習室を後にした。

そして、科学部のいる科学実験室へと向かい、ドアをノックした。
コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。ようこそ……って、灰原さん！！まさか、入部！？」
入ってきた哀を見て、3年で部長の山縣は、喋りながら近づいてきた。

「いえ、これ以上の勧誘はご遠慮願おうと思ひまして、正式に断りにきました。」

「何故！？何がダメなんですか？」

「強いて言わせていただくなら、レベルですね。私の研究論文を読んだんですよ？100%理解できましたか？無理ですよ？高校や大学では習わないようなことも書きましたし。」

「たっ、確かに、僕達には理解できなかったけど、有名大学の教授達が、拳つて誉めてたじゃないか！！そんな人が、何で科学部に入らないなんて言える？」

「理由は先ほど申し上げたでしょう？科学部で、私の研究を進めることは出来ないし、そもそも、理解していない人間と共同で実験しようとは思いませんから。実験のチームは、同レベルの人間が多数いることで、前に進めるのであって、1人が抜き出していたら、そのチームは、教える人と教わる人に分かれるでしょう？私には、教える気はないので、この関係は成り立ちません。今言ったことは理解できましたよね？」

哀の勢いに、啞然とする山縣と部員達。とりあえず、

「あ、ああ……。」

と頷いた。

「では、二度と勧誘などをしに、私の前には現れないでいただけますね？」

無表情で念を押す哀に、

「はい、すみませんでした。」

と、元氣なく応えた。

すると、哀は笑顔で、

「では、失礼しました。」

と言って、実験室をでて、教室へと向かった。

この後、哀への勧誘は一切なくなっただけなのは言うまでもないだろう。

30分程で戻ってきた哀と、コナン達は合流し、帰路についた。

帰り途中、3人は哀に、サッカー部とは、明日の昼休みに試合をすることや、歩美も試合にでることを話した。

撃退く文化部編く（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を付けます。

撃退く作戦会議編く（前書き）

ごめんなさい。だいぶ更新が遅れた上に、サッカーの試合まで行き
着きませんでした。

撃退く作戦会議編く

翌朝、いつもの交差点で、いつものように挨拶を交わした5人は、今日の昼休みのサッカー部との試合について話し合い始めた。元太には、昨晚、コナンがメールをして、基本ルールの説明はしてある。

「とりあえず、位置の確認からしておきましょう。」

光彦は、鞆からノートとシャーペンを取り出しながら切り出した。

「ゴールキーパーには、元太。」

「おお！任せとけ！！」

「センターが俺で、右サイドに歩美ちゃん。」

「私が右サイドね！」

「ああ、で、光彦が左サイド。」

「いつも通りですね。」

「哀は、監督な。相手の分析を頼む。」

「ええ。分かったわ。」

「歩美ちゃん、相手のスタメンは予想できるか？」

コナンの問いかけに、ちよつと考えてから、

「3年でキャプテンの荒木先輩は確実だと思う。ゴールキーパーも、3年の梶井先輩のはず。あとは、3年の日比野先輩と、2年で、元帝丹中サッカー部キャプテンの牛島先輩かな。」

「げっ！牛島先輩！？」

「ヤバいですね。先輩は、僕たちのプレーを知ってますからねえ。」

「でもよお、俺と歩美のことは知らねえだろ？」

「まあ、それはそうか。サッカー部では、俺、本気出してねえしな。」

「そうよ。それに、向こうのデータなら、過去の試合をネットで検

索して、大体揃えたわよ。」

「ああ、昨日遅くまで調べてたのはそれだったのか。」

「あら。気付いてたの？」

「バー口オ、俺が気付かないわけないだろ。いつでもオメエのことを見てるんだからよ。」

少し照れながら見つめ合うコナンと哀に、

「ちよつと2人とも！！いい加減話戻してよね。」

と、呆れたように歩美が言った。

はつとして哀は、

「あら、ごめんなさい。大体のプレー傾向ね。荒木キャプテンは、技術的には中の下って感じがしら。パスは右サイドに回すことが多いわね。キャプテンただけあって、視野が広いから、敵味方両方の動きをよく見てるわ。今回は確実にセンターで来るはずよ。1対1は苦手。コナンなら楽にボールを奪えるわ。」

「中の下ねえ。パスさえ回させなきゃ取れるってことが。ディフェンスについては何かあるか？」

コナンは情報を整理しながら、哀に聞く。

「そうね…。ボールを奪つてるとこは見たこと無いわね。ああ、持久力は有るわ。ボールは奪われなくても、マークは外せないかもしれない。」

コレには、光彦が、

「うーん、少し厄介ですね。でも、コナン君のボールコントロールは秀逸ですからね。大丈夫でしょう。」

そこで元太が口を開いた。

「なあ灰原、シュートは何か、決まったコースとかないのか？」

「シュートは、殆ど外れるから。狙いとしては、いつも向かって右上。」

「そっか。まあ、とりあえず、いつでも右に跳べるようにしとくか。」

「でも、あくまで参考だから。頭に入れておくだけにしなさい。」
「わかった。」

と、そこで5人は高校に到着し、いったん教室に荷物を置いて、屋上へと向かった。

歩美が話の続きを促すために、

「次は、ゴールキーパーの梶井先輩ね。」

と言い、哀が、

「梶井先輩は、動態視力には優れているけど、瞬発力がそれに追いついてないわね。だから、近いところからのシュートに弱いわ。あと、足下を狙ったシュートも止め辛いみたい。」

「じゃあ、なるべく近くから、足下を狙えば私でもシュート出来るかなあ？」

と聞いてくる歩美に、微笑みながら、

「そうね。いけるかもしれないわ。チャンスがあつたら、思いっきり蹴ってみなさい。」

と哀は優しく言った。

「3年の日比野先輩は、たぶん歩美ちゃんの相手になるわ。」

「そうでしょうね。間違いなく、牛島先輩を僕に当ててくるはずですから。」

と光彦が少ししかめ面で言うと、

「まあ、その方が、光彦もやりやすいだろ？先輩の癖は分かっているし。オメエだって、先輩達がいる時は遠慮して本気出してなかったじゃねえか。」

「あはは、気付いてたんですね。遠慮してたの。」

「ああ、いつもの動きと違ってたからな。」

「コナン君には適いませんね。」

と、コナンと光彦が話していると、

「説明続けていいかしら？」

哀はジト目で2人を見る。

「すつ、すみません。」

「ああ、悪かったな。」

と2人は慌てて謝った。

「日比野先輩は、瞬発力に優れているわ。気を付けてないとマークを外されるかもしれない。でも、コントロールは悪いから、歩美ちゃんのスピードがあれば、ボールは奪えるかも。シュートは、キーパーから遠いところを狙う傾向にあるわね。」

「俺は真ん中にいていつでも動けるようにしとくな。」

「私は見失わないようにマークしないとだね。で、取ればボール取るよ!」

「歩美ちゃん、無理はしないで下さいね。」

「分かってるよお。光彦君ったら、心配性なんだから。」

歩美と光彦ははにかんで見つめ合っていた。

「イイ感じのそこワリイけどよお、そろそろ予鈴なるぞ。」

と元太が言ったので、5人は教室へと戻った。

次の休み時間は、教室で作戦会議を進めていた。

「牛島先輩は、知っての通り、持久力は無いわ。でも、今回は持久力関係ないのよね。とりあえず、注意するとすれば、技術力ね。特に得点力に関しては、他の2人とは比べものにならないわ。」

「ああ、でも、光彦なら止められるはずだ。」

「牛島先輩はテクニクは凄いですけど、ゴールまでのコースを考える時間がありますからね。そこを狙えばいける気がします。」

「考えてる時は足下疎かになるもんなあ。あの人。」

「ふふつ。そこは円谷君に任せるわ。」

「とりあえず、そんな感じかなあ?こっちの作戦は?」

5人は、急に真面目な顔になった。

「コナンを中心に左右へパスを回して、各自シュートのタイミング

を計って。ただそれだけで平気よ。コナン、あまり本気は出さないように。円谷君、あなたは本気出して。歩美ちゃんは瞬発力に自信を持って頑張って。小嶋君、ゴールはあなたに任せるわよ。絶対に入れさせないで。」

「よし！徹底的に叩きのめすぞ。でも、歩美ちゃんは、無理するなよ。怪我をしちゃあ、元も子もないからな。」

「うん。無理はしないよ。でも、一点は入れるんだから！！」

「俺は、一点も入れさせねえから、安心して攻めるよな！」

「では、僕は先輩に実力の差を見せつけてあげましよう。」

「その意気ね。昼休みが楽しみだわ。情報の修正は任せて。弱点探すから。」

「よし。後は、昼休みを待つだけだな。」

そうして、昼休みまでの残りの授業に集中するのだった。

撃退く作戦会議編く（後書き）

次話こそ試合です！

撃退！サッカー部編（前書き）

やっと書けました。

サッカー好きな方、寛大な心で読んで下さい。

撃退！サッカー部編

昼休み。

5人は、早めに昼食をすませ、ジャージに着替えてグラウンドへと向かった。

アップのため、ゴールにいる元太に向かってシュートの練習や、パス回しの練習をする。

大団体が慣れてきた頃、サッカー部が現れた。

歩美の予想通りのメンバーが来ていた。

5分ほどサッカー部にアップの時間を与え、試合を始めることになった。

「先輩、正々堂々と勝負しましょう。僕たちは負けませんから！」

コナンは、4人の先輩達に宣戦布告をした。

荒木キャプテンは、ニヤツと笑い、

「ああ、こつちも負けるわけにいかないからな。」

と言って握手を交わした。

コイントスの結果、キックオフは探偵団からになった。

サッカー部は、荒木キャプテンを中心に右サイドに日比野先輩、左サイドに牛島先輩、そして、ゴールキーパーは梶井先輩だ。

『ピーーーーー！！』

試合開始のホイッスルが鳴った。

まずは光彦がコナンへボールを送り、攻撃開始！

光彦は左サイドをゴール方面に駆け出した。

その空いたスペースにコナンはボールを蹴りながら向かい、逆サイドの歩美は一度センターラインギリギリまで下がる。そこへ、牛島をかわして光彦が右サイドに走る。

コナンは光彦へパスをし、すかさず空いた左サイドをゴールへと向かう。

歩美は日比野を置き去りに真ん中へ走り込み、光彦からパスを受け、そのまま蹴り進めてゴールキーパーの左足から少し離れたところに思い切りシュートを打ち込んだ。

思いの外速い球に反応が遅れた梶井は、歩美の蹴った球を止められず、開始早々で1失点をしてしまった。

それが、しかも、年下の女子にである。ショックを受けたのは言うまでもない。

「きゃー！決まっちゃった♪哀ちゃん見た！？先制点だよー！！」
とハシャぐ歩美。

哀は、笑顔で拍手し、

「歩美ちゃん、その調子よ。頑張つて！！」
と声をかけた。

「俺たちも負けてらんねえな。」

「はい、頑張りましょう！次はディフェンスですよ。」

と、コナンと光彦の士気も上がる。

ショックから立ち直りきれしていない梶井は、とりあえず、荒木にパスを出した。

「よし！今の1点を取り返すぞ！！」

と声をかけながら、荒木はボールを蹴ってセンターラインまで来た。コナンは荒木をピタリとマークする。ここで、歩美が、日比野に振

り切られ、真ん中に向かって走り込む日比野にボールが渡った。
何とか追いついた歩美だったが、やはり、コンパスの差が、すぐに振り切られてしまった。

そのまま、日比野は元太から遠い、右上角を狙ってシュートを撃つ。
しかし、それを読んでいた元太にセーブされてしまった。

「くそっ！！」

悔しそうな声がした。

「みんな上がれ！！」

元太は叫びながら、左サイドに上がっていた光彦に思い切りパスをした。

難なく受け止めた光彦は、牛島と1対1でゴールを目指す。

コナン仕込みのボールコントロールで、巧みに牛島を翻弄する。
それをみたコナンは、邪魔をしないように右サイドに寄って場所を空けた。歩美もセンターライン付近で待機している。

流石に、加勢には行けないことを分かっているのか、荒木も、日比野も動けないでいた。

牛島は思った。

『あれ？円谷って、こんなに上手かったか？これじゃあまるで、中学時代の江戸川みたいじゃないか！円谷は、ちよつと上手いけど、周りに埋もれるタイプじゃなかったか？ここまで個人プレーで抜きん出てる奴じゃなかったはずだ。』

光彦は、それに気付いて、不敵に笑って、

「先輩、僕の実力は、あの頃とは違いますよ。今が、全力です。」

と言って、用は済んだと言わんばかりに、牛島を抜き、ゴールへと向かった。

牛島は、『しまった！』と思い、必死で追いかけて、スライディングで足下のボール目掛けて滑り込むが、楽にかわされた上に、シュートを撃たれてしまった。

光彦の蹴った球は、左に寄って待ち構えていたキーパーの右上を通り抜け、ゴールネットを揺らしたのだった。

「よつし！！2点目！」

とコナンは光彦とハイタッチをする。

歩美は光彦に抱きついて喜んだ。

「光彦君スゴい！」

「あ、歩美ちゃん、皆さんが見てますよ！！」

「おい、ディフェンスに戻るぞ。」

冷静なコナンの声に、赤面しながら光彦が返事をする。

「はっ、はい！歩美ちゃん、戻りますよ。」

「うん。」

そんな3人を微笑みながら見守っていた哀だが、急に険しい顔になり、牛島に鋭い視線を向けた。

『マズいわ。牛島先輩のあの目。不穏な気配がする。マークを変えさせようかしら。』

と考えていると、コナンと目があつた。

コナンも牛島の不穏な気配に気付いたらしい。

哀に向かって頷いてみせるコナンに、哀も頷く。

すると、コナンは光彦に向かって行き、

「光彦、荒木先輩についてくれ。何だか、悪い予感がするんだ。」
と言った。

「え？はあ、いいですけど。」

と答え、荒木先輩へと向かって駆けていった。

荒木は、今度は牛島にパスを出した。

「なあ、江戸川。お前は中学の時、全然本気出してなかったよな？」

円谷もなのか？」

と目が完全に据わり、睨みつけるように聞いてきた。

「はい。俺は、本気なんか出しませんよ。昔も…今もね。光彦は、先輩達を立てるのに、力を抜いてただけですよ。」

と、仕方無さそうに説明した。

少し考え込む牛島の足は、ほぼ止まっていた。

その隙についてコナンはボールを奪いつつ、

「先輩、あなたがそんなだから、光彦が本気を出せなかったんですよ。」

と言って、そのまま、ゴールへと一直線に向かう。

それに気付いた光彦と歩美は、フォローのため直走る。

ディフェンス陣は完全に出遅れてしまった。

そして、キック力増強シューズが無くても、充分に強くなった脚力で、キーパーの真正面、足の間を狙ってシュートを撃ち込んだ。

あまりのスピード、そしてパワーに微動だに出来なかったキーパーの後ろでゴールネットが揺れた。

開始から、12分後の出来事だった。

当初のルール通り、時間内に3点先取したので、試合は終了になった。

「先輩方、約束です。今後一切、サッカー部への勧誘は止めてくださいね。」

とコナンは、荒木キャプテンに握手を求めながら言った。

「ああ、約束だ。それは守ろう。みんなにも言うておく。」

「ありがとうございます。」

「牛島先輩、今まで、本気を出さずにいてすみませんでした。」

光彦は、牛島に向かって頭を下げた。

「いや、江戸川に言われて目が覚めたよ。俺達が弱すぎたんだな。気を使わせて悪かった。」

「いえ。では、先輩は、これからもサッカーを頑張ってください。僕たちは、探偵を頑張りますから。」

先ほどの不穏な気配はすっかりと消え、晴れ晴れとした笑顔になっていた。

最後、お互いに、

「ありがとうございました。」

と頭を下げて、試合は終了したのである。

その日以降、探偵団への部活の勧誘は無くなった。

撃退くサッカー部編く（後書き）

なんか、サッカーのルールとか無視でごめんなさい。
私にはコレが限界でした。

次は探偵部の活動内容が明らかに！？

探偵部（前書き）

探偵部、いよいよ発足！

誤字が有ったので、修正しました。

2011/11/04 編集

探偵部

部活勧誘も落ち着きを見せ始めたある日。

サッカー部との試合が、他の部にも噂になって聞こえ、探偵団への勧誘はすっかり影を潜めていた。

「なあ、そろそろ部活申請しないと始められないぞ?」

と、5人が屋上でお弁当を食べているときに、コナンは話し始めた。

「そうですね。まずは、申請内容を決めませんと。」

と光彦が応える。

「活動内容だよね。どうしようか?」

と歩美が訊いた。

「基本的には、『コナンに掛かってくる警察からの応援要請に応える』でいいんじゃないかしら。」

と哀が提案すると、

「ああ、そうだな。あとは、事件がない日だけど、その時は、『各自、探偵に必要な知識を身につけるための勉強をする』でどうだ?」
コナンは、前から考えていたことを言ってみた。

「うん! いいかも。私達、事件に遭遇しても、解決するのは大体、コナン君と哀ちゃんだもんね。私は情報収集位しかできてなかったし。良い機会かも。」

と、歩美は前向きに考えていた。

「僕も、良いと思います。コナン君や灰原さんに比べると、僕の知識は全然、足元にも及びませんからね。将来のことを考えても、勉強しておきたいです。」

光彦もコナンの意見に賛成だ。

「俺は、大体、柔道部の方に出てるから、何も出来ねえけど、良い

と思うぜ！！」

と、元太も頷いた。

「私も、まだまだ調べたいことがあるし、折角だから、医学だけじゃなくて法学とか、経営学も勉強したいわ。」

と哀も前向きだ。

「じゃあ、今日の放課後にでも、申請書作るか。」

「うん。歩美、後で申請用紙貰ってくるね。」

「僕も行きますよ。歩美ちゃん。」

「じゃあ、頼んだわね。2人とも。」

「あつ！俺の兼部の問題はどうすんだ？」

思い出したように元太は訊いてきた。

「ああ、それは、今日の放課後にでも、担任に聞いてみるさ。ちょうど柔道部の顧問だしな。」

「そうね。アレなら、言いくるめ……いえ、説得できそうよね。」

「じゃあ、ワリーけど頼むな。俺は今日も部活だから。」

「ああ、任せとけ。」

などと話していたら、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

そして、放課後。

ショートホームルームが終わり、担任教師が教室を後にしようとしたとき。

「先生！阪東先生！！！！少しお話があるんですが、お時間いただけますか？」

とコナンは哀と共に、担任の阪東先生に声を掛けた。

「ん？なんだ？江戸川に灰原。今すぐか？」

と不思議そうな顔で聞き返してきた。

「部活動の新規発足についてなんですが、教室にいるので、後で来ていただいても大丈夫ですか？」

と哀が尋ねた。

「おう、じゃあ、荷物置いて、日誌に目を通してからでも良いか？30分しないで戻ってくるから。」

と阪東先生は聞き返した。

コナンと哀は、笑顔で、

「はい、では、お待ちしてます。」

と言って、軽く頭を下げて、机へと戻っていった。

コナンたちと入れ替わりで、歩美と光彦が、

「じゃあ、申請用紙取ってくるね。」

「行ってきます。」

と言って教室を出て行った。

「確か、申請用紙とかは、教員室に入って右側の棚にまとめて置いてあったよね？」

「はい。そのはずですよ。大丈夫です。すぐ見つかりますよ。」

など、会話をしながら、教員室へと向かっていた。

教員室に着くと、すぐに用紙を3枚ほど取って、教室へと戻って行った。

「あれ？歩美ちゃん、3枚も持って来たんですか？」

と光彦は歩きながら尋ねた。

「うん、だって、書き損じるかもしれないでしょ？予備だね。」

「ああ、そういうことでしたか。」

「大丈夫だと思うけど、一応ね。」

「ちよっと見せて貰えますか？」

「うん。はい、どうぞ。」

と、歩美は持つて来た内の1枚を光彦に差し出した。

「ありがとうございます。」

光彦は、それを受け取り、立ち止まって内容の確認をする。

「えーと、まず、部活名で、次に部員の学年・クラス・名前と、合計人数、それから活動内容で、最後に顧問になる先生の名前と承認印ですか。」

と光彦が呟くと、

「あっ！顧問……。」

と歩美がはっとして呟いた。

「とりあえず、コナン君と灰原さんに相談しましょう。」「そうだね！行こう。」

と、急ぎ足で教室へと戻っていった。

「おかえり。二人とも。」

「わざわざ悪かったな。」

と、コナンと哀は2人に言った。

「まだ先生戻って来てないんだよ。」

「先に申請用紙書いておきましょう。」

と言われた2人は、席に着きながら、申請用紙を渡した。

「ねえ、2人とも、ココ……。」

と、顧問記入欄を指差しながら、歩美が呟いた。

「ああ、そうだな。誰かにお願いしないといけねえんだよな。」
とコナンが応えた。

「そうね、誰かいないかしら？どこの顧問もやってない先生いるかしら？歩美ちゃん、調べられる？」
と哀が歩美に訊くと、

「うん。去年の卒業アルバム見れば大体分かるはず。あとは、それ

を元に先生たちに聞き込みしてみるよ。」

「じゃあ、僕も一緒にします。コナン君たちは、先生と話していただきます。」

「ああ、わかった。頼むな。」

「こっちは任せて。」

歩美と光彦は、再び教室を後にし、図書室へと向かった。

そのすぐ後、担任の阪東が教室に戻ってきた。

「江戸川に灰原、待たせて悪かったな。」

と言いながらコナンたちの座っている席まで来た。

「いえ、こっちが無理をお願いしているんですから、気にしないでください。」

とコナンが笑顔で言うと、

「そうか？じゃあ、さっきの話だが…。」

と話を切り出した。

「はい。先生は、柔道部の顧問をしてらっしゃいますよね？」

「ああ。」

「では、少しお願いがあるんですが。」

「何だ？」

「僕たち、新しく『探偵部』を立ち上げようと思ってるんです。」

阪東が口を挟む前に、哀が言を継ぐ。

「それで、部員は私達と円谷君、吉田さんなんですけどね？部になるにはあと一人、足りないでしょう？」

そのまま、阪東には口を挟ませずに、コナンと哀が、交互に話を進めていく。

「小嶋元太も、部員に入れたいんです。本人も最初から入る気満々です。」

「でも、彼は柔道推薦で来てるでしょ？」

「柔道部を疎かにしようとは思ってないんです。」

「ただ、探偵団の一員として、探偵部には参加したいというのが、本人の意向なんです。」

「メインでやるのは、勿論、柔道部です。ただ、俺達にとっても、元太…、いえ、小嶋は必要な存在なんです。」

「「どうか、探偵部にも部員登録させて貰えませんか？」」
と、2人は深々と頭を下げた。

そんな2人に圧倒された板東は、無意識の内に頷いてしまった。

「あ…、ああ。分かった。」

それを訊いた2人は、満面の笑みを浮かべ、

「「ありがとうございます。」」

と再び頭を下げた。

「じゃあ、遅くならないうちに帰るんだぞ。」

と言つて教室を出て行つた。

「はい。ありがとうございました。」

「さようなら。」

と、2人も立つて応えて、先生を見送つた。

「何とかなつたな。」

「ええ。やっぱり簡単だったわね。」

「ああ。犯人追いつめるより遙かに楽だな。」

「ふふつ、比べるものじゃないわよ。」

と、哀は微笑みながら、コナンの肩に頭を持たせ掛けた。

「ははっ。そうだな。」

と応えながら、コナンは哀の腰に手を回して、引き寄せた。

そのまま、しばらくそうしていたが、廊下の方から足音が聞こえて

きた。

パツと2人が離れた瞬間、勢い良くドアが開いた。

「ただいま。」

「お待たせしました。」

と言つて、歩美と光彦が入ってきた。

「おう、どうだった？」

「何か収獲あった？」

とコナンと哀は口々に訊く。

すると、歩美がにっこり笑つて

「うん！！見つけてきたよ。」

と言つた。

「あら、やっぱり2人は優秀ね。こっちも、OK貰ったわよ。」

と哀が言つと、

「本当ですか！？さすがお二人ですね。」

「まあな。で、そっちは、結局誰がいたんだ？」

「あつ、うん。あのね、1 - Bの担任の、大友先生。新任で、まだ

何も担当してないんだつて。」

「話をしてみたら、顧問になっていただけのそつですよ！」

「おつ！でかした。2人とも。じゃあ、さつさと記入しちまおう。」

「

と言つて、コナンは、新規部活動申請用紙にペンを走らせた。

？部活名 探偵部

？部員

部長：1 - A 江戸川コナン

副部長：1 - A 灰原哀

部員

1 - A 円谷光彦

1 - A 吉田歩美

1 - A 小嶋元太
以上、5名

？活動内容

- 1・警察からの応援要請に応え、事件解決に尽力する。
- 2・警察からの要請が無い時は、各自、探偵として必要な知識を身につけるため、勉強する。

例：法学、医学、薬学、経営学、語学など。

？顧問

1 - B 担任 大友永嗣

ココまで書いて、コナンはペンを置いた。

「あとは、顧問の承認印だな。」

「ええ。まだいるかしら？」

「いるはずですよ。」

「大丈夫！待っててくれるって言ってたもん。」

と話ながら、四人は教員室へと向かった。

「失礼します。1 - Bの大友先生いらっしゃいますか？」とコナンがドアを開けて訪ねると、

「はい。」

と声が返ってきた。

「おっ！探偵部だな。待ってたぞ！」

と言いながら大股で近づいてきた。

「お待たせしてすみません。これが、申請用紙です。内容の確認をお願いします。」

と、コナンが紙を差し出す。

「ああ。……、ん？この小嶋って、柔道部の有力株か？兼部させて大丈夫なのか？」

「あ、それは、柔道部の顧問で私達の担任の阪東先生に了承を得ました。」

と、哀が説明する。

「そうか、ならいいが。ん？この、警察からの要請って、どういうことだ？警察が高校生に事件解決を頼むわけ無いだろう？」

「先生、この辺の人じゃないんですか？僕達、すでに小学生の時分から、警察と事件を解決してきてるんですよ。」

「帝丹小（帝丹中）少年探偵団って言えば、この辺りじゃ、結構有名なんですよ！」

と、光彦と歩美は自慢気に言った。

「あ……ああ、そうなのか？じゃあ、それもいいでしょう。あとは、問題ないな。よし、ちよつと待つてろ。」

少し後退り気味で応え、用紙を持って机に向かった。

そして、判を押してコナンに返しに来た。

「ありがとうございます。後は、生徒会に提出して、承認を貰えば、活動開始だな。」コナンは、先生にお礼を言い、振り返って皆に話しかけた。

「はい！じゃあ、早速生徒会に提出に行きましょう。」

「5時まではいるらしいよ。」

「まだ間に合うわね。行きましょう。」

と話して、四人は教員室を後にした。

そして、生徒会室へ着き、ドアをノックする。

「失礼します。すみません、1-Aの江戸川と申しますが、会長はいらっしゃいますか？」

すると、奥から1人の女生徒が近寄ってきた。

「はい？会長は私ですけど。何ですか？」

と、スラッとした長身で、髪を短く切りそろえている女生徒が名乗

り出た。

「あ、沢村会長ですね？今、お時間よろしいですか？新規部活動申請用紙を記入して来たんですが、目を通していただけますか？」

と言つて、コナンは申請用紙を差し出す。

会長はニコリと笑つて、
「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、拝見しますね。」
と言つて、書類に目を通す。

4人は、ドキドキして会長の言葉を待っていた。

「はい、探偵部ですね。部員は5名、活動内容も特に問題ないわね。いいでしょう。承認します。木村君、ハンコ取つて。」

会長は、コナンたちに向かって笑顔で言つと、後ろを振り向いて、副会長の木村に話しかけた。

木村は、承認印を渡しながら、

「はい。どうぞ。」

と声を掛ける

「ありがとうございます。では、探偵部の活動を、本日付けで承認します。但し、くれぐれも怪我などしないように活動してください。」

木村に礼を言い、4人に向き直つて言つた。

4人は、満面の笑みで、

「……はい。」「……」

と返事をし、

「ありがとうございます。失礼します。」

と頭を下げ退出した。

「やったね！コレで探偵団、活動再開だよ！！」

「いや、ちょっとドキドキしちゃいましたね。でも、良かったです！」

「本当、良かったわ。活動は明日からで良いわね？」

「ああ、俺も、警部たちに連絡しとかないと。応援要請来なくなっちまうな。」

そう、入学から今まで、一度も警察から連絡がないのは、コナンが警部たちに、落ち着くまで、応援要請は待ってもらうように話していたからだ。

新一の時とは違い、授業中の呼び出しもやめてもらっている。

「とりあえず、今日はもう帰るか。」

「そうね。お夕飯の買い物もあるし。」

「そっか。じゃ、帰ろう。」

「一旦教室に戻って鞆取ってこないといけませんね。」

「ああ、じゃ、行こうぜ。」

と言って、四人は鞆を取りに行き、仲良く帰って行った。

探偵部（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を引き締めて、頑張りますので宜しくお願いします。

報告（前書き）

お待たせしました。
短いです。

報告

探偵部が発足したその日、コナンは、自宅の電話から目暮警部に電話をかけた。

ブルルル、ブルルル、ブルッ

『はい、目暮。』

「あ、もしもし？目暮警部ですか？」

『そつ、その声は！！工藤君かつ！？やっぱり生きて……！！』

「あの、すみません、江戸川コナンです……。」

『あつ、ああ、コナン君か。いや、勘違いしてすまなかつたね。』

「いえ。気にしないでください。ところで、僕と新一お兄さんの声ってそんなに似てますか？」

コナンは、本人なんだから、当たり前と言えば当たり前のことを訊いてみる。

『ああ、そうだね。よく似ているよ。声だけじゃなく、顔も、頭脳もな。』

目暮は電話の向こうでしみじみと言う。

「……そうですか。」

『だがな、コナン君、君の方が工藤君より、視野が広い気がするよ。やっぱり、仲間がいると違うのかな？そう言えば、探偵団の子たちは元気かい？』

「あつ、今日はそのことで電話したんです！」

『ん？高校には慣れたかな？』

「はい。それで、今日なんですけど、探偵部を発足したので、授業中以外でしたら、捜査協力が出るようになったんです。」

『本当かい！？部活にしたのか。じゃあ、こちらからも学校側に話をした方がいいかな？』

「いえ、その辺は、活動内容に、警察からの協力要請に尽力すると

明記して、活動許可を取ったので、問題はないはずです。」

『おお、そうか。じゃあ、事件が起きたら、すぐに電話しよう。』

「はい、では、何かありましたら。これからも宜しく願います。」

「

コナンは電話口で頭を下げた。

『こちらこそ、よろしく頼むな。じゃあ、コナン君、また。』

「はい。失礼します。」

と言ってお互いに電話を切った。

コナンが電話を切ると、

「電話、終わった？警部さん、何か言ってた？」

と、エプロン姿の哀が近づいて来た。

その腰をさらう様に引き寄せて、

「ん？ああ、新一と間違われたよ。」

肩をすくめて、優しい笑顔で言うコナンに、

「そう…。」

少し俯いて小さな声で返す哀。

そんな哀を抱きしめて、

「哀、まだ気にしてんのか？コレで良かったんだよ。」

「…っでも！」

涙目になりながら言い返そうとした哀に、

「哀？俺は愛するお前と人生を歩んでいけてるんだ。これ以上幸せなことはない。な？」

真剣な瞳で見つめ、流れる哀の涙を唇ですくった。

「だから、もう泣かないでくれ。いつもの優しい笑顔を見せて？」

コナンの言葉に、哀は涙を拭いながら微笑んだ。

「ありがとう。私も愛してる。とっても幸せよ。」

「ああ、誰よりも愛してるよ。よし！じゃあ、夕飯にするか？」

「ふふっ、そうね。今日はオムライスよ。」

2人は肩を寄せ合いながらリビングへ行き、夕飯を食べるのだった。

報告（後書き）

目暮警部の喋り方がいまいちつかめない…。
次回は何か起きるかな？

教師と刑事

目暮警部に報告の電話をしてから、早数日。

警察からの応援要請もなく、平和な日々を過ごしていた。

「ねえ、みんな！もうすぐゴールデンウィークだよ！！」

歩美がワクワクした顔で話し掛ける。

「そうですね。今年はどうしましょうか？元太君は柔道部で合宿があるって言っていましたけど。」

光彦は少し残念そうに応えた。

「あ、そう言えば、博士が、奥多摩の方に友人のコテージがあるって言ってたわよ。」

哀は思い出したように言った。

「ああ、そう言えば言ってたな。どうする？今年は4人で行くか？コナンは哀に頼きながら、みんなに訊いた。

「うーん…あつー！良いこと思いついちゃった」

歩美が何かを閃いた。

「なんですか？歩美ちゃん。」

「「???」」

「あのね、私たちも、合宿にしちゃおうよ！」

「ええ？合宿ですか？」

「うん、もちろん、先生の許可を取ってからだけどね。」

「まあ、そりゃそうだな。」

「でも、合宿って、何するの？学校に居たんじゃ、事件は起きないわよ？」

「って、哀、なんかそれじゃ、『出掛けると事件が起きる』みたい
な言い方だぞ？」

「あながち間違いではないんじゃないですか？コナン君。」

「そうだよ。皆でどこかに出掛けると、いっつも事件起きるし。」

「そうよね。誰かさんが事件吸引体質だから。ねえ？名探偵さん？」
「俺かあ？」

「はい。」

「うん！！」

「他に誰が居るかしら？」

「ははは……、はあ。」

「ふふつ。まあ、そんなことより、やるなら、先生に許可取らないと。」

「そうだね！合宿内容きめちゃおう。」

「まずは日時ですね。」

光彦は机からノートを取り出し、何も書いていないページを開いた。
「あゝ、じゃあ、5月2日～4日とか？二泊三日ぐらいでいいんじゃないか？」

「そうね。だれか、予定がある人居る？」

「大丈夫だよ。」

「僕も大丈夫です。」

「じゃあ、日にちは決まりね。場所は……。」

「博士の友人のコテージでいいんじゃないか？」

「うん、そうだね。学校じゃ何も起きそうにないもんね。」

「では、5月2日～4日で、奥多摩のコテージ……っと。」

光彦は確認しながらノートに書いていった。

「内容はどうする？」

「とりあえず、オーソドックスに親睦を深めるとか？」

苦笑しながら光彦は、

「それは、既にだいぶ深いかと……。」

「そうね。まあ、事件が起きない限りは、各自勉強かしらね？解らないところは、お互いに訊けばいいし。」

と哀がフォローした。

「それが妥当だろうな。」

コナンも、哀の意見に賛同した。

「じゃあ、それで行きましょう。えーと、事件が起きない限りは、各自勉強する…ですね。」

光彦はノートに書き込み、満足そうな顔をした。

「じゃあ、先生に許可取りに行こつ
ふふふ」

と、4人は教員室へと向かった。

探偵部の4人が合宿の相談をしていた頃。

教員室には、3人の男女が訪ねてきていた。

「すみません、探偵部の顧問をしている先生はいらっしゃいますか？」

一番年の若い男性が話し掛ける。

「あつ！はい、私ですが。どう言つたご用件でしょうか？」

探偵部顧問の大友は、見知らぬ3人の男女を警戒しつつ、用件をきいた。

「あ、突然申し訳ございません。私、こういうものでございます。」
と言つて、年配の男性は、懷から警察手帳を出し開いて見せた。

それに倣い、年若い2人の男女も、手帳を取り出し、開いて見せた。

「警視庁捜査一課の目暮と申します。」

「同じく、佐藤です。」

「高木です。」

と名乗つた3人に、

「あつ、えー、探偵部顧問の大友と申します。」

とあわてて名乗り返した。

「今日は、どう言つたご用件で？探偵部の子たちが何かしでかした

んでしょうか？」

少し青ざめた様子で、訊いてくる大友に、

「ああ、いや、違うんです。あの子たちは、警察に迷惑を掛けるような人間じゃありませんから。」

高木は、苦笑しながら言い返した。

「では…？」

安心した大友だが、そうなるとう件が気になった。

「ええ、今日は、探偵部の子たちを度々借りることになるので、ご挨拶にと伺ったんですよ。」

佐藤は、笑顔で言った。

「いや、コナン君には、ちゃんと許可は取ってあるから大丈夫だと言われたんですが、それはそれ、一応、ご挨拶だけはと伺った次第で。」

と、目暮が苦笑しながら付け足した。

「えっ！？じゃあ、彼らが、度々事件を解決してるって言うのは本当のことなんですか？」

「おや、知らなかったんですか？彼らには、小学生の頃から、協力してもらってるんですよ。」

「えっ！？」

「新聞に載ったこともありましたよ。地元では、結構有名ですし。」

「最近では、あの工藤新一の再来かと言われてるくらいです。特にコナン君が、工藤君とそっくりだね。」

「まさか…、本当だったなんて。」

「ん？どうかしましたかな？」

「彼らは、とても優秀な子たちですよ。私たち警察や、大人が相手でも、一歩も引かず、事件の全容を素早く組み立てて、推理し、犯人を見つけだす。卒業したら、すぐにでも警察に欲しい人材ですよ。」

「いや…、そんな、高校生になったばかりの子供に対して、買いかぶり過ぎじゃないですか？」

「何を言ってるんですか！？あれほど優秀な子たちはそうそう居ませんよ。工藤君以来…いや、それ以上かもしれません。」

「そっそんなにですか？」

驚きを隠せずにいる大友に対し、3人は大きく頷いた。

「貴方も、これから、あの子たちと行動を共にすれば嫌でもわかりますよ。彼らがどれほど優秀か。」

「彼らは、手掛けた事件は、確実に解決してくれるので、また、協力をお願いしますが、授業中は避けるので、安心して下さい。」

「は…はい。」

大友は、既に聞いた話だけで、頭がいつぱいになっていて、頷きはするものの、気はそぞろだった。

3人は、挨拶をすませると、呆然と佇む大友をそのままに、颯爽と教員室を後にした。

教師と刑事（後書き）

次回は、ゴールデンウィークの話です。

合宿？1日目（前書き）

ちよつと長くなっちゃいました。

合宿？1日目

5月2日 午前7時50分

探偵部の5人は帝丹高校の正門前にいた。

4人は私服に、1人は学校指定のジャージに身を包んでいた。

「おう！おまえら、俺はこのまま柔道部に行くけど、気を付けて行けよ。何かあったらメールしろよな！！」

元太は大きな声で言った。

「ああ、おめーも怪我しないようにな。」

「お土産買ってくるからね♪」

「柔道部、頑張つて下さい。」

「貴方は何も心配せずに柔道に集中しなさい。じゃないと、怪我するわよ。」

コナン、歩美、光彦、哀と、それぞれが元太に声を掛けた。

「おめーらも、怪我しないようにな。休み明け、どんな事件が起きたか教えるよ。じゃあな！」

元太は言うだけ言つと、校内に向かって走って行ってしまった。

「…はは。アイツまで何か起きるって確信してやがる。」

コナンは、半ば諦めたような顔で呟いた。

「起きるでしょ？」

「起きますよね。」

「起きるわね。」

「おいおい…。」

3人に断定され、コナンは、がつくりと肩を落としてうなだれた。その時、

「みんな、おはよう。全員揃ってるな？」

と、顧問の大友がやってきた。

「……おはようございます。」「……」

「はい。大丈夫です。行きましょう。」

「じゃあ、出発！ところで、何が起きるんだ？」

大友は、駅に向かって歩き出しながら訊いた。

「え？」

「さつき、起きるって言ってただろ？」

「ああ、それはですね、何らかの事件が起きるって話してたんですよ。」

「はあ？そんなもん、そうそうあるわけ無いだろう？」

「何言ってるんですか、起きますよ！絶対に。だって、コナン君が居るんだもん！！」

「いや……歩美ちゃん、そんなに力説されても。」

「先生、この合宿中に、私達のこと、少しは分かるんじゃないかしら？」

「この合宿の目的は、先生に俺たちのことを知ってもらうことなんですよ。」

「ん？そうなのか？」

「ええ、先生、顧問なのに私達のこと、何も知らないでしょ？」

「いや、少しくらいなら知ってるぞ。」

……回想……

警察の人たちが帰ったあと、俺は、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

そこに、探偵部の4人はやってきた。

「あつ！！大友先生！」

「良かったです、ちょうど居て下さって。少しお話よろしいですか？」

吉田と円谷が、にこやかに話し掛けてきた。

俺は、その声で、やっと正気に戻った。

「え？あ、ああ……。どうした？」

2人の後ろでは、江戸川と灰原が少し訝しげな顔をしている。

「先生こそ、どうかなさいましたか？」

江戸川が探るような目で訊いてきた。

鋭いな。だが、警察の人たちが来たことは言わない方がいいだろう。

「いや？別に何でもないぞ。そっちの用は何だ？」

ごまかしきれてはいないだろうが、まあ、良いだろう。

「あ、はい。ゴールデンウィークのことなんですが、親睦を深めるために、合宿をしませんか？」

「先生に何の予定もなければですけど。」

吉田が上目遣いで聞いてくる。仕方ないなあって気になるのは何故だろう？

「特に予定はないが、いつだい？」

「5月2日～4日。奥多摩に、私の保護者の友人が持つてるコテージがあるから、そこで。」

灰原は、的確に用件だけを言う子だな。

「分かった。許可しよう。当日は電車で移動だな。朝8時に正門に集合しよう。小嶋は無理だよな？」

「はい、彼は、ゴールデンウィーク中ずっと、柔道部の合宿がありますから。4人だけです。」

「そうか。分かった。じゃあ、今日はもう良いか？ちょっと調べ物をしないといけないんだ。」

探偵団について、少しでも調べていかなければ！

「そうですか。では、僕達も、警察からの呼び出しもないみたいなので、帰ります。失礼しました。」

「おう。気を付けて帰れよ。」

「はい！失礼します。」

よし、みんな帰ったな。

取りあえず、彼らの担任に訊いてみるか。

「阪東先生、ちよつとお聞きしたいんですが。」

「何ですか？大友先生。」

「先生のクラスの江戸川、灰原、円谷、吉田、小嶋の5人なんですが、彼らが、探偵部を立ち上げたのは知ってますよね？」

「ああ。小嶋の件で相談もされましたから。」

「元々、少年探偵団として活動をしてたつて聞いたんですが、何か知ってますか？」

すると、阪東先生は目を見開き、

「えっ！？彼らを知らないんですか？」

「そんなに有名なんですか？」

「ええ、それはもう！！特に江戸川です。彼は、工藤新一の遠い親戚らしいんですが、彼譲りの推理力は、警察ですら舌を巻くほどですよ。それに、中学に入るまで、あの、眠りの小五郎の下に身を寄せてたつて話です。」

阪東先生は、いつになく饒舌になっている。

「へえ、あの眠りの小五郎のねえ。そこで経験を積んだんですね。」

「そうですね！それに、灰原！！彼女も凄いんですよ。大人すら知らないような、薬学・医学の知識で、江戸川の良きパートナーになつてるんです。あの2人は、他の3人とは、比べものにならないくらい、知識が豊富なんですよ。きっと、あの2人みたいのを天才つて言つんでしょね。」

しみじみと言う阪東先生。

「それは……。」

もう、言葉すら出なくなってきた。

「円谷と吉田も、頭の回転が速く、行動力もあるんですが、やはり、あの2人と一緒にいると、目立たなくなるんですね。小嶋は、あ

の中では、異質な感じですね。頭はあまり良くないが、行動力はあるんですよ。それに、柔道を始めてからは、犯人の確保で活躍するようになったとか。」

俺は、最後の言葉に度肝を抜かれて、つい、大きな声を出してしまった。

「犯人！？確保？？？えっ？彼らは、今までどんな事件に遭ってきただんですか？」

「あゝ、挙げたらキリがなさそうなんで、簡単に言いますが…、殺人、強盗、放火、誘拐、監禁等ですかね。」

阪東先生は苦笑してるが、俺には笑えない…。

「そっそっですか…。ネットとかで調べれば出てきますかね？」

「出ますよ。帝丹／少年探偵団で調べれば一発です。」

「そうですか。帰って調べてみますよ。」

その後、俺は、家のパソコンで調べてみたんだ。

分かったのは、彼らは尋常じゃないほど、事件に出くわしているってこと。それに、全てをちゃんと解決に導いている。

事件の詳細や、解決方法が、細かく載っているわけではなかったが、彼らがその場において、後に警察から表彰を受けているという事実は載っていた。

「これは…、俺、大丈夫か？まあ、しばらくは様子を見るしかないな。合宿中に彼らを観察して、今後の対応を決めるか。」

～～～回想終了～～～

「先生？何をボーツとしてるんですか？電車、出ちやいますよ。」

「あっ？え？ああ、すまんすまん。」

数日前のことを思い出していた大友は、慌てて電車に乗り込んだ。

「それで？先生、何をボーツとしてたんですか？」

「いや、何でもない。」

「何でもないわけ無いですよ？僕達のことでしょう？」

「…ああ。まあな。顧問なんだから、お前たちのことを少しは知っておかないと思って、調べたんだ。」「おかしいですね。この前まで、全然気にしてなかったと思いましたけど。」

「何か、調べようと思ったキツカケでも？」

「いや、別に。」

明後日の方向を見ながら言う大友に、

「警部たちが挨拶にでも来たんじゃないんですか？それで、興味を持った。」

呆れたような顔でコナンは言った。

「そうね。きつと、合宿の許可を取ったあの日ね。あの時から様子がおかしかったもの。」

哀は、コナンに頷きながら言った。

「でも先生、どうせ、調べたっていつても、誰かに聞いたとか、ネットで調べたくらいでしょ？」

「それじゃあ、僕達を知ったことにはなりませんよ。今日からの3日間、よく見ていて下さい。」

歩美と光彦は、意味ありげに言って、笑顔を見せた。

「おい、それはどういう意味」

「あつ！次ですよ。降りるの。皆さん、準備して下さい！」

光彦は、大友が言い切らぬ内に言葉を発し、降りる準備を促した。

「コラッ！俺の話が途中だぞ！」

大友は怒るが、

「先生、そのうち分かるわよ。それまで待つてなさい。」

哀は静かに言った。

「ああ、先生は、俺達を見てるだけでいいんだ。」

コナンは真剣な様子で呟く。

「江戸川？」

「降りますよ。先生。後、バスで15分位です。」

「おい？さっきのはどういうことだ？見てるだけって…。」

話を逸らしたコナンだが、思いの外食い下がる大友に、ため息混じりで、

「言葉の通りですよ。夜にでも、哀と3人で話しましょう。」

「そうね。今後のことをいろいろとね。」

「あ…、ああ。分かった。」

そんな会話をしていると、バスが来た。

「さあ、これで、15分行ったとこですよ！乗りましょう。」

光彦が先頭でバスに乗り込んでいく。

バスには、地元の人らしいおじいさんやおばあさんが、数人乗っていた。

5人は、邪魔にならないように、一番後ろに一列に並んで座ることにした。

運転席側から、大友、コナン、哀、歩美、光彦の順番だ。

他愛のない会話をしながら、バスが動き出すのを待っていると、優先席に座っていたおばあさんが、急に胸を押さえて苦しみだした。

「うううっ…！」

「はっ…！！哀！」

「ええ。」

それを目に留めたコナンは哀に合図をして立ち上がり、駆けつけた。

「もしもし？どうなさいました？苦しいのは胸ですか？」

哀は、おばあさんの横に膝立ちになり、背中をさすりながら話し掛ける。

「あ…ああ…」

おばあさんは、うめきながらも、何とか頷いた。

「どなたか、この女性とお知り合いの方はいらっしやいませんか？」

コナンは、周りの人たちを見回しながら、話し掛けた。

「は、はい。友人です。」

1人の女性が手を挙げた。

「この方は、何か持病でもありますか？何か普段から薬を飲んでいるとか。」

「はい。心臓があまり丈夫じゃないと言っていました。」

「ありがとうございます。哀、荷物に薬が入ってないか？」

哀は、コナンに言われて、カバンに手を入れた。

「カバン、ちよつと失礼しますね。……あつ、あつたわ。」

コナンは振り向き、

「光彦、歩美ちゃん、水持っていないか？」

「あるよ。待ってて。」

歩美は、急いで鞆から、ペットボトルに入った水を取り出して、コナンに渡した。

「サンキュー！哀。」

「ありがと。」

哀は、水を受け取ると、おばあさんを支えながら薬と水を飲ませた。

「さあ、お薬です。慌てなくて大丈夫ですよ。ゆっくり、ゆっくり。」

：大丈夫ですか？ゆっくり呼吸して下さい。」

哀は、おばあさんに優しく声を掛けながら、落ち着かせた。

少しすると、呼吸が楽になったようで、弱々しいながらも笑顔で、

「すみません。ありがとうございます。」

とお礼をした。

「いえ。お気になさらずに。」

「大丈夫ですか？」

「おばあちゃん、手を貸すから、ゆっくりでいいんで、椅子に座りましょう。」

「さあ、手を。」

歩美と光彦は、おばあさんを両側から支えて、ゆっくりと椅子に座らせた。

「何から何まで、すみませんねえ。」

「いえ。お役に立てて何よりです。」

コナンが笑顔で言うと、

「でも、心配なので、近い内に病院に行って下さい。」

と、哀も控えめな笑顔で話し掛けた。

「ええ。本当にありがとう。」

「どういたしまして。では、僕達は、次で降りるので、失礼します。お大事に。」

と言って、コナンたちは、自分たちのシートに荷物を取りに戻った。それを、一部始終、無言で見守っていた大友は、4人の的確な対応に戸惑っていた。

周りにいた大人たちも、驚いてる様子だった。

「先生、降りますよ。」

声を掛けられ、ハツとして荷物をつかみ、バスから降りていく。

その時、3人は、先ほどのおばあさんに軽く会釈をしながら降りていった。

しかし、コナンだけは、おばあさんの知り合いだという女性に、

「あの、申し訳ないんですが、まだ、本調子には戻れないと思うので、家まで送ってあげてもらえますか？」

と聞き、女性が、

「あ、はい。分かりました。」

と答えると、

「じゃあ、すみませんが、お願いします。」

と言いながら、頭を下げ、バスを降りていった。

そして、5人はコテージへと向かった。

合宿？1日目（後書き）

合宿編、まだまだ続きます。

合宿？1日目／顧問の苦悩／（前書き）

まだまだ事件は起こりません。
今回は、顧問が悩みます。

合宿？1日目／顧問の苦悩／

コテージに着いて、一休みした後、お昼までは、各自、自由行動になった。

コナンは、最近、哀に借りて読むようになった、薬学の本を読み始めた。

哀は、工藤邸の書斎から拝借した経営学の本を読んでいる。

何故、哀が経営学の本を読んでいるかというと、

～～～回想～～～

ある日、哀とコナンは書斎にいた。

哀は、ある本を手を持ちながら、

「ねえ？この本、借りてもいいかしら？」

と言った。コナンは、頷きながら、

「ん？経営学？いいけど、急にどうした？」

と問い返した。

「この先、必要になるかと思って。」

「え？あ、ああ。そうか？」

「貴方、高校を卒業したら、大学に進むでしょ？法学部のある。その後、探偵事務所を開く予定だし。」

「ああ、そうだな。哀は、また、医学か薬学に進むのか？」

「いいえ、私は、それは十分だわ。だから、経済学部があるところに行こうと思うの。」

「経済？灰原哀で、博士号は取らない気なのか？」

「ええ。必要無いわ。知識だけあれば、あなたの役には立てるでしょ？」

「それはそうだけど……。」

「それに、経済学部なら、貴方の探偵事務所を少しは手伝えるわ。」

経営を私がやれば、貴方は事件と推理に集中できるでしょ？」

「哀……。ありがとう。そこまで考えていてくれて。」

「当然のことよ。私は、貴方なしでは生きられないもの。」

「俺も、オメエのいない人生は考えられないさ。」

コナンと哀は、お互いの愛の深さに感動し、どちらからともなく歩み寄り、抱きしめ合った。

「哀、大学を卒業するまでは、待つつもりだったんだけど……、高校を卒業したら、結婚しないか？」

「コナン！？……本当？いいの？私で。」

「哀、お前以外はあり得ない。」

「嬉しいー！」

哀は、コナンを抱きしめていた腕に、さらに力を込めた。

コナンも、哀をぎゅっと一層強く抱きしめた。

~~~~~回想終了~~~~~

と言うことがあったのだ。

それから言うもの、哀は、書斎に置いてある経営関係の本を度々読むようになった。

光彦と歩美は、大友が何かを考え込んでいるのが気になり、

「せーんせつ！何考えてるの？」

と歩美が話し掛けた。

大友は、驚いて顔を上げた。

「えっ！？な、何だ？」

「いえ、先生が何か考え事をしているようなので話し掛けてみただけなんです。」

驚く大友に対し、光彦は冷静に答える。

「どうしたの？先生。」

歩美は小首を傾げながら訊いた。

「ああ、さっきのことを思い出していたんだ。」

「さつき？ってバスのおばあさんのこと？」

「ああ、おばあさんを心配なさってたんですね。」

光彦は、納得したように頷きながら言った。

しかし、大友は首を横に振りながら、

「いや、違う。お前たちのことだ。」

と言いつつた。

「え？私達？？？」

「何か、おかしいことでもありましたか？当然の対応をしたただけですが。」

光彦も、歩美も、訳が分からないといった様子で聞き返す。

「いや、対応は素晴らしかった。俺が考えていたのは…、あの時、おばあさんの周りには何人が大人もいただろう？だが、一番早く、しかも迅速に動いたのは、江戸川と灰原だった。他の人、円谷、吉田、お前たちや俺を含めて数人は、反応すら出来ずに事態を見守っていた。…何故、あの二人は直ぐに反応出来たのか？その原動力は何なのか？それを考えていたんだ。」

大友は、考えていたことを、一気に吐き出した。すると、少し不満そうに、

「先生、それは間違ってるよ！私と光彦君は、反応できなかったんじゃないもん。動く必要がなかったただけだもん。」

と、歩美は頬を膨らませながら言った。

「そうですね。あの時は、コナン君と灰原さんが先に動いたので、僕達が出る幕は無かったんです。あのお二人は、僕達より、遙かに色々な状況に対処できる知識を持っているんですから。」

光彦も、大友に言い聞かせるように話し出した。

「だから、コナン君は、お水が必要になったときに私達に声を掛け

たんだよ。あの中で、事の成り行きを見ているだけじゃなくて、すぐに動ける用に待機してたのが、私達だけだったから。」

と歩美が説明すると

「あ…、確かに、あの状況で水を求められても、反応できた人はいなかったな。だが、あの二人の冷静さはどこから来るんだ？」

大友は、少し納得したが、まだ疑問が残っていた。

「あれは、経験に因るものじゃないですかね？」

「あと、探偵として、困ってる人とか、苦しんでる人をほっとけないんじゃない？ほら、死体を見逃せないようにさ。」

歩美が笑顔で言い放った最後の一言に、大友は、がっくりとし、

「いや、死体は見逃したいだろ…。」

と呟いた。

「何を言ってるんですか、見逃したら、僕達の活動意義が無くなります。」

と、光彦は胸を張って言った。

大友は、あまりの価値観の違いに戸惑い、話を逸らすことにした。

「あゝ、いや、そつそれよりも、今まで遭遇した事件のことを教えてくれないか？ネットの情報だけじゃ、ダメなんだろう？」

光彦と歩美は少し視線を交わし、頷き合った。

「今までのと言われましても、沢山ありすぎまして、何を話せばいいやら…。」

光彦は、少し困ったように言ったが、歩美は、楽しそうに、

「先生はどんなのを聞きたい？殺人事件？放火犯捕まえた話？誘拐事件？それとも、危なかった話？」

と訊くと、大友は、顔をひきつらせながら、

「一番印象に残ってるのはどんな事件だ？」

と訊いてみた。

すると、そこで、

「ねえ、そろそろお昼じゃないかしら？」

と哀が本を置いて呼びに来た。

「話は、昼飯食いながらでもいいだろ？」

コナンも、哀と一緒に立っている。

「そうですね。まずは、お昼の準備ですね。」

光彦は賛同した。

「うん！じゃ、作ろう、哀ちゃん。」

歩美は笑顔全開で哀に言う。

「ええ。作りましょうか。コナン、貴方はテーブルセッティングよ。円谷君は料理できるなら手伝って頂戴。先生は座ってていいわ。」  
哀は皆に指示を出した。

「ああ、わあってるよ。」

「はい、お手伝いします。」

「ああ。分かった。」

コナンは少しふてくされ、光彦は張り切り、大友はぼんやりと返事を返した。

そして、テーブルには、形の綺麗なオムライス、スープ、サラダが並んだ。

「さあ、食べましょう。」

と哀が言うと、

「」「」「頂きます。」「」「」

と一斉に言って食べ出した。

少し食べ進めたところで、

「さっきの話だが、何が一番印象深かったんだ？」

と大友が切り出した。

「そうですねえ。やっぱり、ツインタワービル爆破事件じゃないですか？」

「うーん、そうだね！あつ、古城の事件も命がけだったよ！」

「哀が転校してきてすぐに偽札事件もあったな。」

「スキーに行こうとしたら、バスジャックにあったわよね。」

「先生、どれがいい？それとも、全部？」

「え？あゝ、じゃあ、簡単な概要だけ全部聞くな。」

大友は、何ともいえないような顔で答えた。

その後、途中でお茶休憩をしながら、延々5時間ほど事件について語り続けた。

コナンと哀は、当時、事件の概要が理解できていなかった歩美と光彦にも分かるように、解決した経緯や、必要とした知識などを補足していった。

そんな4人の話を聞きながら、一言もしゃべらずにいた大友だったが、最後に一つだけ訊いた。

「なあ、お前たち、それは、いつの話だ？」

至極当然の質問だった。

「全部、小1の時だよ。」

歩美はこともなげに答える。

「はあ！？小1？あり得ないだろう！なんで高校で習う物理や、薬物にそんなに詳しいんだ？」

大友は目を見開きながら大きな声を出した。

「はあ。そうよね。普通の大人はそう思うわよね。」

哀はため息をつきながら呟いた。

「ああ、俺たちの周りにはいなかったけどな。俺たちも誤魔化してたし。」

「先生、その答えは後で教えるわ。」

と哀が大友に向けて言った直後、隣にいる哀にしか聞こえないくらいの声で、コナンが、

「真実かどうかは別として……な。」

と呟いた。

それには気づかずに、大友は、

「ああ、じゃあ、夕飯の支度にかかろうか。」

と、皆を促した。

哀と歩美、光彦はキッチンへ、コナンは風呂掃除とベッドメイクを

しにリビングを出ていった。

残された大友は、コナンと哀の異質さに疑問を持っていた。

「江戸川と灰原…、あの二人は何なんだ？時々だが、俺より年上のような雰囲気醸すときがある。それに、俺に対して年下に言い聞かせるような物言い…。他の二人を見守るあの目は、友達と言うより、子供や弟妹に向けるようじゃないか？あの二人が、俺に見てるだけでいいって言った意味は？はあ…、俺、どうすりゃいいんだよ…。」

大友の独り言は、誰に届くこともなく、リビングに消えていった。

## 合宿？1日目／顧問の苦悩／（後書き）

次はコナンと哀と大友先生の会話になるでしょう。  
次話も宜しく願います。

合宿？1日目、生い立ち（前書き）

今回は、コナン、哀、先生の3人で話をします。

## 合宿？1日目／生い立ち

夕飯も食べ終わり、各自、お風呂にも入って、後は寝るだけ。部屋割りには、勿論、女子部屋と男子部屋に別れました。

先生は、コナンと光彦と同じ部屋で寝ることに。

軽く雑談を交わしていた5人だったが、既に夜11時になっていた。「そろそろ部屋に引き上げるか？」

とコナンが提案すると、

「うん。眠くなって来ちゃった。」

と歩美が目をごすりながら応えた。

「そうですね。明日もありますし、そろそろ寝ましょう。」

光彦も頷きながら言った。

「じゃあ、コナンと先生は、ちょっと残ってくれるかしら？」

哀は、大友を見ながら言う。

「ああ、今後の相談だったな。」

大友は頷きながら応える。

「よし！じゃあ、光彦と歩美ちゃんは先に寝てくれな。おやすみ。」

「

コナンが挨拶をすると、

「「おやすみなさい。」」

と二人は言いながらリビングを後にした。

「さて。何から話しましょうか？」

歩美と光彦が完全にリビングから遠ざかったのを気配で確認してから、哀は話し掛けた。

「何からって…、とりあえず、なんでお前たち2人は、小1の時点

で物理や薬物、法律とか、詳しくあったんだ？明らかにおかしいだろう？」

大友は、最初の質問を投げかけた。

「ふう、そうですね。先生は、僕達のことを不審に思いますよね。」

コナンは、ため息をつきながら呟いた。

「それは、私たちの生い立ちに関係してるわ。」

哀とコナンは、あらかじめ決めていたシナリオで話し始めた。

「俺の本当の両親は、アメリカに住んでいたんです。けど、仕事の都合で俺だけ日本の親戚に預けられることになったんです。でも、当てにしていた親戚は、高校生の息子を残し渡米していた。」

「それが、工藤夫妻か？」

「はい。で、仕方なかったので、しばらくは工藤新一のもとへ身を寄せていたんですが、如何せん、彼は事件好きだった。あの当時小1だった俺の面倒など見てる暇はなく、隣に住んでいる発明家に頼んでいたんです。」

「その発明家が、私の養父よ。」

「ああ、確か阿笠さんとか……」

「ええ。当時、俺は単身来日していたんで、学校も決まっていなかったんです。そういうのも全て阿笠博士が手配してくれたんですが、彼は、研究をしていると寝食を忘れることがあり、仕方なかったもので、新一が懇意にしていた幼なじみの毛利家でお世話になって、色々な事件に遭遇していったんです。まあ、それまでも、新一が遭った事件の話を聞いたり、工藤邸の書斎の本を勝手に読んだりしていたんですが。」

「あら？アメリカでの話が抜けてなかった？」

「ああ、忘れてた。俺と哀の両親は、同じ研究施設で働いていたんです。実は、最近になって分かったんですが、俺と哀は、赤ん坊の頃に会ってるんですよ。……じゃなくて、俺たちは、親が研究者だったんで、小さい頃から本に囲まれて育ったんです。」

「自然と、本を読んで理解できるようにもなったわ。分からないこ

とは、聞けば教えてくれたし。そう言う面では、教育には熱心な親だったのね。まあ、私がほんの小さい頃に亡くなったから、あまり覚えてないけどね。」

「あ…、すまない。辛いことを思い出させたな。」

淡々と言う哀とは対照的に、申し訳無さそう顔をしながら大友は謝った。

「大丈夫よ。今はコナンがいるし、博士もみんなもいるから。」

優しい笑顔で言った哀に、大友はほっとして、

「そうか…。」

と言ったが、次の哀の言葉で、また憐れみの表情になった。

「それに、顔もあまり覚えてない両親より、私を可愛がってくれた姉を亡くした時の方がよほど辛かったわ。」

「哀…、ゴメンな。助けられなくてゴメン。」

俯いた哀の頭を胸に抱き寄せながら、コナンは謝った。

「コナン…、あなたのせいじゃないわ。」

「お…い？何の話が分からないが、ちよつといいかあ？」

コナンと哀が自分の存在をすっかり忘れて二人の世界に入ってしまった、大友は呆れながらも、話し掛けてみた。

「あつ、すみません。」

「忘れてたわ。どこまで話したかしら？」

少し慌てた様子で2人は離れながら言った。

「えーと、両親が教育熱心だったとこまでだ。」

「ああ、そうだった。それで、俺も哀も、小さい頃に刷り込みみたいに記憶に知識を入れていったんですよ。だから、俺たちが、他の子たちよりも知識があるのは、そんな理由です。」

「貴方は、医学、薬学の他に、優作さんの蔵書も読みあさったみたいだし？それは、工藤君と同じように推理オタクにもなるわよね。」

「おい…。オタクって。哀は、両親の様に研究者になるはずだったんだよね。」

「ええ。だから、薬学の勉強をしていたの。私たちが他の子たちと

違うのは、そう言う訳なのよ。」

「そうか…、お前たちも苦勞してきたんだな。」

「いえ、良かったと思っっていることもあるんですよ。英語も喋れるし、授業は聞いてなくても平気だから。」

「いや、おい、授業は聞いててくれよ。」

大友は呆れながら言った。

「ははは…。あとは、何を聞きたいですか？」

コナンは乾いた笑いで返し、真面目な顔に戻った。

「あ…、じゃあ、お前たちの行動力というか、動くための原動力は何なんだ？」

「それは、好奇心と正義感…ですかね。」

「そうね、事件については、知的好奇心を満たし、尚且つ悪を許さない正義感ね。人助けは、人として当たり前のことだけ。」

「人として当たり前…か。確かに。でも、そう分かってはいても、行動できないのが人間じゃないか？」

「そう言う人が多いのは事実ですが、その場合は、何をしたいのか分からないって言うのが主な原因じゃないですか？」

「私たちには、知識もあるし、様々な修羅場も結構潜ってきたから、体が反応するのもかもしれないわね。まあ、私の場合、人助けは罪滅ぼしみたいなものだけど…」

「哀！！お前、まだそんなことを思ってるのか？お前は悪くない。お前には何の罪もないんだ。いい加減、自分を責めるのはやめてくれ。」

「あ……、ごめんなさい。でも、記憶がある限り私は自分を許せそうにないの…。」

「わかった。俺はそんなお前を全て受け入れるさ。お前が自分を許せないなら、俺がお前を許すよ。何度でも言っつてやる。お前は悪くないってな。」

「コナン、ありがとう。」

再び大友の存在を忘れて二人の世界に入って、抱き合っていた。

「お前らさあ、そう度々俺を忘れるなよ。次の質問して良いか？」  
呆れながら言う大友に、

「いや、つい…。」

「ごめんなさいね。どうぞ。」

と言うと、

「じゃあ、二人は、何故他の三人を見る時、子供や弟妹を見る様な目をするんだ？」

と大友が訊いてきた。

ハッとして、二人はお互いに顔を見合わせた。

「私たち、そんな目をしてました？」

「確かに、あの三人は、昔から無邪気で子供らしい子供だったから。特殊な事情で親元を離れ、自立へ踏み出すのが早かった俺たちにしてみれば、弟妹みたいに感じるのも仕方がないのかもしれないですね。」

「

「そうね。皆、裏表のない真っ直ぐな子達だものね。私達みたいに、歪んでないわよね。」

「歪んでるって…おいおい、自分でそれはないだろう？」

大友は哀の言葉にツツコミを入れた。

「普通は歪むものよ。親兄弟を亡くして、常に危険と隣り合わせ。そんな日常、耐えられる？」

「哀、お前には俺たちがいただろ？」

「そうだぞ。養父も、友達も、恋人だっているんだろ？」

「ふふっ、そうね。私はまだマシな方よね。二人とも、ありがとう。」

「

一生懸命フォローする二人にクスツと笑い、礼を言う哀。

「後は、二人が時々、俺よりも年上みたいな物言いをする事があ  
るが…？」

大友は探るように訊く。

「態度がデカいだけです。」

キツパリと言いきるコナン。

「私、養父にもこんな口調だから。」

哀もハッキリと言う。

「そうか、それだけか。じゃあ、最後に、江戸川が言った、『見るだけでいい』って言うのは？」

「言葉の通りですよ。顧問として、俺たちを見守るだけでいいんです。いずれ、指導者であることが、俺たちの邪魔になるときが来ます。」

「邪魔？」

「ええ。私達は、警察に協力して、時には非情な犯罪者と対峙するときがあるのよ。そんな時、指導者という立場の人間は止めるわけ？」

「ああ、生徒を危険な目に遭わせるわけにはいかないからな。」

「ですよ。でも、それが、俺たちには邪魔なんです。事件を解決するためには、多少の危険は免れない。」

「そう。だから、私達は私達で、先生に責めがいかないように手を打つわ。」

「まあ、ほとんどの場合、先生はその場にいないはずだから、事後報告になると思いますが。」

「おい、じゃあ、俺は何をしていけばいいんだ？」

「言ったように、全てを見守るだけです。活動内容についての口出しは一切無用です。」

「あと、1つ忠告。あまり、私達と行動を共にしようと思わないことね。」

「何故だ？俺は顧問だぞ？」

「危ないですから。俺たちといると、十中八九事件が起こります。しかも殺人事件。先生、推理小説にあまり興味ないでしょ？そういう人には耐えられませんよ。」

「ああ、確かに、興味はないが……。」

「無いなら尚のこと、あまり関わるべきじゃないわ。私達はこれまでの経験があるから良いけど、…命がいくつあっても足りないわよ。」

「そんなに危険なのか？確かに、昼間聞いただけでも、爆弾あり拳銃ありで相当ヤバいと思ったが…。」

「俺も哀も拳銃で撃たれたことがあるしなあ。幸い致命傷にはならなかったけど。」

「そうね。銃の痕は消えないしね。だから、悪いことは言わないわ。名前だけの顧問になるか、ちゃんとやる気でも見守るだけにしておきなさい。」「苦勞をかけると思いますので、心勞で倒れないためには、なるべく関わらないことです。」

真面目な顔で言う二人に、

「わかった。忠告、肝に銘じよう。」

と、神妙な顔で頷いた。

「あの三人は、私達で正しい方向へ導いていくわ。」

「警察も側にいるんだし、間違った道は歩ませないと約束しましょう。」

と自信満々で言い切る二人に、大友は、頷くしかなかった。  
とりあえずで訊きたいことを訊いたので、三人は、就寝する事にした。

「片づけはやるから、二人は先に寝なさい。」

と大友は言い、二人をリビングから追い出した。

一人になって、

「とりあえずの、謎は解けたが、些か腑に落ちない気がする…。だが、あの二人とともに話しても、今みたいにかわされるのが落ちだろうな。俺じゃあ、あの二人を言い負かせないだろうし。あいつらの言うとおり、見てるだけにするか。今更、一度引き受けた顧問を辞めるわけにもいかないだろうし。よし！あまり関わらないようにしよう。俺だって命は惜しい。…さて、片づけて寝るかあ。」

と1人、呟いていた大友だった。

まさか、ドアのすぐ横でコナンたちが反応を伺っているとはつゆ知らず。



合宿？1日目ゝ生い立ちゝ（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

嘘はつき続ければ、いずれ真実になるのでしょうか。

次回は合宿二日目になります。

合宿？2日目／事件／（前書き）

初事件です！

期待はしないで読み進めて下さい。

## 合宿？2日目／事件／

合宿二日目。

この日は、近くのキャンプ場でバーベキューをする事になった。朝、8時に起床した5人は、早々に朝食を済ませ、材料の買い出しにいくことにした。

歩美と光彦は飲み物の買い出しに。哀とコナンは食べ物の買い出しに。

大友は、一足先にキャンプ場に行き、場所の確保とセッティングをする事になった。

4人は、歩いて15分ほどの所にあるスーパーに行くことにした。昨日、コテージに行く途中で見つけてあったのだ。

歩美と光彦が前を歩きながら、

「飲み物何がいいかね。」

「元太君がいないので、量は少なくて平気ですよね。」

「そうだね！いつも、1人で2Lのペットボトル飲んでたもんね。」

「4人ですし、2本もあれば大丈夫ですね。」

などの会話をしていた。

少し離れたところで、

「ねえ？昨日の先生の言葉…どう思う？」

「ああ、納得はしてねえみたいだな。かといって、真実を話すわけにもいかないだろ？」

「それは…そうだけど。」

「大丈夫だって。戸籍については、FBIがアメリカ国籍で作ってくれたんだから。調べられても問題ねえさ。」

「そうね、問題はないわ。でも、この先も、あんな風に私達を不審に思う人が出てくるわよね。」

「仕方ないさ。確かに俺達は異質だからな。」

「真っ白な子供たちに混ざった黒ですものね……。」

「哀？お前は黒くなんかないだろう？むしろ、あの組織の中で黒に染まらなかった唯一人だ。」

「そんなこと……。私は命じられるままに行動してきたのよ？」

「明美さんの……お姉さんのためだろう？だから、心までは染まっていなかったんだ。哀は真っ白だよ。」

「ありがとう、コナン。さあ、2人が待ってるわね。行きましょう。」

俯きかけていた顔を上げ、哀はコナンの手を取って歩き出した。

コナンは、そんな哀の手をぎゅっと握り返して、後ろ姿に微笑んだ。

買い物を終えた4人は、大友の待つキャンプ場へと向かった。

4人が買い出しに行っている間、大友は、キャンプ場に行き、事務所で鉄板などのレンタルをすませて、セッティングしていた。

他にやることがなかったため、4人が来る前に、事務所で見た釣り竿を借りに行くことにし、その帰り道で4人と合流した。

「あゝ！先生！！それ釣り竿！？！」

歩美が大きな声で呼びかけた。

「ん？ああ、事務所で貸してくれたんだ。やるだろ？」

大友は人数分の釣り竿を持って、言葉を返した。

「はい、やります！でも、釣りは元太君が得意なんですよね。」

楽しそうに笑いながら光彦が言った。

「あら、じゃあ、お昼に魚は食べれないかしらね。」

哀は、微かに笑いながら言う。

「ははは、何とかなんじゃねえか？」

笑いながら言ったコナンに、

「まあ、楽しめればいいんじゃないか？」

と、大友は大人な発言をした。

バーベキュー場に着くと、そこには2、3組がいた。

1組は家族連れ、1組は大学生らしいグループ、もう1組は会社員らしいグループだった。

コナン達は、一通りの準備をし、釣り竿を持って上流の方へと向かっていった。

大きめの岩がたくさん現れ始め、先に進むのが困難になってきたので、5人は、その場で釣りを楽しむことにした。

糸を垂らして、魚が掛かるのをのんびりと待っていたところ、

「キヤーーーー！！！」

突如、女性の悲鳴が聞こえてきた。

4人は、反射的に釣り竿を陸に上げ、悲鳴がした方に走り出した。それに少し遅れて、大友が付いていった。

現場に着くと、そこには、頭から血を流して倒れている大学生位の男性がいた。

その側に、先ほど悲鳴をあげたらしい女性が、真っ青な顔を手で覆いながら座り込んでいた。

コナンは、

「先生！！それ以上こっちにこない方がいいですよ。どこか別の所で休んで下さい。」

「え？あ…ああ、わかった。」

まずは付いて来ていた大友を遠ざけてから、みんなに指示を出した。  
「歩美ちゃん、その人に付き添って、落ち着いたら、発見時の状況を聞いて。」

「うん、分かった。お姉さん、大丈夫？ちょっと向こうに行きましょう？」

と言って、気遣いながら歩かせ始めた。

それを確認し、

「光彦、警察に連絡！」

「はい！状況は？」

「哀、確認できるか？」

「ええ。…脈拍・呼吸共になし、…瞳孔も開いてるわね。亡くなってるわ。」

「光彦、10代後半、20代前半の男性が一名、頭を強打して亡くなっている…と。」

「分かりました。…もしもし？警察ですか？私、帝丹高校1年の円谷と言いますが、東京都多摩市の東千キャンプ場で、10代後半、20代前半の男性が一名、頭を強打して亡くなっています。」

光彦が電話をしている内に、小声で、

「哀、ここは頼んだ。」

「ええ。調べておくわ。」

と会話してから、周りに向かって大きな声で、

「皆さん、それ以上こちら側には来ないで下さい。どなたか、被害男性とお知り合いの方はいらっしゃいませんか？」

とコナンは、現場保存と被害者の友人に事情を聞き始めた。

「上山！？え！？死んでるのか？嘘だろ…。」

一人の男性が、その場に膝をついた。

「あの、被害者の方のお知り合いですか？」

コナンは、その男性の元に近寄っていった。

「あ？ああ、アイツは、上山尚人。俺と同じ帝丹大学の学生だ。」

「年と、貴方のお名前もお教え願えますか？」

「ああ、大学3年で20歳だった。俺は水原翔。」

「では、水原さん、今日は、何人でここに？」

「サークル仲間と6人で。」

「他の方たちは？」

「さつき、悲鳴を上げた、上山の彼女だった花井と、あつちで固まってる3人…。」

水原は、遺体を挟んで反対側にいる三人を指さした。

「向かって左から、岩瀬、谷本、木塚。」

「ありがとうございます。では、上山さんと何かトラブルがあった方をご存じですか？」

「トラブル…、そうだな。花井は上山と別れたがってたし、谷本は上山に振られたらしいし、岩瀬とは花井を取り合ってたな。木塚と俺は、上山に金を貸してる。」

コナンは、そこまですを聞いて、少し考え込むように、顎に手を当てながら立っていた。

そして、後ろを振り向き、

「哀、死亡推定時刻はわかるか？」

「そうね、発見時、まだ温かったことを考えると、死後一時間経ってないんじゃないかしら？」

「そうか。ありがとうございます。」

「では、水原さん、1時間前から遺体が発見されるまでの間、何をしましたか？」

「何って…、あの森に行ってたけど。」

「それを証明できる人は？」

「いや、1人だったから、いないかな。」

「そうですか。ありがとうございます。」

水原から事情を聞き終わったコナンは、哀の元へ戻った。

「何かわかった？」

「いや、被害者と一緒にいたのは、計5人。全員に動機有りつてとこだな。」

「そう…、あ、凶器はたぶんアレよ。」

哀は遺体の側に落ちていた20センチほどの、血の付いた石を指した。

「そうだな。まだ警察は到着しないのか？」

とコナンが言った矢先、パトカーのサイレンが聞こえてきて、

「おお！コナン君達じゃないか！！通報したのは君達か。」  
と目暮警部がやってきた。

「あ…、目暮警部。はい。被害者は、上山尚人さん、帝丹大学の3年。今日は、あちらにいる大学のサークル仲間とキャンプに来ていたそうです。第一発見者は、被害者の恋人・花井さんと、歩美ちゃんが付き添って向こうで落ち着かせてます。」

コナンが指を指しながら説明すると、

「ふむ。いつも通り完璧な現場保存に、初動捜査だな。被害者に近寄った人は？」

目暮警部が目を瞑って頷きながら訊く。

「俺と哀、後は第一発見者の花井さんですね。」

「発見したのは、午前10時32分、その後、脈拍・呼吸・瞳孔で死亡を確認したわ。その時点で、体温が残っていたから、死後1時間以内と思われるわ。」

「おお、哀君、ありがとう。で、何か分かったことはあるかい？」

「まだ全員には話を聞いてないんですが、5人共に動機はあるようですね。あとは、光彦と歩美ちゃんが事情を聞いてるんでその報告待ちです。」

「後頭部を右側からあの石で殴られたようね。一発で致命傷になっているし、斜め上から振り下ろされたことを考えると、被害者が立っていたなら、身長165センチ位だから、犯人は、170センチ以上じゃないかしら。座っていたら、誰にでも可能だわ。」

「立っていた場合の該当者は、水原さんと木塚さんだな。水原さんによると、共に被害者にお金を貸していたそうです。座っていたとすると全員か…。」

と、そこで、他の3人に事情を聞いていた光彦が戻ってきた。

「あの3人の内、谷本さんと木塚さんには、事件当時、明確なアリバイはなしですね。岩瀬さんは、花井さんと一緒に居たと言ってます。あ、目暮警部、おはようございます。ご苦労様です。」

光彦はコナンに報告し、目暮に挨拶をした。

「ああ、光彦君、おはよう。」

「そうか、あとは、花井さんだが…。」

そこに歩美が走って戻ってきた。

「コナン君！花井さん落ち着いたよ。だから、高木刑事に任せてきた。あつ！警部さん、おはようございます。」

「歩美君、おはよう。」

「花井さんから、何か聞けたか？」

「うん。えーと、花井さんは、岩瀬さんと一緒にテントの側にいらしいんだけど、被害者の上山さんにメールで呼び出されたんだって。１０時半に待ってるって。で、時間になったから、ここに来たら、上山さんが血を流して倒れてて、ビックリして悲鳴を上げたらしいよ。そのまま腰を抜かして座り込んだみたい。だから、被害者には触ってないってさ。」

「そうか、メールも確認した？」

「うん。９時４６分に受信してた。内容は、『話があるんだ。何なら、岩瀬が一緒でも構わない。昨日の場所で待ってる。でも、まだ整理が出来てないから、１０時半頃に来てくれ。』って書いてあったよ。」

「ってことは、花井さん、岩瀬さんにはアリバイ有りだな。」

「光彦、谷本さんと木塚さんは、どこに居たって？」

「あつ、はい、えー、谷本さんは川の下流で写真を取るポイントを探していたそうです。趣味が写真らしく、一眼レフのカメラを持っていました。写真も数枚撮っていたみたいです。日付と時間も確認しましたので、偽装でない限り間違いないかと。」

「写真…か。木塚さんは？」

「はい、木塚さんは、水原さんに話があったらしく、後を追って森に行ったそうですが、見つけれなかったそうです。」

「そうか…。目暮警部、事情聴取なら、水原さんを先にお願ひできますか？ちよつと、他の人たちに確認したいことがあるんで。」

それまで、黙って探偵団の話聞いていた目暮は、

「うむ、分かった。」

と頷いた。

探偵団こと、探偵部の4人は、岩瀬、谷本、木塚の元へと向かった。  
「あの、ちよつとお話良いですか？」

とコナンが聞くと、

「え？あ、ああ。何だ？」

と木塚が応えた。

「木塚さんは、被害者の上山さんにお金を貸していたと聞いたんですが…。」

「は？いつの話だよ。もう、返してもらったよ。アレは、花井の誕生日デートを奮発しすぎて、ピンチだったから貸したんだ。5万ほどな。でも、翌月のバイト代で返してくれたよ。」

「そうだったんですか。では、水原さんが上山さんにお金を貸していたことは？」

「いや、なかったと思うけど。なあ？」

「そうね、そんな話はしてなかったわよ。」

「俺も聞いたことないな。」

3人は、首を傾げながら答えた。

「では、水原さんと上山さんは、仲が良かったんですか？」

「ああ、俺たちの中でも、一番仲良かったよな？」

「そうね。よく一緒にいたわ。」

「ん？一時期微妙な時がなかったか？」

「あゝ、あれは、谷本が上山に振られたときだな。」

「ちよつと！！思い出させないでよ！！」

「あ、わりの。確か、あの時は、水原が一方的にツツカかってたんじゃないかったか？」

と岩瀬がいうと、事情を知っているらしい木塚が話し出した。

「あれは、上山が谷本を振ったから…。水原、谷本が好きなんだよ。だから、谷本が悲しむ姿を見たくなかったんだって。でも、その後、

自分にもチャンスがあるんじゃないかと思ひ直して、仲直り。」

「ああ、そう言うことか。それで、今回、花井と上山が別れるって知って、沈んでたわけだ。」

「そうだったんだ…、私、美奈が別れるって聞いて、喜んじやったのよね。チャンス到来！みたいにな。」

「それで、沈んでた水原さんを慰めに探しに行ったんですか？」

3人の話が纏まったところで、コナンは口を挟んだ。

「ああ、でも、見つけれなくて、その内、花井の悲鳴が聞こえて、急いでここに来たんだ。」

「そうでしたか。すみません、ありがとうございました。」

4人は、大友の下に向かった。

「先生、はい、水。」

歩美はペットボトルの水を渡しながら話しかけた。

「大丈夫ですか？」

光彦は心配そうな目で、青ざめている大友を見る。

「事件現場は初めてだったのね？」

憐れんだ目で哀が言つと、コナンはすまなそうに言つた。

「ちよつと止めるのが遅かったみたいですね。すみません。」

青ざめながらも、何とか笑顔で水を受け取りつつ、

「すまない。こんなことは初めてで。お前たちはスゴいな。周りに指示を出したり、警察に連絡したり、話を聞いて回ったり…。もういいのか？」

「あ、いえ。これは慣れですよ。」

と苦笑しながら光彦が言つた。

「もう、犯人も動機も分かつたんで。物証も出るはず。だから、とりあえず、先生の様子を見に來ただけです。」

「えー！？コナン君、また一人で分かつた顔してー！！」

「そうですよ。何なんですか？物証つて。」

「それは…、そのうち分かるさ。」

責める歩美と光彦を不敵な笑みでかわし、

「じゃあ、先生、ちよつと解決してくるんで、ここで休んでいて下さい。」

と大友に一声かけて、4人は警部の下へと歩いていった。

「目暮警部、関係者を集めていただけますか？」

「おお、コナン君！分かったのかね？」「はい、分かりましたよ。」

あ、高木刑事、佐藤刑事、こんにちは。」

「やあ、こんにちは。皆。」

「こんにちは。早いわね。私まだ何もしてないわ…。」

「高木刑事、佐藤刑事、こんにちは。」

「こんにちは。」

「どうも。まあ、私達の方が動くの早かったから。それに、単純な事件だし…ね？コナン。」

「ああ、まあな。」

「じゃあ、探偵部による初推理ショーの始まりね。」

歩美が楽しそうに言ったところで、警部に呼ばれ、関係者の5人が集まった。

「では、今回の事件の動機から説明しましょう。」

コナンは一步前に出て話し始めた。

「事の始まりは、被害者の上山さんが谷本さんを振り、花井さんと付き合いだしたことです。それまでは、良かったが、花井さんが、上山さんと別れたがっていた。上山さんは、昨夜、別れる決意をし、今日の10時半に花井さん呼び出し、別れ話の返事をしようとしていました。しかし、それでは、都合の悪い人が居た。その人は、

谷本さんに好意を寄せていたからです。上山さんがフリーになると言うことは、谷本さんにもチャンスがあると言うこと。それでは、困る。しかし、上山さんの意志は変わらなかった。仕方がないので、1人外に出た上山さんの後を追ひ、森に行くと言ってテントを出て、上山さんを尾行、周りに人がいないのを確認し、上山さんがメールをし終わったのを見届けてから犯行を行った。」

コナンは事件概要の説明をした。

「犯行は、計画的なものではなく、衝動的なものだったわ。だから、その辺に落ちていた大きめな石を使った。倒れ方を見る限り、被害者は立っていた筈だわ。そこに斜め後ろから、後頭部目掛けて石を振り下ろした。それが出来るのは、身長的にみて水原さん、木塚さん、あなた達だけ。」

哀は犯行時の説明をした。

「しかし、その時間は、2人とも、森にいたと証言しています。木塚さんは、水原さんを追って森に入ったと証言しました。しかし、そう広くもない森です。見つからなかったはずはありません。が、木塚さんは、水原さんを見つけたことが出来ませんでした。さて、どちらが嘘をついているのでしょうか？」

光彦はその時間の二人のアリバイについて話をした。

「そして、被害者発見時、森にいたと言いながらも、森とは反対側に立っていた人がいました。そう、第一発見者の花井さんのすぐ側に。同じように森から悲鳴を聞いて急ぎ駆けつけた人は、少し遅れて森側にいた2人と合流しています。」

歩美が発見時の状況説明をした。

「ここまで言えばおわかりでしょう？犯人は……、あなたです！」  
コナンはある人を指さした。

「水原翔さん。」

「おっ、俺！？なっ、な何をいきなり！！し……証拠！証拠はあるのか！？」

水原は焦って、どもりながら否定した。

「残念ながら、真実です。貴方、犯行時、素手で石を持ったでしょう？」

「その時、凶器の石にはあなたの指紋が付いたわ。それに気づいたあなたは、その袖で拭いたんじゃないかしら？」

コナンの言を継いで哀は水原の右手を指して言う。

「その時、凶器についた被害者の血を少し擦ってしまった。気づいてましたか？凶器の石の血が付いた部分の一部が擦れていることに……。」

コナンが話している間に、光彦が水原に近寄り、右手をつかんで袖を捲った。

すると、そこには、赤黒く乾燥した血液が付着していた。

「その血が誰の血で、いつ付いたのか、説明できますか？」

「血液に関しては、DNA鑑定で個人を識別できるわよ。」

「被害者の水原さんが、頭部の致命傷以外に怪我をしていた形跡はないよ。」

「何があつたのか、話していただけますね？」

光彦は、水原の右手を持ったまま訊いた。

水原は、その場に座り込み、うなだれて呟きだした。

「あいつが……上山がいけないんだ。花井と別れるなんて言うから……もう少しで、谷本さんがアイツを忘れられるところだったのに……！だから……だから、アイツが邪魔だったんだ……！！！」

最後の方は、興奮したのか、光彦の手を振り払い両手の拳で地面を何度も何度も叩いていた。

高木刑事が近寄り、

「水原翔さん、上山尚人さん殺害容疑で逮捕します。」  
「  
と言って、水原に手錠をかけて連行していった。」

合宿？2日目～事件～（後書き）

次話は事件解決後の先生と探偵団です。

合宿？2日目、理解と決意、（前書き）

事件解決直後です。

## 合宿？2日目／理解と決意／

高木刑事に連行されていく水原を見送りながら、コナン達は目暮警部に礼を言われていた。

「いや、流石は探偵団！早期解決、見事だな。」

「いえ、そんな難しいものではなかったのだ。」

と光彦は至極平然と答える。

「事情聴取が必要でしたら、いつでも言っして下さいね。」

歩美も笑顔で言った。

「じゃあ、私達は、これで。先生の様子も気になりますし。」

と哀が言くと、

「ん？先生？一緒なのかい？」

と目暮警部が訊いてきた。

「はい、今日は、探偵部の合宿で来ているので。元太は柔道部の合宿で来ませんでした。」

とコナンが説明した。

「そうか。確か、大友先生と言ったね。顔色が良くないようだが、どうかされたのかい？」

うつかり失言をしたのに気付かない目暮警部。

「ああ、あれは、事件現場に遭遇したのが初めてだったらしくて。」

「と・こ・ろ・で！目暮警部？先生に会いに学校に行きましたね？」

歩美は、コナンが説明し終わると、ずいっと前に出て、少し低い声を出した。

「え？いや？コナン君に挨拶はしなくて良いと言われてたから、会いになんて行ってないよ？」

目暮警部は、慌てて否定したが、

「警部ともあるうものが、嘘はいけませんね。」

と光彦に言われた。

「警部さん、私達、あなたの前では、一度も『大友先生』とは呼ん

でないわよ。いつ名前が分かったのかしら？」

哀はトドメと言わんばかりに言い募る。

「答えは簡単、目暮警部、あなたは、俺との電話の数日後、学校にきて大友先生と話したからです。先生のその後の挙動不審な様子も併せて、間違いありません。」

コナンは言い切った。

目暮警部は、ため息を付き、

「はあ、君達には嘘もごまかしも通用しない…か。ああ、行つたよ。一応、君達に依頼する手前、責任者に挨拶はすべきかと思つてな。」

「まあ、そうですね。でも、これまでの事件のこととかを調べられて騒がれると、こちらの活動にも支障が出るかと思つて止めたんですよ。」

「結果的には、こうして活動をしてるからいいんだけどね。」

コナンと哀が言うと、

「そうだったのか…。すまないことをしたね。」

と目暮警部は謝った。

「いえ、何とかしたので大丈夫です。」

「じゃあ、話はそれだけだから。失礼します。」

と哀が挨拶をすると、他の3人も目礼し、大友の下へと走つていった。

「先生、お待たせ！大丈夫？」

一番に駆け寄つた歩美が、大友に声を掛ける。

「ああ。もう、大丈夫だ。すまなかつたな。」

と大友が片手を上げながら言うと、哀はその手を取り、脈を測り始めた。

1分後、哀は見ていた腕時計から目はずし、大友の手を離して、  
「大丈夫なようね。」

と、安心したように呟いた。

「ありがとう。それで？事件は解決したのか？」

哀にお礼を言い、事件について訊いた。

「はい、まあ、簡単に話しますと、被害者男性に好意を寄せていた女性に好意を寄せていた犯人が、被害者男性が邪魔になり、殺害したと言っ感じですかね。」

光彦がザツクリと説明した。

「光彦君…、それは、本当に要点だけだね。」

歩美が呆れたように言っつと、

「えっ！？ダメでしたか？えーと、じゃあ…。」

「被害者は交際相手から別れを告げられ、それに承諾の返事を返すうとしていた。だが、犯人は、被害者が恋人と別れると困る。何故なら、自分の好きな人が、被害者に以前振られていたが、今なお、被害者への好意を捨てていないから。万が一、その女性が、被害者に再度告白し付き合うことになったら…、そう考えた犯人は、被害者を殺害した。突発的な犯行だったため、凶器は落ちていた石しかし、自分の指紋を消すために拭った袖口で、凶器に付いていた血を少し擦ってしまい、それが証拠になり、逮捕に至った次第です。」

光彦に代わり、コナンが事件の動機から犯行、逮捕の決め手まで説明した。

「そうだったのか…。何だか、自分勝手な犯人だな。告白しなかった自分が悪いんじゃないのか？」

大友は、事件の概要を聞いて、思ったことを口に出した。

「そうなんだよね。振られた彼女を慰めながら、アピールして、告白すれば良かったのに。」

歩美は納得いかないうな声を出した。

「でも、その女性が、まだ被害者への気持ちを無くせていなかったのなら、告白する勇氣は出せないかもしれません。」

光彦は、被害者のフォローをした。

「そうかもしれないわね。けど、人間、どんなに一人の人を想っていても、気持ちがブレるときだってあるわ。」

「そうだな。ある日気付くんだ。『好き』と『愛してる』の違いにな。ずっと一人を想い続けるなんて、そうそうできるものじゃないさ。」

哀もコナンも、まるで自分の辛い過去でも語るように、重苦しく呟いた。

「?…何だか、空気が重いぞ?」

不思議に思った大友が明るめの声で言った。

「あ…、ああ、そうだ、光彦、元太に報告してやれよ。今頃は昼飯だろ?」

「はい!そうですね。ちょっと電話してみます。」

「哀、歩美ちゃんとバーベキューの準備してくれ。」

「ええ。吉田さん、行きましょう。」

「うん!」

「先生は、歩けますか?」

「あ?ああ。大丈夫だ。」

「では、先生は俺と、置いてきた釣り竿の回収に行きましょう。」

「あつ!そうだったな。行こう。」

と、コナンは次々に指示を出し、話題を一気に変えた。

コナンと大友が釣り竿を回収し、事務所に返しに行き、皆の下に戻ると、光彦も、ちょうど元太との電話を終えたところだった。

「あつ!コナン君、お帰りなさい。元太君に、羨ましがられちゃいました。」

光彦は苦笑しながらコナンに話しかけた。

「ただいま。羨ましい?」

コナンは、首を傾げながら聞き返した。

「はい、探偵部を発足して初めての事件じゃないですか。何で俺が

いない時に！！って騒いでましたよ。」

「ああ、はは、そういうことな。他には何か言ってたか？」

コナンは光彦の話に苦笑いして、他に無いか訊いた。

「あ、先生の様子を心配してましたよ。初めての現場だから、大丈夫だったか？と。元太君らしいですよね。」

「そうだな。ちゃんと気遣いも忘れてねえ。元太らしいな。」

光彦とコナンは、親友の豪快な笑顔を思い出し、自然と顔が緩んでいた。

「2人共！お肉焼けるよ。」

歩美の大きな声で、ふと我に返った二人は、笑いながら、

「ああ、今行く！」

「はい！今行きます！！！」

と答えながら走っていった。

4人は、バーベキューをしながら、大友の質問に答えていた。

「なあ、悲鳴が聞こえたとき、真っ先に釣り竿を陸に上げて走っていったよな？咄嗟の時って、釣り竿、投げ出しちゃわないか。」

「何を言ってるんですか。借り物ですよ？無くしたら弁償じゃないですか。」

「いや、そうなんだがな……。」

「先生、探偵たるもの、いつでも冷静に行動すべし！だよ！」

「だからなのか？？」

「まあ、どちらかというと、慣れよね。」

「ははは……身も蓋もねえな。」

「じゃあ、現場に着いた後の、江戸川の冷静な状況判断と的確な指示も慣れなのか？」

「そうですね。慣れです。」

「うーん、その後の各々の行動も？吉田は第一発見者らしい女性に

付き添って話し聞いていただろう？」

「うん。女性だったから、光彦君より私の方が適任でしょ？落ち着かせて、発見時の状況と、被害者との関係、それから、それまでの行動とその証明になるものを見せてもらったただだよ。で、刑事さんが来たから、簡単な事情を話して、みんなの所に報告しに戻ったの。」

「へえ。あの指示だけでそこまでやったのか…。」

「当たり前でしょ？コナン君が言ってたもん。落ち着かせて、話を聞いてって。今日は関係者が少なかったから、他の人は光彦君に任せられたし。」

「ふーん、その円谷は、警察に電話した後は、関係者に事情を訊いてたのか。」

「はい、僕は、コナン君に警察への通報を頼まれましたので、後は、関係者に話を聞いてただけです。事件当時の行動と証明になるものを簡単にですけど。必要な情報はとりあえず聞き出しましたよ。それから、報告しに戻ったんです。」

「そうか…、で灰原は、遺体の近くにずっといたよな？」

「私は、荒らさないように、死体の状態を確認し、凶器の発見、被害者と周りの状況分析をしていたわ。」

「ほー、それで、凶器の異変や、死亡推定時刻が分かったのか。江戸川は、指示を出した後は？」

「俺は、現場の保存と近くにいた関係者に、被害者の事や、人間関係、その人のアリバイを聞いて、みんなからの報告を待ちつつ、警部の相手をしてました。」「それぞれ役目があるんだな。」

大友は、納得したように頷きながら言った。

「その後は、皆からの報告を聞いて、矛盾点や疑問を解消しに、再び聞き込みをして、犯人を特定つてとこですかね。」

「犯人特定の決め手は？」

「ああ、それは、1人だけ嘘の証言をしていたので。分かり易かったんですけど、証拠は偶然でしょうね。あれは、犯人が、ハンカチ

やタオルを持っていなかったから、起こったことですし。」

「そうか…、お前たち、凄いな。俺なんて、血を流して倒れてる人を見ただけで、動揺して気分を悪くしてたのに…。俺に探偵部の顧問なんて務まるかな…？」

俯き加減でボソボソとしゃべる大友に、

「昨日、言っただじゃない。先生は、何もなくて良いって。」

哀は優しい目で言った。

哀の言葉で顔を上げた大友に、

「先生は、俺たちの活動を容認してくれればいいんだ。」

コナンはしっかりと目を見つめながら言う。

「そうだよ！先生は、何も言わずに見守ってて。」

歩美も満面の笑顔で言う。

「僕たちは、大丈夫ですから。だいたい、警察が一緒なんです。心配するようなことは、そんなに起こりませんよ。」

光彦は、諭すように言った。

「そうか？じゃあ、俺、顧問続けるよ。でも、活動報告を読むだけだからな。くれぐれも現場になんか連れて行くなよ！」

大友は4人に対して言い含めるように、声を少し大きくした。

「あははは。大丈夫だよ。先生が一緒なのは、合宿とか、校内だけだから。そんなに事件起きないよ！」

歩美は笑いながら言った。

「そうですよ。少なくとも、校内では起きないはずですよ！」

光彦は自信を持って言う。

「そうね。合宿では起きると思うけど。」

哀は苦笑気味で言う。

「何はともあれ、問題はありませんから。安心して下さい。」

コナンは大友にキツパリと言った。

「そうか、そうだよな。そんなに事件になんて遭わないよな…！」

大友は笑いながら言ったが、

「まあ、遭わないことはないんだけどね。コナンがいるし。何かし

ら起きるけど。」

と哀の放った言葉で笑顔のまま硬直し、頬をひきつらせていた。

「あゝいゝ？何てこと言うんだ！折角纏まりかけてたのに！」

コナンはジト目で哀を見た。

「あら、ごめんなさい？先生、大丈夫よ。私達がちゃんと解決させるから。」

ワザとだと言わんばかりの哀の笑みに、

「はゝゝ、ま、先生、俺達なら、大丈夫です。先生は、気にしないのが一番ですよ。」

とコナンは、溜め息をついてから言った。

「そ…そうだよな。俺は心の平穏を守るぞ！お願いだから、心配はかけるなよ。」

と、ひきつりながらも、自分の決意をしっかりと持った大友だった。

合宿？2日目ゝ理解と決意ゝ（後書き）

これで合宿二日目は終了です。

次は三日目で帰る日になります。

合宿？3日目／早朝のひと時／（前書き）

事件を振り返るコナンと哀です。

### 合宿？3日目／早朝のひと時／

合宿最終日。

この日、哀はいつもより早く起きていた。何故なら、美容と健康に気を使う女の子・歩美により、いつもより数段健康的な生活をさせられていたからである。

“12時前には就寝”

これが、歩美のいつもの生活。

しかし、哀は、本を読んだり、調べ物をしたりで何だかんだ、1時・2時になっていた。

そんな生活を続けていた哀の身体は、いつものサイクルで5～6時間経つと起きてしまう。

12時に寝ると、起床は5時くらい。勿論、歩美はまだ夢の中。仕方なしに、リビングでコーヒーでも飲もうかと起きだした。

しかし、リビングに行くと、鼻孔を擽るのは、コーヒーの芳しい匂い。

そう、すでに起きている人物が居たのだ。

「よお、早いな。哀。」

コナンは、片手にコーヒーカップを持ち、キッチンに立っていた。

「おはよう。あなたも早いのね。私にもコーヒーくれる？」

哀は、挨拶をし、コーヒーをねだった。

「ああ、丁度、2人分淹れといたんだ。哀も起きてくる気がしてな。」

コナンは微笑みながら、手早くコーヒーを淹れ、哀に手渡した。

「ありがとう。あら？どうして？」

「コーヒーを受け取りながら、聞き返す。」

「ん？ああ、俺が、哀と2人きりで散歩したいと思ったから。それ

に、歩美ちゃんに付き合つて寝たなら、いつもの睡眠時間から考えると、このくらいの時間に目を覚ますはずだからな。」

コナンは、ウインクしながら、答えた。

「ふふつ。そう。流石ね、探偵さん。じゃあ、コーヒー飲み終えたら、少し歩きましょうか？」

哀は、少し頬を染め、微笑んで言った。

「ああ。たまに清々しい空気でも吸って、英気を養わないとな。」

コナンはそう言つと、コーヒーを啜った。

哀も、頷いて、コーヒーを飲み始めた。

コーヒーを飲み終わつた2人は、他の3人を起こさないように支度し、静かに外へ出た。

少し歩いて、木が沢山ある道へと入つていった。

この道は、もう少し行くと、小さな泉がある。

2人は、その泉へと足を向けた。

泉に着くと、2人は、腰を下ろし、黙つて風に揺れる梢の音を聞いていた。

しばらくそうしていたが、不意に哀が話しかけた。

「ねえ、昨日の犯人、皆は自業自得だつて言つてたけど…、私、言えなかった気持ちも解るのよね。」

「え？」

何故？と首を傾げるコナンに、

「他人の気持ちなんて分からないものよ？私だつて、出会つて直ぐに貴方に惹かれたわ。でも、貴方の心にはずっと蘭さんがいた。それに、2人を引き裂いたのは、私が作つた薬のせいよ。どうして気持ち伝えることができる？無理だと諦めようとしていたの。なのに、貴方は私を好きだと、愛してると言ってくれたわ。蘭さんも、私に正直になれと…。人の気持ちは変わるわ。不変ではない。そん

な事、経験しててもなかなか信じられないのも事実よ。だから、一途に被害者を想い続けている女性に、犯人が何も言えなかったのも無理はないと思うの。」

哀は俯きながら、ぽつりぽつりと語っていった。

そんな哀の肩を抱き寄せ、コナンは言った。

「そう…だな。中には一途に想い続けている人もいるだろう。俺みたいに、自分の気持ちが分かってない奴もいると思う。俺の場合は哀がいたからこそ気付けたんだけどな。想いを伝えられなかったのは、犯人に勇気がなかったせいだろう。でも、被害者を殺すことが出来たのなら、女性に告白する事もできたろうに…。」

「ごめんなさい。こんな話…。もう起きてしまったことなのにね。」哀はコナンに申し訳なさそうな顔で言った。

「いや、いいんだ。俺も思っていたから。犯人は、ただ一途だった、そして臆病だった。自分が間違っていることにも気付かないほど思い詰めていたんだな。」

「もう少し…、もう少し早く木塚さんが声を掛けていれば、思いとどまったのかもしれないわね。」

「ああ、悲しい誤差だな。」

「ええ。でも、きっと、気付くわよね？自分の選択が最悪なものだったってことに。」

「そうだな。たぶん、気付かせてくれると思う。木塚さんが。彼なら、罪を犯した友人を見捨てたりしないだろう。」

「同じ時は二度と来ないから。その時々で最良の選択をしないとね。」

「俺達は、最良の選択をしたものな。時は戻ったけど…。」

「時は戻ったけど、決して同じ時は過ぎさなかったわ。私は今の方が幸せよ。多少の恐怖は味わったけど。だって、自分の歩む道を自分で決められるんだもの。」

「哀…、俺も、時の流れに逆らってよかったと思う。でないと、気

付かないこともあった。あのまま生きていたら、多分、俺は蘭と結婚してただろうな。間違っても気付かずに。哀と出会って、いろんな感情を知った気がする。」

「え？」

コナンの言葉に首を傾げる哀に、慈しむような笑顔で、

「お前に出会って、目の前が真っ暗になるような怒りを知った。子供の恋愛とは違う、慈しむ愛を知った。失うことの恐ろしさを知った。子供相手に嫉妬までしたしな。哀、お前に出会って、お前を愛したからこそ、今の俺がいる。工藤新一とは違う、江戸川コナンという人間が、哀のおかげで出来上がったんだ。お前が俺の前に現れてくれて良かった。」

哀は、コナンの言葉に涙を流し、

「コナン…。私も、貴方に出会えて、感情を取り戻せたわ。宮野志保の時には流せなかった涙が、今はこんなにも溢れてくる…。貴方を愛して、自分の醜い心を知った。私の中に、誰かを愛せる心があることも知ったわ。貴方を失いそうになった時、恐怖で目の前が真っ暗になったわ。貴方が笑っているだけで、心が暖くなるの。こんなにまで貴方を愛せる私がいる。全部、コナン…。貴方のおかげよ？」

止めどなく流れる涙をそのままに、哀は語る。

コナンは、語り終えた哀を抱きしめ、指で涙を掬うと、微笑んだ。

どちらからともなく瞳を閉じ、口付けを交わした。

しばらく2人は何も言わずに抱きしめ合っていた。

2人の周りは、心地よくそよ風、風に揺れる梢、湧き出る水の音。どこまでも透明な、澄んだ空気に包まれていた。

合宿？3日目／早朝のひと時／（後書き）

ちよつと恋人らしい雰囲気も出してみました。  
いかがでしたでしょうか？  
ご感想、お待ちしております。

合宿？3日目〜サプライズ〜（前書き）

5月4日です！

### 合宿？3日目／サプライズ／

コナンと哀が散歩から帰ると、コテージは未だに静寂に包まれていた。

時間は7時の15分前。

仕方なく、コナンは本日2杯目のコーヒーを淹れ、哀は朝食の準備に取りかかった。

今日この日、哀は朝からずっとコナンに言いたいことがあった。しかし、それは歩美から堅く口止めをされていた。

誰よりも先に言いたい。でも、言ってしまうとサプライズにはならない…。

この日のために、アメリカにいるコナンの両親にまで口止めたのだ。

ここで哀が言ってしまったら、全てが水泡に帰してしまう。

何が何でも、歩美との約束は守らなくては。

そんなことを考えながら、料理を進めていると、リビングのドアが開いた。

「あれ／＼？2人とも早いね。おはよー。」

歩美がまだ眠いのか、目をこすりながら挨拶をした。

「おはよう。」

コナンと哀は、同時に挨拶を返した。

「もうすぐ朝ご飯できるわよ。」

哀は、そんな歩美を微笑ましく思いながら、言った。

「はい。じゃあ、着替えてくるね。」

と言って歩美は、リビングを後にした。

テーブルセッティングを終えたコナンは、

「じゃあ、俺は光彦と先生を起こしてくるな。」  
と言って男子部屋へと向かった。

みんな揃って、朝食を食べ始めると、コナンが今日の予定について聞いた。

「なあ、今日は、合宿最終日だろ？帰るのは3時過ぎに出発として、それまでどうする？」

「あつ！私は哀ちゃんにお料理習うの、お昼は期待しててね」  
歩美が、満面の笑みで決めていたセリフを言うと、哀も、

「そう言うことだから、男性陣はどこかに出かけてきてくれない？」  
といい、それに少し不満顔のコナンは、

「えゝ？出かけなきゃダメか？」  
と聞いた。哀は苦笑しながら、

「ええ。腕によりをかけて作るから、楽しみにしてて。」  
といい、フォローするように光彦が提案した。

「じゃあ、僕達は、昨日出来なかった釣りでもしますか？」  
コナンは、乗り気になり、

「そうだな。また、キャンプ場行くか。」  
というと、大友が、

「ん？俺もか？」  
と、間の抜けた様子で訊いてきた。

「当たり前じゃないですか！先生、何を言ってるんですか。」  
呆れ顔で光彦が言うと、大友は、苦笑しながら、

「だよな。」  
といい、頭をかいていた。

「じゃあ、12時に帰り着くように帰ってきてね！」  
話が纏まったところで、歩美が元気に言った。

「ああ。」  
「はい。」

「分かった。」

コナン、光彦、大友はそれぞれに返事をし、残りの朝食を食べ始めた。

時刻は9時。

哀と歩美は、三人を送り出し、早速、料理に取り掛かった。まずはケーキ作り。

スポンジを焼いている間に、コナンの好きなハンバーグの下準備をし、サラダ、コンソープの準備もした。

スポンジが焼き上がり、生クリームとイチゴでデコレーションし、最後に、板チョコにホワイトチョコで文字を書き、冷蔵庫に入れた。12時まであと30分。

テーブルをセッティングし、ハンバーグの形を整え、焼く準備を始めた。

サラダをお皿に盛り付け、各席に置いていく。

コンソープは火にかけ温め始めた。

後は3人の帰りを待つだけにし、2人は雑談を始めた。

「ねえ、哀ちゃん、コナン君、本当に今年も忘れてるのかな？」

「そうね。覚えてないと思うわよ。付き合った記念日とか、私の誕生日とかは忘れないんだけどね。」

「まあ、コナン君らしいって言えばらしいけど……。」

「いいじゃない、毎年、サプライズでいろんなこと出来るんだから。」

「でも、哀ちゃん、本当は、誰よりも早くおめでとうって言いたいでしょ？」

「えっ！？気付いてたのね……。でも、いいのよ。これはこれで楽しいもの。」

「そのうち、2人つきりでお誕生日祝わせてあげるからね!!」

「ふふつ、楽しみにしてるわ。」

「あつ！帰ってきたよ！」

歩美が、窓の外を指さしながら言った。

「じゃあ、ハンバーグ焼き始めましょ。吉田さんは、スープをお願い。」

「うん！」

2人はテキパキと動き出した。

歩美がスープをお皿に移している間に、哀は、フライパンを二つ使ってハンバーグを焼き始めた。

「ただいま。」

「ただいま帰りました。」

3人はそう言いながらリビングに入ってきた。

「おかえりなさい。」

歩美と哀は声を揃えて言う。

「もう出来るから、手を洗ってきて。」

と哀が言うと、3人はリビングから出て行き、少しすると戻ってきた。

3人が戻ると、テーブルには、ハンバーグ、コーンスープ、サラダ、パンが用意されていた。

「おっ！俺の好物じゃん！ラッキー！」

コナンは席に着きつつ、嬉しそうな顔で言った。

「さあ、召し上げれ！」

歩美と哀は、笑顔で促す。

「いただきます。」

3人は、声を揃えて言い、料理に手をつけた。

「おっ！流石、哀が先生なだけあるな！！美味しいよ。2人とも。」

コナンは笑顔で料理を絶賛した。

「本当、美味しいです！」

光彦も料理に舌鼓を打つ。

「いやゝ、2人とも、料理上手いな。美味しいよ。」  
大友も、手放して褒めた。

歩美と哀は、ハイタッチをしながら、

「やったね!!」

「ええ、良かったわ。」

と喜び合っていた。

そして、歩美と哀も料理に手を付け始めた。

和気あいあいと食事を進め、時刻は12時40分。

みんなのお皿が空になったのを見計らい、

「さあ、皆、一旦お皿を片付けましょう。それからコーヒーか紅茶を出すわ。」

と哀が自分とコナンのお皿を片付けながら言うと、

「あつ、わりい。それくらい俺が運ぶよ。」

とコナンが言った。

「貴方は座ってて。」

と哀は微笑みながら、コナンを押しとどめた。

。

「じゃ、私も片付けるよ。」

と歩美が自分と光彦の分を片付けながら言った。

「あつ、歩美ちゃん、僕が…。」

と言う光彦に、ウィンクしながら、

「いいよ。大丈夫!」

と言い、顔を近づけて小声で、

「光彦君はプレゼントを持ってきて。」

と言うと、光彦は無言で頷き、

「あつ、僕はちよつと失礼しますね。」

と言ってリビングから出て行った。

「じゃ、俺も片付けるか。」

と言いながら、大友が立ち上がり、キッチンへと食器を運んでいっ

た。

「あ、先生、そこに置いといて。」

と哀が言うと、

「ああ。」

と言つて大友は身を屈めながら流しに置いた。

次の瞬間、歩美にグイッと引つ張られ、

「先生、今日ね、コナン君の誕生日なの。これから、お祝いでケーキを出すから、コーヒーが入ったら、一回、トイレにでも行くつて言つて席を外して、2分くらいで戻つてきて、電気を消してくれる？」

と小声で話しかけられた。

「ああ、わかった。サプライズなんだな？」

と小声で返ししながら頷く。

「うん！お願いね。」

と歩美が言うと、少し笑つて、何事もなかったようにリビングへと戻つていった。

哀が食器を洗っていると、プレゼントをコッソリと取りに行つていた光彦が戻ってきた。

歩美はコナンに気付かれないために、

「ねえ！皆、コーヒーと紅茶どっちがいい？」

と大きな声で聞き、注意を惹きつけた。

コナンが反射的に歩美の方を振り向き、

「あ、俺はコーヒー。先生は？」

「俺もコーヒーでお願いするよ。」

などと言っている隙に、光彦は、自分の席につき、プレゼントを後ろに隠し、

「僕は紅茶でお願いします。」

と応えた。

「はい！じゃ、ちょっと待っててね。」



と言いながら渡した。

「皆…、サンキューな。」

コナンは、照れたように笑い、お礼を行って、プレゼントを開けました。

中身は、茶色い皮の表紙をしたメモ帳に、万年筆だった。

哀、歩美、光彦、元太は悩んだ末に、実用的な物を選んだのだった。

「おっ、格好いいじゃん。使わせてもらうな。」

と、満面の笑みで喜ぶコナンだった。

「じゃあ、ケーキを切り分けてくるから。」

と言って哀はキッチンへと戻っていった。

綺麗に5等分してお皿に盛りつけて運んできた。

皆でそれを食べ、片付けをし、コナンのサプライズパーティーは終わりを迎えた。

午後3時になり、帰る支度をした5人は、忘れ物がないのを確認して、コテージを後にし、米花町へと帰って行った。

合宿？3日目〱サプライズ〱（後書き）

少し、後半が詰まりすぎた気がします…。  
アドバイスや感想、お待ちしております。

## テスト前の一波乱（前書き）

探偵部のもとに事件が舞い込みます。

## テスト前の一波乱

ゴールデンウィークの合宿以来、目立った事件もなく、普通の高校生のような生活を送っていた探偵部の5人。  
(まあ、下校途中に引つたくりを捕まえたり、たまたま寄ったコンビニで強盗を捕まえたりはしていたが...) )

中間考査を一週間後に控えたある日のこと。

放課後、久しぶりに5人が揃っていた。

何故なら、テストの一週間前から、部活動は全て活動停止になるからである。

そして、教室に残って勉強会をしていた。

光彦と歩美は、それぞれ自分のテスト勉強を。

コナンと哀は、元太に勉強を教えていた。

「だからな、元太、ここは、さっきやった公式を当てはめればいいんだよ。コレな。」

と言いながら、元太の教科書を指さし、教えているコナン。

哀は、その隣で、テストにでそうな問題を予測し、練習問題を作っていた。

「え？あつ！これかぁ。分かったぞ。」

と、元太は教科書を見ながら公式をノートに書き込んで計算を始めた。

そんな様子を、やれやれといった風に見守るコナン。

光彦は自分の席で、英語の書き取りをやっている。

歩美も自分の席で、化学の復習をしていた。

コナンは、元太が問題を解き終わったのを確認すると、

「じゃあ、次はこの公式な。これは、」

ブーブー...ブーブー...

コナンの携帯が鳴り出した。

「あつ！わりい、ちよつと待つてろ！！」

と元太に言い、電話に出た。

「はい、お待たせしました。江戸川です。」

『おっ！コナン君かい？目暮だが。』

「目暮警部、こんにちは。どうなさいました？」

“目暮警部”と言ったのを聞いた他の4人は、コナンの方を振り向いた。

『ああ、こんにちは。今、大丈夫かい？ちよつと事件が暗礁に乗り上げててね……。応援に来てもらえないかと思つてな。』

「事件ですか。ちよつと待つて下さい。」

と言うと、通話口を手で押さえながら皆を振り返り、

「事件だ。どうする？」

と訊いた。

「私はどつちでも平気よ。」

「私も大丈夫だよ！」

「僕も大丈夫です。」

「行こうぜ！勉強は、明日からやればいいだろ？」

と、哀、歩美、光彦、元太の順で応えた。

コナンは一つ頷くと、

「もしもし、お待たせしてすみません。大丈夫です。行きます。現場はどこですか？」

と携帯で話し始めた。

『おお！そうか。良かった。少し遠いから、高木君と佐藤君を迎えに行かせるよ。10分位で着くと思うから、正門で待つてくれ。事件の詳細は、道すがら聞いてくれ。』

「わかりました。では、待つてますので。失礼します。」

と言って電話を切った。

「警部さん、何だつて？」

哀がコナンに近寄り訊く。

「ああ、10分位で迎えが来るつて。正門で待つてるよつに言われ

た。」

コナンが答えると、

「じゃあ、片付けましょう。」

と光彦が言い、出していた教科書やノートを仕舞い始めた。

「うん。あつ、事件の詳細は？」

歩美は片付けをしながら訊いた。

「ああ、道すがら、高木刑事と佐藤刑事に聞くように言われたよ。」  
とコナンが答えると、

「やっと、大きな事件だな。」

と、不謹慎ながらも嬉しそうな元太がいた。

皆が支度を終わると、揃って教室を後にした。

そして、正門前で車を待っていると、先に佐藤刑事の車が到着した。

「皆、こんにちは。待たせてごめんなさいね。」

と佐藤刑事が挨拶をしてきた。

「………こんにちは。」「………」

5人は揃って挨拶を返し、

「あれ？高木刑事は？」

と歩美が訊いた。

「え？まだ追いついてない？」

と佐藤は後ろを振り向いた。

「また、黄色信号でぶつちぎったんじゃないか？」

と元太が呆れたように言うと、

「あら？そうだったかしら。遅いわねえ、高木君ったら！」

と半ば誤魔化すように怒っていると、高木刑事の車が到着した。

「みんな、こんにちは。待たせてごめんな？酷いですよ、佐藤さん

！！何で黄色でスピード上げるんですか！？」

高木は、探偵部の5人に申し訳なさそうに謝罪をし、佐藤へと向き直ると、拗ねたように言った。

「はあ、やっぱりね。ま、いいけど、早く現場に行きましょう？」  
高木と佐藤の様子に溜息をつきながら、哀は促した。

「あっ！そうね。行きましょう。コナン君と哀ちゃんは私のに乗って。高木君は、歩美ちゃん、光彦君、元太君をお願い。まだ何も話してないから、事件の概要を話しながら来て。」

はじかれたように佐藤がキビキビと指示を出す。

「はい！！」

高木は、返事をし、後部座席へ歩美と光彦を、助手席へ元太を促した。

佐藤はコナンと哀を後部座席へと促し、出発した。

それぞれの車で、高木・佐藤は事件の説明を始めた。

「事件は、ある芸能プロダクションで起きたのよ。その社長が何者かに刺殺されたの。発見者は、来日していたアメリカのある女優なんだけどね、発見時の状況は、ドアも窓も鍵は開いていて、そのドアから入り、社長室に行ったところ、被害者がソファの上で仰向けの状態で、胸にナイフが刺さったまま亡くなっていたと証言しているわ。死亡推定時刻は、昨夜の9時半〜翌1時半。その間、ビルに出入りしたのは、正面玄関から2名、裏口からも2名で、外に非常階段はなし。容疑者としては、その4名ね。」

「容疑者については？」

と説明を聞き終わった、コナンと歩美がそれぞれ訊いた。

「ええ、まず、昨夜9時45分に正面玄関から入ったのが、上林鈴【かんばやしすず】さんと言って、芸能プロダクションの下の階のオフィスに勤めているOL。被害者とは、たまにエレベーターで一緒になると、食事に誘われる位の関係ね。」

「特に男女の関係ではなかったと？」

「本人はそう言ってるわ。でも、数回、食事には行ってるみたいね。」

「ふむ。次は？」

「昨夜１０時２０分頃、裏口から入ったのが、右田一雄【みぎたかずお】さんと言って、被害者の大学時代の友人だそうよ。１０時に約束をしていたけど、待ち合わせ場所に現れなかったから、今日は仕事だと聞いていたこともあって、会社に迎えに来たらしいの。でも、会社まで行ったけど、真っ暗で、呼んでも返事がなかったから、入れ違いになったと思い、待ち合わせ場所に戻ったって言うてるわ。でも、そこでも会えなかったから、今日の約束はまた日を改めてにしよう、メールをしたらしいわ。そのメールは、被害者の携帯に未読のまま残ってたわ。」

「そうですか。次は？」

「次は、昨夜１０時２５分に、正面玄関から入ったのが、坂下みずほ【さかした】さん。この人は知ってるかしら？一昨年亡くなった女優の坂下恵美【さかしためぐみ】の娘で、駆け出しの女優よ。現場となったプロダクションに所属しているの。翌日に控えた、アメリカの二世女優との対談についての最終打ち合わせに呼ばれていたらしいわ。約束は１１時だったけど、スケジュールに余裕があり、早めに着いたみたい。体力作りのために階段で四階まで登っていくと、見知らぬ男性が、事務所のドアのところで、社長を呼んで、怖かったから、いなくなるまで待つてたらしいわ。その人が、諦めて帰ったのを見送って、事務所に行ったら、真っ暗で、誰もいなかったから、不思議に思いながらも、電気を点けて１１時過ぎまでそこで待つてたらしいわ。でも、時間になっても社長は現れなかったから、置き手紙をして帰ったって証言してるわ。置き手紙は、事務所のテーブルの上に置いてあったわ。」

「１１時…か。最後は？」

「昨夜１２時１０分過ぎに裏口から入ったのが、左門耀【さもんよう】さんと言って、プロダクションの敏腕マネージャーらしいわ。仕事が終わったから、日報を書くのに寄ったと言ってるわ。いつも人がいないのが当たり前だから、電気を点けて、日報を書いて帰っ

たみたい。夜、鍵はあまり閉めないみたいね。日報を書きに寄るマネージャー達のために開けてあるそうよ。盗まれて困る物は、鍵の閉まる社長室で、金庫に入れて管理しているらしいわ。」

「それで全てですか？」

とコナンが訊くと、佐藤は、言いにくそうに、

「あゝ、もう一つあるんだけど…。」

と言った。

「何？ 私たちにだけ話したかったんでしょ？」

「そのために俺たちをこっちに寄せたんでしょ？」

哀とコナンは、言い淀む佐藤を促す。

「ええ…。実は、その、第一発見者がね、貴方たち2人に会わせるって言うのよ。」

「え？ アメリカの女優が？ 俺たちに…って、まさか！？ ベル」

バシッ！！「むぐっ」

危うくコードネームを言い掛けたコナンの口を、哀は手で押さえた。

「わ…。わりい、シャ」

ドゴッ！！「ぐわっ」

またも、違う名前を言いそうになったコナンの脇に肘鉄を喰らわす哀。

「じ…じゃなくて、俺たちを知っていて、尚且つ、アメリカで女優をやっているのは、クリス・ヴィンヤード。彼女しかないな？」

「そうね。彼女しかないいわ。」

コナンと哀のやりとりを聞いて、佐藤は、

「あつ、良かった。知り合いなのね？」

安心したように言った。

「で？ そのクリスが何で日本に？」

哀は怪訝そうな顔で佐藤に訊いた。

「ああ、さっき話した、二世女優同士での対談の相手がクリス・ヴィンヤードなのよ。それに併せて来日したらしいわ。」

「俺たちに会いたがる理由は？」

「それは言わなかったわ。連れてきてつて言ったきり、一言も話そうとしないのよ。」

「ふう、仕方のない人ね。今更、何の用かしら。」

「ああ、まあ、クリスだしなあ。行けば分かるだろ？それより、被害者についてを教えてもらえますか？」

コナンは哀の方を見て、肩をすくめると、佐藤の方に向き直り、尋ねた。

「ええ。そうだったわね。被害者は、芸能プロダクションの社長で中林公紀「なかばやしきみのり」36歳。未婚で、特定の恋人もなし。テキトウに遊んでるみたいね。あと、仕事で儲けたお金で、友人や知人に金貸しみたいなのをしていたみたいね。取り立ては厳しくないものの、返済が遅れると、その分利息が増すらしくて、返せないでいる人も多いみたい。」

「高利貸し…ね。敵が多そうね。」

「容疑者の中でお金を借りていた人は？」

佐藤は、一瞬考えるようにして、

「全員ね。でも、坂下さんと左門さんは、給料からの天引きと言ったかたちで返済していたらしいわ。」

「そうですか…。」

それだけ言うと、コナンは、右手を顎に当てて考えに沈んでいた。そんなコナンを哀は微笑んで見つめていた。

少しすると、現場に到着した。

直ぐ後ろをついてきていた、高木の車も、今度は引き離されずに一緒に到着していた。

現場に入ると、目暮警部が迎えてくれた。

「いや、悪かったね、皆。話は聞いたかい？」

と言つと、

「いえ、気にしないで下さい。はい、道すがら説明していただきました。」

「じゃあ、早速で悪いが、捜査に移ってくれるかい？」

「はい！」

皆で返事をした。

そして、コナンが皆に指示を出し始めた。

「光彦は歩美と、容疑者に事情聴取を。矛盾していることがあるはずだ。拾い出してくれ。元太！おめえは、被害者の周辺の人に聞き込みを。まずは、社内の人間だな。頼んだ。哀、遺体の確認を。凶器の特徴や、致命傷の詳細を。ノートパソコンは持ってきてたな？出来るだけ調べてくれ。」

それだけ指示を出すと、コナンは、応接室のソファに悠然と座っている一人の人物へと視線を向けた。

視線を向けられた本人は、サングラスを左手で外しながら、笑顔で手を振り、

「Hi! Cool guy! How are you？」

ワザと英語で挨拶をした。

「はあ、クリス、何してんだよ？」

「あら？久しぶりに会った第一声がそれ？酷いんじゃない？一緒に死線を乗り越えた仲でしょ？」

「おいっ！」

クリスの言葉に、焦って周りを見回すコナン。丁度、周りに人はいなかった。

「いやあねえ、大丈夫よ。私が周りも確認せずにそんなこと言うわけじゃないじゃない。」

「クリス…、ちょっとマジ勘弁してくれよ。で？俺と哀をここに呼んだわけは？」

あざ笑うようなクリスに対し、コナンは、ガツクリと脱力していた。「それは…、後で話すわ。まずは、事件を解決しちやいなさい。」

クリスは、不敵に笑うと、コナンを捜査へと戻させた。

そして、コナンは、防犯カメラの映像や、裏口、エレベーターに階段と、容疑者の通ったところを全て確認して回った。

探偵部の5人は、殺害現場となった社長室に集まり、それぞれの収穫を報告しあった。

「まずは、僕と歩美ちゃん調べた件ですが、えー、左門さんの借金は既に返し終わっているそうです。そして、坂下さんと右田さんの証言ですが、不審な点があります。」

「坂下さんは、対談の打ち合わせを10時からする約束だったって言うてるけど、右田さんは、9時に飲みに行く約束をしてたって言うてるの。10時には仕事が入ってるのに、その前に飲みになんて行くものかな？」

「そうだな。どちらかが嘘をついているんだろう。」

「上林さんは、最初、4階には来ていないと言ってましたが、借金のことを言及すると、昨夜は、被害者にお金の返済を待ってもらえるように頼みに来たと証言しました。」

「その時、被害者は生きていたと？」

「うん。そう。それで、返済を3日延ばしてもらえたって。」

「そうか。元太、周りから見た被害者の人となりは？」

「被害者は、人当たりもよくて、挨拶もきちんとする、立派な人っていう証言が多いな。プロダクションの人達にも、厳しくないけど、礼儀作法だけはうるさかったと言ってる。近所で立ち寄りそうな、コンビニや弁当屋、ファミレスまで聞き込んだけど、店員のミスにも寛大で温厚な人だったって証言ばかりだな。」

「元々の性格か。金貸しとしての評判は？」

「ああ、少ない金でも貸してくれて、最初に約束した返済日までは一切、利子は付けられないらしい。ただ、連絡もなしに返済が遅れた場

合は、1日5%ずつ上乘せしていくことになってるとか。分割での返済もOKで、返済が遅れそうなときは、連絡すれば、利子はつけずにいてくれると、金貸しとしては、凄く優しい部類らしいぞ？今まで、お金のことでトラブルが起きたことはないってさ。」

「じゃあ、借金絡みじゃないのか？女性関係は？」

「それは、誰も知らないみたいだったぞ。」

「僕たちの方も、特には何も…。」

「あら…、ちよつと、これ見て!!」

哀が、パソコンを皆の方に向けた。

その画面には、数年前に起きた、ある女性の自殺記事が載っていた。その記事の中に、中林公紀の名が書かれていた。しかも、自殺の原因になったかもしれないとまで書いてある。

しかし、その後に出された記事には、中林氏は、関係なかったとかかれていた。

だが、先の記事を見た自殺女性の関係者はどう思ったか。

この瞬間、探偵部の5人は犯人を悟った。

後は、証拠が必要だった。

そこで、コナンは哀に訊いた。

「遺体で気になった点は？」

「そうね、刺し傷だけど、座っている人間を、無理矢理押さえつけて、まっすぐ振り下ろしたみたいよ。その時押さえたらしい左肩が少し青くなってるわ。片手で振り下ろした割には、深くまで刺さってるわね。」

「左肩？」

コナンは怪訝そうに聞き返した。

「ええ。左。」

哀は淡々と答えた。

その2人の様子に、光彦は少し首を傾げた後、はっとして言った。  
「あっ!!そうか、そう言うことですね!」

光彦の言葉に頷くコナンと哀。

歩美と元太は首を傾げ、

「え？何？」

「何だ？」

と聞いてきた。

その問いに、コナンが光彦をソファに座らせて実演した。

「こういうことだよ。被害者は、ソファに座っていた。そこに犯人が、被害者に馬乗りになるように襲いかかる。被害者には、強く押さえつけられた痣が残っていた。左肩にな。つまり、犯人は右手で被害者を押さえつけ、左手にナイフを持っていたことになる。」

「あつ！！犯人は左利きってことね！」

「ええ。そうです。」

「容疑者の中で左利きの奴なんていたか？」

元太は、不思議そうに訊いた。

「ええ、1人だけ。動機もありますね。どうします？決定的な証拠はありませんよ？」

「ああ…。せめて、ナイフの入手経路が分かればな…。訊いてみるか。」

と言い、コナンは、社長室から出て、目暮警部に話しかけた。

「目暮警部、ナイフの入手経路はまだ分かりませんか？」

「ん？ああ、今、高木君が近所で該当する店に防犯カメラの映像を見に行ってるが…。連絡がまだ来なくてな。」

と目暮が言った直後、ドアが開いて、高木があわてた様子で入ってきた。

「警部！！ありました！容疑者の1人がナイフを買っている様子が映ってます！」

「何っ！？」

目を見開き高木を見る目暮に対し、コナンは、

「それは、……さんじゃないですか？」

と冷静な声で訊いた。

「えっ？な…何でそれを？」

高木は驚いて聞き返した。

「よし！皆、推理ショーを始めるぞ！哀は、さっきの開いといてくれ。」

と高木の質問を無視して後ろを振り向き、探偵部の4人に声をかけた。

「おう！」

「うん！」

「はい！」

「ええ。分かったわ。」

と四人はそれぞれ返事を返した。

「目暮警部、犯人が分かりました。容疑者を集めて下さい。」

コナンは、目暮警部に向き直り、言った。

「ああ、分かった。高木君、みんなを集めてくれ。」

「はい！」

## テスト前の一波乱（後書き）

探偵部による推理ショーは、次話です。  
これから宜しく願います。

## テスト前の一波乱\解決(前書き)

前話の解決編です。

## テスト前の一波乱解決

コナンに言われ、殺害現場である社長室に、容疑者が集められた。

探偵部の5人と向き合つて、左端には目暮警部が。その右隣から順に上林、左門、坂下、右田と並び、少し離れた所で壁に寄り掛かつて立っているのが、第一発見者のクリスだ。

高木と佐藤は、唯一の出入り口である、ドアの前に立っている。

「さて、皆さん、これから、この事件の真相を解き明かしていきます。」

コナンが、始めに話し始めた。

「まず、殺害された、このプロダクションの社長・中林公紀氏についてですが……。」

というと、コナンは元太に目で合図を送った。

それに応えて、元太が話し始める。

「周囲の人からの評判は、温厚で優しく、礼儀正しい良い人だというものが多数を占めていた。そして、金貸しとしての評判も、決して悪いものではなく、むしろ、借りている側からすれば、ちゃんと約束さえ守れば、これ以上に借りやすい所は無いくらいだ。」

「この様に、周りからの評判の良い人でした。それならば、何故殺害されたか？物取りの犯行というのではありません。この犯人は、予めナイフを用意して被害者のもとへと訪ねてきています。そう、殺害することを目的として。ここで、皆さんについてですが……。」

元太の説明に補足をしつつ、話を進めたコナンは、次に、光彦と歩美に視線を向けた。

「まず、上林さん。貴女は、借金の返済期日を延ばしてもらつたために、被害者のもとを訪れました。それは、社長室の鍵が閉まる机の引き出しに、借用書がありましたので、それで確認しました。確か

に、被害者本人の筆跡で三日後に変更がされていました。つまり、上林さん、貴方は、容疑者から外されます。」

歩美は、聞き出したことと、事実を告げる。

「そして、左門さん、貴方の借金も既に返済済みとなっていました。被害者との関係も良好で特に、動機となるようなこともないとなると、貴方も容疑者から外されます。」

光彦が、左門に向き、説明する。

「坂下さん、貴女は、10時に打ち合わせの約束をしていたと証言しました。この件については、貴女のマネージャーさんに確認を取りましたところ、間違いないことが分かりました。その話をしていてのを聞いていた人も、社内にいました。それから、借金についても、生活に支障が出ない程度に、毎月給料から天引きされてますね。これについて、問題が起きていたこともないようですので、貴女も容疑者から外されます。」

歩美が坂下を見ながら言った。

「最後に、右田さん。貴方は、9時に被害者と待ち合わせをしていてと証言しました。しかし、10時には仕事を控えている被害者が、その前に出かけるでしょうか？被害者のスケジュール帳にも、そのような予定は書かれていません。借金につきましては、分割で問題なく返してきてます。しかし、貴方には一つだけ、動機がありました。」

光彦がそこまで言うと、哀はノートパソコンを皆の方に向けながら、「これよ。数年前、ある女性が自殺をした。その原因と目されたのが、当時、その女性と深い関係にあったと思われる、被害者・中林公紀氏。けど、この記事の数日後、訂正記事が出されているわ。でも、この記事を読んだ女性の遺族はどう思ったかしらね？この女性名前は天野玲子【あまのれいこ】、旧姓は右田。つまり、右田一雄さん、貴方の妹さんね？」

と、淡々と言った。

「動機は妹の復讐。それに、被害者が犯人に押さえつけられたとき

に残った左肩の痣、ナイフの刺し位置を見ても、犯人は、左利きであることは間違いない。」

と言って、コナン、光彦、歩美、元太は、それぞれ4人の容疑者に向かつて、持っていた探偵団バッジを投げた。

上林、左門、坂下は、反射的に右手で、しかし、右田だけは、左手でキャッチした。

「ほら、右田さん、貴方だけが左利きですよ。それに、貴方がナイフを購入するところが、店の防犯カメラに映ってますよ。言い逃れは出来ません。」

と、コナンが、決定的な証拠を提示し、犯人である右田を追いつめた。

その間に、光彦と歩美と元太は、探偵団バッジを回収しつつ、右田から、他の3人を遠ざけた。

「は…はは…は…。そうだよ。俺だよ。俺が中林を殺したんだ。あんな奴、死んで当然さ。俺の妹を…玲子を不倫させたあげく、旦那にバレそうになったからポイだと…。いきなり捨てられ、旦那には責められ、行き場の無くなった玲子は、追い詰められて、死を選んだんだ。俺に何の相談もなくな！何故？そんな事は簡単だ。奴が、俺の友人だったからだよ！！だから、俺にも相談出来ず、あいつは自殺したんだ。遺書も残さずにな。それを知ったのは、ごく最近だ。あの記事を、俺は信じていなかったからな。だが、あいつの旦那に久しぶりに会って、聞いたんだ。あいつが中林と不倫していたと。自分が気付いた途端、玲子は捨てられたらしいとな。まさかとは思ったさ。でもな、それが真実だったんだよ。俺は自分の不甲斐なさに憤った。その内、全ては中林の所為だと思うようになった。何で玲子は死んでしまったのに、奴はのうのうと生きている？そんなことを考えていた。俺には、奴に復讐する権利がある。そう思ったんだ。だから殺した。」

右田は、暗い顔で全てを語っていった。

語り終えた右田に、高木が近づき、手錠をかけて、ドアから出て行った。

パチパチパチパチ

場違いな拍手が社長室に響いた。

「流石ね、Cool guy。」

拍手をしながらそう言ったのは、それまで壁に寄りかかりながら見ていたクリスだった。

「クリス…。」

コナンは、溜め息混じりにクリスの名を呟いた。哀も溜め息をついている。

そんな二人の様子と、クリスに目を留めた歩美は、

「ねえ、あの人、コナン君と哀ちゃんの知り合いなの？」

と訊いてきた。

「え？ええ。そうね…。古い知り合いよ。」

哀は少し困ったような顔で答えた。

「よし、じゃあ、俺達も帰るか？」

コナンは、話題を変えるため、みんなを振り返り、笑顔で言った。

「はい。帰って勉強しなきゃいけませんしね。」

と光彦が言くと、元太は、

「おっおう！そうだな。勉強だな…。」

と少しテンションを落として言った。

「元太、今日教えたところだけでも、復習しとけよ？明日、問題出すからな。」

と、コナンは、少し真面目な顔で言って、

「じゃあ、佐藤刑事、申し訳ないんですが、歩美ちゃんと光彦と元太を送ってやって下さい。」

と、ドアの所に立っていた佐藤に話しかける。

「ええ。分かったわ。貴方たちは？」

と訊かれると、今度は哀が、

「私とコナンは、クリスと話があるのよ。だから、別で。どうせ一台じゃ乗りきらないしね。」

と答えた。

「クリス、今日の対談は、延期か？だったら、家で話そう。」

とコナンが、クリスに話しかける。

クリスは、チラッと坂下を見ると、

「ええ。そうね。時間も時間だし。」

と答えた。その会話を聞いていた坂下も頷いている。

「と言うことで、悪いんですが、車をもう一台」

「私の車で行くわよ。」

コナンが目暮に向いて声をかけている途中で、クリスは話を遮った。

「あ？車なのか？じゃあ、目暮警部、俺達の分の車は大丈夫です。」

と、クリスに確認した後、目暮に向かって言った。

「おお。そうかい？じゃあ、今日はご苦労だったね。ありがとう。」

また、何かあったら電話するよ。クリスさんも、ご協力ありがとう  
ございました。」

と目暮は、探偵部とクリスに挨拶をし、部屋を後にした。

「歩美ちゃん、光彦君、元太君、送っていくわよ。」

佐藤に呼ばれ、3人は、

「あ！じゃあ、また明日ね。」

「では、お先に失礼します。」

「また、明日な！」

と挨拶をすると、佐藤を追いかけて部屋を後にした。

「さて、哀、クリス。俺達も帰るぞ。」

「ええ。車を回してくるわ。表で待ってて。」

「ええ。分かったわ。」

と会話を交わすと、コナンと哀は共に、クリスは車を取りに出て行

つ  
た。

## テスト前の一波乱解決（後書き）

矛盾は無かったと思いますが、いかがでしたか？

感想や、アドバイス等、ございましたら、コメントいただけると幸いです。

また、次話も宜しく願います。

## 理由（前書き）

コナンと哀、そしてクリスの会話です。

## 理由

クリスの車を待ったため、ビルの前に立っているコナンと哀。あまり自覚はないが、どこから見ても美男美女。故に、道行く人たちは、皆振り返ったり、コソコソ話しながら通ったりしている。

そんな事には全く気付かず、コナンは、

「あ、ちよつと飲み物買ってくる。ここで待っていてくれ。」

と言い、自動販売機の方へと走っていつてしまった。

哀は、仕方ないので、クリスの車を待ちつつ、コナンの方を見ていた。

「ねえ、君、一人？暇なら、俺達と遊びに行かない？」

と見知らぬ男の二人組に声をかけられた。

しかし、哀はそっちを見もせず、

「今、忙しいの。人を待ってるし。」

と無表情で応えた。

「えゝ？待ってるのって女の子？だったら、その子も一緒にさあ。」

と尚も引き下らない男たちに、

「はあ。言っただでしょ？忙しいって。……あつ。」

哀は面倒くさそうに言っ、コナンが来るのに気付き、声を上げた。それに反応して、男たちは、

「え？何？友達来たの？」

と言いながら哀の視線の方を振り向いた。

そこには、缶コーヒーを3つ持ちながら歩いてくる、制服姿の男がいた。

男たちは一目で気付いた。

『勝てない……。』

と。そして、早々にその場を立ち去っていった。

「哀？今の奴らは？」

と哀のもとに辿り着き、コーヒーを渡しながらコナンは訊いた。

「ああ、ただのナンパよ。貴方を見ただけで逃げていったわ。」

哀は、コーヒーを受け取りながら答えた。

「そつか。大丈夫だったか？」

少し心配そうな声で言っていたら、

プップーッ

車道からクラクションが聞こえてきた。

左ハンドルの外車なので、窓から顔を出し、

「Cool guy！哀！乗りなさい。」

とクリスが声をかけてきた。

コナンと哀は車に走り寄り、後部座席へと乗り込んだ。

コナンからコーヒーを受け取ったクリスは、車を走らせ始めた。

少しの間、無言が続いたが、意を決したように、

「なあ、クリス…いや、シャロンと呼ぶべきか？」

とコナンが口を開いた。

「ふふふ。クリスにして頂戴。貴方たちと一緒に、私も生まれ変わったのよ。だから、今はクリス・ヴィンヤードよ。」

とクリスが返した。

「そうだったわ…。新しい名前で罪を償って生きていく約束だったわね。」

哀は少し悲しみを帯びた目をしていた。

「哀…。仕方なかったんだ。クリスは、ベルモットとして、組織の命令には背けず、何人かの命をその手で奪ってしまったんだから。」  
とコナンは哀を諭すように言った。

「そうよ、哀。貴女とは違うわ。貴女は、薬を開発していただけたもの。それを勝手に使ったのはジンよ。貴女に咎はないわ。私は自分の命と他人の命を秤に掛けた。そして、自分の命を取ったのよ。」

だから、今があるの。でも、今私がこうしていられるのは貴女たちのおかげよ。」

クリスは、バックミラーで哀を見ながら言った。

「コナン、クリス…。ありがとう。」

哀は、目尻に涙を浮かべながら礼を述べた。

「ところで、クリスは何で俺達を呼んだんだ？」

コナンは、ずっと気になっていたことを訊いた。

「家に着いたら話すわ。」

「そうか。この時間じゃ、夕飯食べながら良いな。」

「そうね。じゃあ、悪いけど、スーパーに寄ってもらえるかしら？  
流石に3人分の食材は無いわ。」

「あら、悪いわね。分かったわ。道案内してもらえるかしら？」

「ええ。」

などと話をしながら、スーパーに寄り、工藤邸へと向かった。

工藤邸に着き、哀は早速夕食作りに取り掛かった。

今日は、クリスもいるので、和食にする事にした。久しぶりの日本。そう、あの時…組織を壊滅に追いやり、罪を償うべく、FBIと共にアメリカへと帰っていった以来の筈だ。

と言っても、家庭料理しか出来ないが…。

メニューは、鰯の塩焼き、ほうれん草の胡麻和え、高野豆腐と根菜の煮物、ごはん、漬け物、茸の味噌汁である。

最初、クリスも手伝おうとしたが、哀が、

「クリスはお客さんだから、座って待っていて。今、コナンがコーヒーを淹れるから。」

と言い、コナンも頷きながら、コーヒーを淹れ、座るように促した。  
「分かった。大人しくしてるわ。」

と言い、クリスは、リビングの椅子で待つことにした。

時刻は7時を少し過ぎたところ。

リビングのテーブルに夕食が並んだ。

三人は、揃って食べ始めた。

少し食べ進めた頃、コナンが本題を切り出した。

「で？クリスは、何で日本に来て、俺らを呼び出したんだ？」

「日本に来たのは、女優としての仕事よ。聞いたでしょ？二世女優同士での対談。」

「いや、だから、何でそんな仕事受けたんだよ？シャロンもオメエじゃねえか。」

「ふふふ。そうね。だけど、一応向こうではシャロンの娘として女優してるの。シャロンのことは、誰よりもよく知ってるしね。受けても問題はないでしょ？」

「確かに、貴女自身なんだから、おかしいな受け答えにはならないでしょうね。でも、それだけの理由なの？」

「…まあ、オフアーが来たとき、一瞬迷ったのは事実よ。受けたのは、そこが日本で、しかも貴方たちがいる米花町から近かったから。」

「「え？」」

「会いたかったのよ。貴方たちに。ただそれだけ。」

「俺達に会ったため…？」

「じゃあ、私たちを呼び出したのは、事件が起きたからじゃないの？」

「そう。貴方たちが理由。たまたま事件が起きたから、警察に呼び出さただけよ。事件が無かったら、直接ここに来てたわ。」

「そうだったのか。何で俺達に？」

「貴方たちの様子は、有希子から聞いていたの。あれからずっとね。」

有希子は、私が犯罪者でも、変わらずに接してくれてるわ。シャロンの時そのままに…ね。」

「有希子さんらしいわね。」

「ええ。有希子のおかげで、私は救われたわ。」

「ふっ。母さん…、シャロンを尊敬してたからな。組織の一員だつて分かったとき、悲しんだり怒ったりするより先に心配してたし。」

それほどまでに、母さんにとってシャロンは大事な存在だったんだ。だから…クリス、オメエのことも大事なんだよ。」

「そうね。私も有希子のこと、大事よ。大切なたった一人の親友。」

「喜ぶわね。それ聞いたら。」

「ああ。その言葉、母さんに言つてやつてくれな？」

「ええ。…それで、今回、日本からのオファーが来て、丁度いい機会だと思つたのよ。久しぶりに貴方たちの顔を見て、幸せでいるか、この目で確かめたかつたの。それに、報告したいこともあつたしね。」

「クリス、私達は幸せよ。元の姿に戻なくても、理解者はいるし、周りにも恵まれているわ。私はここで、かけがえのない友人たち、第二の父親、そして愛する人を見つけられたもの。」

「俺も、新一の時には得られなかった、大切な仲間、良きライバル、愛する人を手に入れた。俺達の今は、昔より、数倍も良い環境だぜ？ 幸せじゃないわけ無いだろ。」

「良かったわ。それを聞けて安心した。特に哀、貴女は、亡くなつたご両親、そして明美の分も幸せにならないといけないのよ。それが、貴女の償いなんだから。貴女が幸せになることが、薬を飲んで生き残つた私やコナンへの罪滅ぼしよ。」

「そうだぞ、哀。オメエは、俺の隣で幸せになるんだ。オメエが幸せなら俺も幸せなんだからよ。」

「クリス…コナン…、私、罪を償えてる？ 貴方たちの未来を変えてしまった罪を…。私、今でも充分幸せよ。コナンと共に人生を歩んでいけるもの。これから先も、死が二人を分かつ時まで、私は、

コナンの隣に居続けるわ。」

「それでいいのよ。私達が望むのは、貴女の幸せただ一つなんだから。」

「ああ。…ところでクリス、報告って何だ？」

「そういえば、そうね。何かあったの？」

「あ…ええ、私、FBIに入ることにしたのよ。あの時、私、組織壊滅の為に手を貸したでしょ？その時、罪を償った後に、FBIに入らないか？って言われてたの。」

「FBIに？大丈夫なのか？ジョディ先生だっているんだろ？それに、赤井さんだって…。」

「大丈夫よ。ジョディに関しては、ちゃんと罪を償ったし、せざるを得ない状況だったことも理解してくれたわ。赤井は、昔のこと何て気にしてないわ。彼の心にずっと残っていられるのは、明美くらいよ。」

「そう…、彼、お姉ちゃんのことを、今でも想ってくれてるのね。でも、そろそろ解放されるべきだわ。お姉ちゃんならきっと、彼が幸せになることを願ってるはず。例え、自分のことを忘れられてもね。」

「そうだな。明美さんはそういう人だよな。クリス、赤井さんにそう伝言してくれるか？」

「ええ。明美のためにもね。志保からの伝言、ちゃんと伝えるわ。」  
哀は、クリスに微笑み、少し考えるようにしてから、口を開いた。

「クリス、貴女も今、幸せ？」

クリスは、一瞬、目を見張ったが、次には破顔して、

「ええ。私も幸せよ。シャロンの人生に引けは取らないわ。私を心配してくれる親友がいるし、やりがいのある仕事もできるわ。それに、貴方たち二人が幸せそうに笑ってる。それだけで、私は幸せよ。」

それを聞いたコナンと哀は、満面の笑みで、

「…よかった。」

と言い、

「俺達の結婚式には、招待状出すから。絶対来てくれな？」

「私達の幸せを、貴女にも祝ってもらわないとね。」  
と言った。

「ええ、勿論よ！何があっても駆けつけるわ。」

こうして工藤邸の夜は更けていった。

その日、クリスは、工藤邸に泊まり、翌日は仕事の為、二人が起きるより早くに出て行った。

コナンと哀宛に、

『コナン・哀

ありがとう。

貴方たちが幸せで凄く嬉しいわ。

あまり会いには来れないけど、いつでも二人の幸せを願ってる。  
結婚式、楽しみにしてるわね。  
じゃあ、また。

クリス・ヴィンヤード』

と言う置き手紙だけが残されていた。

## 理由（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。  
次回も宜しく願います。

## 謎（前書き）

今回は、歩美・光彦・元太が、コナンと哀の謎に迫ります。

## 謎

事件の翌日。

歩美と光彦と元太は、テスト勉強そっちのけで、あることを話し合っていた。

発端は、昨日の話。

コナンと哀が、第一発見者である、アメリカの女優クリス・ヴィンヤードと何やら知り合いらしいということ。

小1の時から、ずっと行動を共にしているが、自分たちは、クリスに会った記憶がない。

ならば、いつ、どこで知り合ったのか？

そもそも、コナンも哀も、自分たちに対して秘密が多い。

よく、2人だけでヒソヒソ話していたし。

昔は、いつの間にか2人だけで事件を解決してたことが多かった。小1の時から、大人さえ知らないような知識も持っていた。

あの2人は何者なのか？

今更ながら、そんな疑問が浮かんた。

元来、気になることをスルーできる質じゃない3人は、意を決して聞くことにした。

放課後。

今日も5人揃って、テスト対策の勉強会。

哀は、3人のために、テストに出そうなのをピックアップし、問題集を作ってきていた。

それを3人に渡し、哀とコナンは、元太の為に練習問題を作っていた。

3人は、コッソリと視線を交わすと、ペンを置いた。

そして、光彦が、

「あの…、コナン君、灰原さん、ちょっと良いですか？」

改まって話しかけてきた。コナンと哀は、不思議そうに振り返り、

「何だ？」

「何かしら？」

と応えた。

「昨日のことなんだけど…。」

歩美がおずおずと話し出した。

「2人は、あのクリス・ヴィンヤードと知り合いなの？あの人、アメリカの女優さんでしょ？」

「ええ。古い知り合いよ。」

「古い？いつ知り合ったの？私達に会う前？」

「初めて会ったのは…、いや、えーと、クリスの母親は知ってるか？女優のシャロン・ヴィンヤード。彼女と、俺や哀の両親が知り合っただったんだ。」

コナンは、昨夜決めたばかりの設定を話し始めた。

「ご両親というと、本当の…？」

光彦は少し抑えめの声で訊いた。

「ああ、俺も哀も、ここに来る前はアメリカにいたからな。その時の知り合いだ。」

「こつちに来てからも、私達を心配して、様子を見に来てくれたこともあったのよ。」

「へえ、そうだったのか！」

「工藤のご両親も知ってるんですか？」

「そういえば、コナン君のお母さんは、昔、女優さんだったよね！」

「え？ ああ、母さんとシャロンが友人だったんだ。まあ、平たく言えば変装仲間だな。今は、クリスと仲良くしてるみたいだけだな。」

「ここしばらくは様子見にできなかったんだよね。最後に会ったのは小2の時かしら。最近、有希子さんに私たちのことを訊いていたみたいよ。」

「へえ、じゃあ、2人が昔から英語とか喋ってたのは、帰国子女だから？」

「え？（急に話変わったか？）ああ。まあな。」

「そういえば、お二人は昔からいろんな知識をお持ちでしたよね。」

「それこそ、大人さえも知らないようなことまで……」

「円谷君……？」

「この前、大友先生が言ってたでしょ？ あり得ないって。私達、全然不思議に思ってたんだけどね。」

「俺達、何でも知ってるお前等のこと、スゲーって思ってるだけだったし。」

「でも、昨日のクリスさんのことで、ふと疑問に思ったんです。あの頃は、幼すぎて何も分かっていませんでしたが、今思えば、お二人には不審な点が多すぎました。」

「え……？」

三人からの突然の言葉に、コナンも哀も鳩が豆鉄砲をくらったような顔をした。

「まずは、お2人の知識量です。一体、いつどこで勉強をしたのか……。実際、テスト勉強なんてしたことありませんよね？ 受験勉強もいつも、僕たちに教えてくれてたじゃないですか。」

「それは、授業を聞いてれば何の問題もないから。予習も復習もする必要ないでしょ。」

「それは……！……そうかもしれないけど……。でも、受験は……！」

「受験も、今まで習ったことしかないだろ？」

「そんなこと言ってもよお、普通忘れちまうもんじゃねえか？」

「それは、記憶力の差よ。それに、貴方たちに教えることで、私たち自身の復習にもなるのよ。」

「そっか。そうだよね！2人は、人より記憶力がいいんだね！」

「ああ、そうだな。」

「では、事件現場での、薬や物理の知識、車やボートの運転はどうなんですか？どれも、小学生ができることじゃありませんよ？」

光彦は、2人に真剣な顔で詰め寄った。

「うっ…、それは、どれも本とかでな！」

「本！？小学生が？」

「ええ、アメリカの家には、医学書や薬学書、科学に物理学。いろんな本が置いてあったわ。両親共に研究者だったからね。」

「そんな本を、ほんの子供の頃に？」

「ああ、他に無かったからな。一年の大半を研究所で過ごす親たちが、俺達に買い与えたものなんて、何もなかったんだよ。必然的にそこにあるものを読んで、単語や文章を覚えた。テレビは、点けても、ニュースばかり。仕方ないだろ？こんな風に育ちまっても。」

「あ…、すみません。」

「わ、わりい。」

「ごめんなさい。」

寂しそうに語るコナンと哀に、三人は思わず謝った。

「いいのよ。もう、昔のことだもの。こっちに来て、博士や皆に会って、今は充分幸せなんだから。」

哀が微笑んで言った。

「そうだな。俺も、こっちに来てからは、それまで知らなかった、仲間ってものに出会えたしな。」

コナンも、ニカツと笑って言った。

「僕たちも、お二人に出会えて良かったです！」

「うん！日本に来てくれてありがとう！！」

「おめえ等がいなかったら、探偵団はなかったんだしな！」

こうして、この話は、終わったかに見えたが…。

光彦が、次の謎をぶつけてきた。

「では、よく2人だけで、シリ阿斯な顔をしてヒソヒソ話していたのは何故ですか？」

「それは、まあ、何だ…。育った境遇もあつたんだろうけど、俺たちは似たもの同士だつたんだ。まだ子供だつた俺達は、その体に見合わない知識を持っていた。対等に話せるのがお互いしかなかったんだ。」

「そう…。博士を除けばね。博士は、私達を理解して、受け入れてくれてたわ。だから、安心して身を寄せていられた。でも、それ以外に、素で話すことができたのは、コナンとだけだつたの。」

「だから…。だから、2人で話してたの！？もう少し私たちを信用してくれても良かったのに。」

「そうですね！ヒソヒソ話す必要があつたんですか！？」

「俺達の前でくらい、素でいれば良かったじゃないか！！」

歩美は泣きそうになりながら、光彦と元太は、少し怒つたように、2人に詰め寄つた。

「信用するしないの問題じゃないのよ。話が合うか合わないかなの。意味の分からない話ほど、ツマらないものはないでしょ？」

「それに、俺達は、おめえ等のこと、信用してたさ。信用出来ない人間と連むほど、バカじゃない。」

「でも、私は、コソコソされるよりは、意味わかんなくても、一緒に話してたかつたよ！！」

とうとう、歩美の目から涙がこぼれた。

「吉田さん…。ごめんなさい。楽しそうに話す貴方たちに、遠慮してたの。その笑顔を、小難しい話で曇らせたくなかった。貴女の笑顔は、私に勇気を与えてくれたのよ？」

哀は、歩美を抱きしめながら言った。

「哀ちゃん…。哀ちゃんは、昔、1年生の時、死のうとしたことがあつたでしょ？私が知ってるだけで2回。」

歩美は、涙を拭いながら、哀の瞳を真っ直ぐ捉えながら言った。

「吉田さん…、気付いていたの？」

「ううん。今思えば、アレは、死にたい人の行動だって。」

「そう…。あの時は、アレが最善だと思ったのよ。でも、2回とも阻止されたわね。」

「何で？どうして死のうとなんてしたの！？」

「だって、私には誰もいなくなってしまったんだもの。人に迷惑をかけて生きるくらいなら、死んでしまった方がいいと思ったのよ。」  
ここで、ずっと黙って聞いていたコナンが口を開いた。

「哀はもう、二度と死のうなんて思わねえよ。だから、歩美ちゃん、哀を許してやってくれ。」

「本当？」

「ええ。私でも人を幸せに出来るってわかったから。二度とあんなまねはしないわ。約束する。」

と言い、哀は、歩美に向かって小指を差し出した。

歩美は、哀の小指に自分の小指を絡ませ、

「指切りげんまんだね！嘘ついたら友達やめるんだから！！」

と言った。哀は苦笑して、

「それは困るわね。吉田さんは、私にとってただ一人の大切な親友なんだから。」

と言った。

「えへ。哀ちゃん大好き！でも！！哀ちゃん、いつの間にか吉田さんって呼んでる…。歩美って呼んでって言ったのにい。」

「あつ…ごめんなさい。歩美ちゃん。気を付けるわ。」

「うん！」

2人を見守っていた男子3人は、安心したように顔を見合わせ、微笑んでいた。そして、また、光彦が現実へと皆を引き戻す一言を發した。

「コナン君、灰原さん、僕、まだ不思議に思っていることがあるのですが。」

「あ？何だ？」

「出会った頃、灰原さんも、服部さんも、コナン君の事を、工藤って呼んでることがありましたよね？」

光彦は、真剣な目で言った。

「…そうだったかしら？私は、ずっと江戸川君って呼んでなかった？」

哀は、無表情のまま、首を傾げつつ聞き返した。

「いえ、確かに、灰原さんは、僕達や大人たちの前では、ずっと江戸川君と呼んでました。けど、2人きりの時とか、博士や、服部さんという時は、工藤君と言っていたでしょ？」

「服部は、俺が新一さんに似ているから、工藤って呼んでいたんだよ。俺や哀のことも理解してくれていたし。」

「私は…、彼が、工藤家に養子に行くことを知ってたのよ。」

「えっ！？何で？」

歩美は驚いて声を上げた。

「ああ、それはな、哀の両親も俺の両親も、同じ事故で亡くなったんだ。頼った先も、知り合いだった、工藤家。俺は、本当の親戚だから、身寄りの無くなった俺を養子にしたいという話が来てたんだ。哀のことも、養女に迎えたいって言ってたんだが、それは、哀自身が決めた。だから、工藤の両親は、哀を阿笠博士に預けることにしたんだ。俺も、江戸川と言う名を無くしたくなかったから、断り続けてきた。でも、名前はそのまま良いから、自分たちの庇護下に入ってほしいと言われたんだ。この先の人生のためにもとな。」

「私も、博士にお世話になった当初は、養女なんて考えてもいなかったわ。でも、一緒に暮らしていく中で、本当の父親になってもらいたくなったのよ。名実ともにね。そういうわけだから、私は、彼が工藤になると思ってたの。だから、慣れるために工藤君と呼んでいたんだけどね、彼が嫌がるものだから、2人きりの時や、このことを知ってる人の前だけで、呼んでたのよ。」

「そういうことだったんですか。ずっと気になっていた胸のつかえ

「がとれました。」

「そう？良かったわ。」

「もう、無いな？」

「うん、とりあえず、全部解決したよ！」

「良かったわ。」

「もう、2人だけでコソコソするんじゃないぞ！！」

「ああ。わあったよ。」

「ええ。気を付けるわ。」

「じゃあ、テスト勉強再開しますか！！」

「うん！」

「おう！！」

と、2人に対する謎を解消させた3人は、気合いを入れて勉強を始めた。

そんな様子を、微笑んで、しかし、少し切なげな顔で見守るコナンと哀がいた。

## 謎（後書き）

表現というのはなかなか、難しいものですね。

何か、アドバイス等ありましたら、コメントいただけると幸いです。  
次話も宜しくお願いします。

**探偵部への復讐？（前書き）**

お待たせしました。

やっと話が纏まりました。

## 探偵部への復讐？

中間考査も無事に終了し、普段の生活に戻った探偵部の5人。

今日は、張り出されている中間考査の結果を見ていた。

張り出されているのは、各学年の上位30名。

5人が見ている1年生の順位表には、1位が2人いた。言わずもなだが、1位の2人とは、コナンと哀である。

3位と4位には、光彦、歩美と並んでいる。

残念なことに、元太の名前だけは、探しても見つからなかったが。

そんな順位表を前に、浮き足立つ周りを余所に、探偵部の5人は、

「流石ですね。コナン君と灰原さんは。満点じゃないですか！」

「いや、光彦と歩美ちゃんだって、ほぼ満点じゃないか。」

「えへへ。頑張ったもん♪」

「このままキープしていかなきゃね。」

「ちえつ、俺だって頑張ったのによお。」

「まあまあ、元太君だって、赤点はなかったんでしょ？」

「ん？ああ。ギリギリクリアしてたぜ！！」

「良かったじゃねえか。」

「私達に感謝しなさいよ。」

「そうだよ。哀ちゃんとコナン君のおかげなんだよ。」

「分かってるよ。2人には感謝してるって！！」

などと会話を交わしていたが、そこで、コナンの携帯が震えだした。

「お？ワリイ。電話だ。」

コナンは、そう言って携帯を取り出し、喧噪から遠ざかりながら、

「はい、江戸川です。」

『お、コナン君か？目暮だが。今、ちょっといいかな？』

「あ、目暮警部、大丈夫ですが、どうしました？」

『今朝、警視庁宛に、犯行声明が送られて来たんだが、どうも、君たちに関係があるらしくてな。』

「えっ！？それはどういうことですか？」

『ああ、その犯行声明の中に、【少年探偵団への復讐】と言う言葉があるんだ。』

「それは…今までの事件の犯人から考えた方が良さそうですね。僕達に関わった事件で、出所している犯人はいましたか？」

『ああ、今、それは調べてるところだが、まだ、声明文を解読できていないんだ。』

「では、哀のパソコンメールに、声明文の内容を送ってください。』分かった。じゃあ、直ぐに送らせよう。授業が終わった頃に迎えをやるう。』

「はい。では、それまでに解読を進めておきます。」

『よろしく頼んだよ。』

「失礼します。」

コナンが電話を切ると、

「警部さん、何て？」

「ああ、何か、犯行声明が届いたらしいんだが、どうも、俺達に恨みを持つ者の犯行みたいなんだ。」

「え？それって、今まで捕まえてきた犯人ってこと？」

「それは今、警察が、過去の事件の犯人で、刑を終えて出所している犯人の洗い出しをしてくれてる。」

「そうですか、では、声明文の内容は？」

「ああ、哀のパソコンにメールしてもらえるように頼んでおいた。」

「じゃあ、早く教室に戻ろうぜ！！」

「ああ。急ごう。放課後まで時間もあまり無いしな。」

「迎えに来るって？」

「授業が終わった頃にな。」

と、会話を交わし、5人は、急ぎ足で教室へと戻っていった。

哀がパソコンを起動させ、メールを開く。

「来てるわ。コレね。」

そのメールの内容は、

警察に告ぐ

来る6月23日、鳥が羽ばたく時。

少年探偵団への復讐の音色が響きわたる。

英知を集めて築き上げたはずのバベルの塔は、一瞬にして崩れ去り、人々は、光と音を同時に失うだろう。

## アレクト

これが全文である。

「バベル塔…、光と音…電波塔か？だとすると、東都タワーだな。」

「一瞬にして崩れ去る言うことは、爆弾ですかね？」

「鳥が羽ばたく時って？？」

「鳥って言うと、朝か？」

「それだと、時間が特定できないわ。もっと何か時間がわかるような…あつ！十二支じゃないかしら？」

「ああ、そうすると、午後6時だな。」

「と言うことは、6月23日の午後6時に東都タワーを爆破するということですね。」

「でも、この、アレクトってどういう意味なのかな？」

と、歩美が、パソコン画面を指さしながら言った。

哀は、少し考えてから、

「…ギリシャ神話にそんな神がいたわ。復讐の女神だったはず。」

「ああ。アレクト（a l e c t o）絶え間ない怒りの復讐神…だな。」

「やはり、僕達が関わった事件の犯人でしょうか？」

「復讐の女神ってことは、女が犯人か？」

「そうとも限らないかも。捜査の攪乱を狙ってる場合もあるからね。」

「そうだな。過去の事件からの容疑者の洗い出しは、警察に任せた方がいいだろう。」

「まずは、爆破を止めないと。23日は、明日よ。予告してきたってことは、爆弾は、既に仕掛けられていると見て間違いないわ。」

「ええ。では、放課後は、迎えに来ていただいたその足で東都タワーに向かいましょう。」

「うん！だいたい場所は予想できないかな？」

「ヒントは、崩れ去りと、光と音を同時に失うってとこだよな！」

「ああ、ただ、崩れ去りが、そのままの意味なのか…。光と音を同時に失うについては、建物自体ではなく、電波の送受信をしている場所のような気もするんだよな。」

「そうね。搜索するなら、建物の基礎と、電波の送受信の場所を中心にするべきね。」

「爆弾を見つけて処理できても、犯人を捕まえないと、終わりは来ねえよな。」

「うん。多分、爆弾は見つけられるはず。でも、その間に犯人は次の場所に爆弾を仕掛けるんじゃないかな？」

「歩美ちゃんは、東都タワーの爆弾は罠だと？」

「違うかな？何か悪い予感がするの。」

「歩美ちゃんの予感は割と当たるのよね。」

「ああ。しかも、犯人は、俺達探偵部への復讐だと明言してるしな。」

「危ないとなると、俺達に関係のある場所か？」

「と言うことは、今、一番可能性があるのは、ココ…学校ですよね？」

「だが、近年、学校には、そうそう部外者が立ち入れないようになってる。」

「でも、他には思い当たるところないよ。」

「やっぱ、学校じゃねえか？俺達が帝丹高校に揃って入学したのは、有名だぜ？」

「警戒する必要があるな。元太は、今日は部活だろ？」

「おう。」

「じゃあ、部活終了後に、構内の見回りをしてから帰ってくれ。その時間にあわせて光彦は学校に戻ってくれるか？」

「はい。わかりました。不審物の搜索ですね。元太君、6時頃に部室前で待ってますから。忘れないでくださいね。」

「ああ。わかった。」

「歩美ちゃんと哀は俺と東都タワーに。今日中に見つけるぞ。」

「うん！」

「ええ。あ、そうだわ、先生にはいつ報告する？」

「あゝ…、一応、学校への被害も考えられるからな。先に知らせると面倒なことになりそうだが…、言わないわけにもいかないよな。」

「そうですね。では、僕が、戻って来た時に居たら報告しておきますよ。」

「わりいな、光彦。頼んだ。」

こうして、授業中も、この後の段取りについて話し合いを続けていた5人だった。

**探偵部への復讐？（後書き）**

ありがとうございました。

犯行声明文って難しいですね。

次回も頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7741w/>

---

5人の高校生活

2011年12月15日23時48分発行